

恋愛小説集

小春春斗

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは作者が

「こんな恋愛したかったなー」

などといった妄想を短編もしくはシリーズで書いたものを投稿していきます！

処女作なので温かい目で読んでいただけると嬉しいです。

R-15は予備です。

目次

後輩&先輩

後輩&先輩 1 1

後輩&先輩 2 5

後輩&先輩 3 11

後輩&先輩 4 18

4色Factors

プロローグ 21

1 25

2 31

3 35

4 41

5 51

6 64

最終回 67

夏の終わりの祭り

前編 72

後編 75

Pure School Love

1 77

2 80

3 84

最終回 87

Secret Connect Love

1 89

3	2	1		最終回	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		プロローグ		孤独だった勇者の物語	最終回	4	3	2
166	162	159		156	150	145	141	137	132	128	122	116	114	110	108		106	100	97	93		

後輩&先輩

後輩&先輩(1)

——放課後、学校の屋上で私は柵に寄りかかってブーツとしている。先輩が屋上のドアから入ってきて近づいてくるのにも気づいてなきそうなくらいに。案の定、先輩に肩を叩かれてびっくりしている。そんな私を見て先輩が苦笑いしてる。そして、

「あ、あの、先輩。一つだけ訊きたいことがあるんですけど……」

「ん？何を訊きたいんだ？」

「せ、先輩！わ、私のこと——！」

それから先輩が何か喋っていたが私が急に走り出してしまった。

あれ？これって——

……ジリジリ……カチャ

「う〜ん。なんか変な夢見た。……ん？今日は目覚まし一回で起きれたんだ。珍しいなあ。いつも3回鳴らないと起きないって言うのに。……って、あれ、この時間ならもしかしてもしかすると、先輩と一緒に学校に行けるんじゃないの!?早く準備しないとー！」

私はそう言うのとベッドから出て、グーッと伸びをすると、学校の準備を始める。

突然ですが、私には片思いの相手がいいます。幼馴染で一つ年上の先輩です。先輩は私を異性としてより、妹としてしか意識してくれてないだろう。だって、自分がモテないとか私に言ってくるんだよ！しかも、下級生から結構人気あるのも知らないくせに！ここにだって先輩を想っている人はいるっていうのに……。絶〜ツ対振り向かせてやるんだから！

さっさと学校に行く準備をして家を出て数分、1人で歩いている先輩を見つけた。声をかけようと思って駆けようとした。けど、急に声をかけたりして嫌われ……ないよね？先輩だし。でも、見つけたのに挨拶しないのも嫌だしなあ……。うん、ちゃんと挨拶しよ！

「おはようございます、先輩！偶然ですね！」

私は先輩へ駆け寄り、先輩の背中を叩きながら言った。

「お、おはよう。朝早いってのにテンション高いな」

「もちろんですよ！それに、今日は久しぶりに目覚まし一回で起きれたんですよ!?!テンション高くないわけないじゃないですか！」

私は笑顔でそう言いながら先輩の方を向いた。そしたら先輩はすぐ顔を逸らしてしまった。そして、先輩はそのまま、

「わかった、わかったって。…にしても、お前がこの時間にいるとか……明日また雨じゃねえよな？」

なんて失礼なことを言っただけで私の頭をわしゃわしゃしてくる。

「な、何するんですかー！」

「いきなり叩いてきたから仕返しだ」

としばらくじやれている(?)と、

「さてと、こんなことしてたら遅刻するかもしれないし、行くか」

「はい！」

先輩がさつさと歩き出したので私もその後を追いました。今日は偶々いつもより早く起きて、学校までの間に偶々先輩に会えたんだよね……。もしかしたらこんな機会もうないのかな……。うーん……。悩むくらいなら今しかないよね、うん！

「あ、あの、先輩！」

「どうした、急に」

先輩が立ち止まって振り返るとそう言って来た。うー、言ったものの怖い。

「あ、あの。き、今日の放課後って、じ、時間ありますか？」

「どうしても今日じゃなきゃ駄目なのか？」

「……はい」

「……わかった。部活あるけどちよつと遅れて行っても大丈夫か。それで、何の用だ？」

「その時に話します。屋上に来てもらってもいいですか？」

「わかった。できるだけ早くしてくれよ」

「はい！」

「ん。それよりも、そろそろ学校へ進まないと、予鈴に間に合わないかもしれないぞ。ほら走るぞ！」

「え、嘘！ま、待つてくださいいよー！」

先輩と約束できたのは良かったけど、こんなに走るなんてないよ！ちなみに、ちゃんと間に合ったよ。

「おーい、席に着け！終わりのショート始めるぞー！」

先生の声にハツとして時計を見ると、今日の最後の授業の終わりを指していて、えっ、いつの間に授業終わったの?!……びっくりした。って、そういえば、授業中ずつつつと放課後のこと考えてたんだっけ。授業の内容全く覚えてないやと慌てていると、

「おーい、もう教室の鍵しめるから早く出てくれ。もし残るんなら、鍵置いとくぞー！」

と先生に声をかけられた。

「で、出ます。出ますから、ちょっと待つてくださいーい！」

と慌てて言っただけで帰る準備をしていると、

「今日は一体どうしたんだ？授業中もボーツとしてたらしいじゃないか。いつもうるさいお前がどうしたんだ？相談くらい乗るぞー！」

と言われてしまった。

「な、何でもありません！先生、また明日！」

と先生を無視するように教室を出た。

教室を出ると私は、屋上に来ました。先輩が来るまで色んなことを考えた。どう言ったらいいのかとか、もし付き合えたらどれだけ嬉しいんだろかなとか。でも、それよりも、告白して、フラれて、今の関係が壊れたらどうしよ……なんて考えていると、

「おい、来たぞー！」

「ヒヤッ！せ、先輩！」

ついに、先輩が来た。

「そんなに驚くことか？それより、話って何だ？」

と、先輩から話題を振ってきた。

「えつとですね……」

今更後戻り出来ないよね、さすがに。もう勇気出さずしかないよね。

「おーい、どうしたんだ！」

「……よし！」

「ど、どうした？」

「あ、あの、先輩。1つだけ訊きたいことがあるんですけど……」

「ん？何を訊きたいんだ？」

「先輩！わ、私のこと、どう思ってますか！」

言っちゃったあああああ！ついに言っちゃったよ！

「ど、どうって？」

先輩戸惑っちゃってるし。最後まで言わないと。

「わ、私は、先輩のことが好きです！幼なじみとしてじゃなくて、一人の男の子として先輩が好きです、大好きなんです！！せ、先輩は、一人の女の子として私のことをどう思ってるんですか?!」

「……へ？お前が？俺のことを？好き、だって？」

「そ、そ、そうです！そ、それで、ど、どう、なん、ですか？」

後輩&先輩く2く

先輩がキョトンとしたかと思うとそっぽを向いてしまった。そんな先輩へ一歩踏み出して、もう一度訊いてみた。

「ど、どうつてな……」

「……（じーっ）」

私が近づいてさらに戸惑ったような先輩をじーつと見ると、何か決めたようにこちらを見て、

「すまん、全くそんなこと考えたことなかった。ただ、俺にとって幼馴染で年下だったからなんつうk「急にこんなこと言っていきなり返事欲しいとか厚かましいですよね！すみませんでした！私は用事を思い出したので帰ります！それでは、部活頑張ってください！」おい、ちよ……」

私から言い出したものの、先輩が言痛いことがなんとなくわかってしまつて、最後まで聞くのが嫌になつてその場から走り出してしまいました。

家まで全力で走つて帰つてくると、自分の部屋に駆け込みカバンを投げ捨てると、その勢いのままベッドにダイブしました。そして、

「うわああああ!!なんで逃げ出してんの、私！これじゃ、今朝の夢のまんまじゃん！ああー、もう、これから先輩とどう接したらいいの?!」

なんて足をバタバタ、ゴロゴロ転がってるもんだから、下から、

「うるさいー！少しはおとなしくしなさい！」

なんてお母さんから叱られてしまいました。ごめんなさい。

その日の夜、お風呂に入つて自分の部屋に戻つてからベッドの上で座りながら、

「そういえば、先輩、あの後なんて言おうとしてたんだろ……。私が思ったことと一緒なのかな。気になるなあ……。かと言つてこつちから聞くなつてできないし……」

なんてブツブツ言っているピコンとメッセージが届いたことを知らせる音がしたので、スマホを見ると、

「誰からだろ……つて、先輩から?!なんで、え？」

驚いてばかりもいられないので、とりあえず、内容を確認して見る。

『先輩：なんであのまま逃げたんだ？』

んー、なんとなく怒ってそう？とりあえず返事を

『私：す、すみません』

つい反射的に』

『先輩：反射的にねえ……』

『私：えっと、ほんとに用事を思い出しただけで』

『先輩：なら、今度の休み暇だよな？少し付き合え』

……へ？これって、いわゆるデートってやつじゃ……。確かに今度の休みは暇だし、先輩と出かけるなんて、嬉しいに決まってるんだけど、どういふことなんだろう？なんて考えていると、

『先輩：どうすんだ？』

なんて催促が来たので、

『私：行きます！』

『先輩：なら、9時に駅前に集合な』

『私：わかりました』

『先輩：それじゃ、おやすみ』

『私：おやすみなさい』

私の返事で会話が終わった。

「はあく、緊張したく。それにしても、先輩とお出かけか……楽しみだなあ」

なんて考えながらポフツとベッドに寝転がってスマホの先輩とのトーク画面を眺める。

「なんで、こんなこと言って来たんだろ。もしかして私のこと……。いやいや、全く考えたことなかったって言ってたし、どうせ妹としか思っただけだったとかっていうオチだろうし。でも、だったらなんでもんなこと……。うーん、今気にしても仕方ないよね、うん！よし、寝る！」

そう言ってスマホを充電器にぶっ刺して枕元に置くとそのまま目を閉じて襲いかかってくる眠気に身を任せた。

——一方その頃

「なんで俺はこんなこと言ったんだ……」

そう呟いた俺の手にはスマホのトーク画面が映っている。

「はあ、言っちゃったもんは仕方ないけど、これは、なあ」

俺は今日、幼馴染である後輩から告白された。俺自身、まさか告白されるとは思ってたなくてその時思ってたことをそのまま言おうとしたら途中であいつが、

『急にこんなこと言っていきなり返事欲しいとか厚かましいですよね！すみませんでした！私は用事を思い出したので帰ります！それでは、部活頑張ってください！』

なんて言って逃げ出してしまった。そりゃ、幼馴染で年下だから、妹としか思ってたんだけど、逃げるのはどうなんだよ、なんて少しイラつとしながらも部活に行った。部活も特に変わったこともなく終わって、家に帰って飯食って風呂入って現在に至るわけだが、

「本当になんでこんなこと言ってんだよ。これじゃまるで、俺があいつのこと気になってるみたいじゃねえか」

とぼやいてふとあいつのことばかり考えていることに気づいた。というか、気づいてしまった。まるで、なんかじゃなくて……

「俺はあいつのことが好きなんじゃねえかよ」

はあ、気づいてしまったからか変に恥ずかしくなってきた。

「…楽しみだな」

俺はそう言うスマホを充電器にぶっ刺して机の上に置いて目覚ましをかけると、そのまま目を閉じて襲いかかってくる眠気に身を任せた。

——翌日

「あー！なんで寝坊するのよ！昨日は早く起きたのにー！」

先輩とメッセージで話して寝たのがそこまで遅い時間でもないのに、あつさりと寝坊してしまった私は自分に対しての不満を口にしながら、学校まで全力で走っています。

「しかも、今日1限小テストあるのにー！しかも、あの先生、合格点に届かなかつたら再テストまであるのに！」

昨日はあれのせいで全く勉強できなかったから、朝から学校で

ちよつとでもしようと思つてたのにこれだし……。なんて思つてるうちに学校に着きました。靴を履き替えて教室に入って自分の席に着くと、なんとか間に合つたことにホツとして机にグダツと伏せました。

「ふうー、なんとか間に合つた……。とりあえず、テスト勉強しない——」

一息ついてすぐに体を起し、カバンから教科書を出してテスト勉強しようとしたところで、

キーンコーンカーンコーン……

「HR始めるから席につけよー」

とHR開始のチャイムがなり、先生が入ってきました。

「それじゃあ、連絡事項からなー。まずは——」

「あー……。今日のテスト終わった……」

先生が教壇で話し始めると同時にボソツと口にして、小テストが簡単なものでありますようにと心から祈りました。

——その日の放課後

「あー、終わった……。追試確定だよ、これ……」

机に突つ伏してグツタリしています。こうなつた理由はもちろん、今日の小テスト。元々そんなに勉強できないからこそ朝からしようと思つてたのに、それができなかつたから手応えがあんまりなくて、後日あるであろう追試のことを考えて鬱になっています。

「こんなうだうだしても仕方ないよね！追試になったらその時はその時で！」

過ぎたことだし、もう気にするのはやめようとして一人で納得すると、とりあえず教室を出ることにしました。

「今日は家に帰ったら何しようかなー。明日の授業は何も宿題はなかったよね、多分」

と家に帰る道すがらぶつぶつと言つて歩いています。傍目から見たら変な人ですよ、はい。

(……うん、ないよね！なら、この間買った漫画まだ読んでないし読もうかなー)

確かあの漫画、最近新刊出たばかりだし初めから読もうかな、なんて考えていると、先輩が歩いてるのを見つけました。声かけようかなって考えてると、先輩は家の方ではなく駅の方に向かいました。「あれ、先輩駅に用事あるのかな……。んー、なんか気になるし暇だしついて行ってみようかな」

となんとなく先輩に見つからないように後を追いました。

数分後、駅前に到着すると先輩は急にキョロキョロし始めました。
(誰か探してるのかな?)

なんて思った傍から、駅前の時計の前まで行くと、携帯をポケットから取り出していじり出しました。

「これは誰かと待ち合わせしてるよね……。相手は誰なんだろう」
物陰に隠れて呟きました。しばらく様子を見ていると、先輩がいる方に近づいていく女の人を見つけました。その女の人が声をかけると先輩は顔をあげて話し始めました。少ししてそのまま2人は近くのファミレスへ入って行きました。

「先輩が待ってたのって、あの人なのかな?……。もしかして彼女、とか? いやいや、ないよね、うん。もし本当に彼女がいるとかだったら、あの時にちゃんと言ってくれてた、と思、うし……」

って言いかけてあの日のことを振り返ってみる。

『すまん、全くそんなこと考えたことなかった。ただ、俺にとって幼馴染で年下だったからなんつうk『急にこんなこと言っていきなり返事欲しいとか厚かましいですよね!すみませんでした!私は用事を思い出したので帰ります!それでは、部活頑張ってください!』おい、ちよ……』

「ってー私、途中で逃げてんじゃん!」

振り返った結果、頭を抱えてうずくまった。

「……ハア。今更言っても仕方ないよね。それにしても、先輩たちファミレスに入って何してるのか気になるなあ……。でも、うーん……」

ため息を吐いて立ち上がって先輩たちが入ったファミレスを見ながら入るべきかうんうん悩んで、

「……うん、入るのやめとこ。なんか真面目な話だったら悪いし。それに、次の休みにでも聞けると思うし！よし、それじゃ、帰ろう！」
私はそのまま回れ右をしてきた道を帰りました。

後輩&先輩く3く

——そして、休日

ピピピピ……………

「うーん…………。んー、うるさいなあ…………」

なんて寝ぼけながらアラームを止めると体を起こして伸びをした。

「んー…………、ふう。先輩と出かけるのって今日だったよね。今何時…って、嘘！なんでこんな時間なの?!」

8時50分を示している時計を見て一気に目が覚める。

「服は準備できてるし、カバンも大丈夫。後は…………」

と言って鏡を見る。

「っ!!」

声にならない絶叫をしてしまった。そこには、普段よりも寝癖がひどく、ゴワゴワになっている髪の毛の私が鏡に映っていた。

「え、え？なんで？昨日、ドライヤーしてからクシでもちゃんと梳いたのに！もー、これ直してたら絶対に間に合わないじゃん！」

そう言うや否やクシで髪を梳き始める。でも、

「あー、なんでこういう時に限ってクシの通り悪いの！」

悪いことが起こるときに限って悪いことが重なるみたいで、中々寝癖が直らない。

「とりあえず、ある程度マシになったからゴムで結んで…………うん、まあ大丈夫だよね！」

そう言っつて鏡から顔を上げ時計を見ると8時55分を示していた。そういうえば、家から駅までつてどう頑張っても15分はかかるような…………、

「つて、どうやつても遅れるじゃん！ちよつとでも、早くしないと！」

そう言っつて昨日準備していた服をさつと着てカバンを持つと、バタバタと急いで玄関まで向かう。そして、

「いっつてきますー！」

と靴を履きながら言っつて、履き終わるとすぐにガチャとドアを開けて家を飛び出した。

「つたく、何やってんだあいつは。9時過ぎてるし、また寝坊か？」

俺は改札前の柱にもたれかかってスマホを確認しながらぼやいた。普段からよく寝坊してるしなあいつ。まあ、多分今日もそうだとして、そろそろ……

「せ、せん、ぱい。お、おまたせ、しました……。ハア、ハア」

ほら、来た。

「いや、これぐらいなら予想してたし、気にしないでいいぞ。それより、ちよつと休むか？」

「ハア、ハア、……スー、ハー……。もう大丈夫です、先輩。改めて、おはようございます。そして、遅れてすみません」

「おう、おはよ。それとさつきも言ったけど気にしないでいいって。大丈夫なら行くぞ」

そう言つて改札の方に歩き出すと、すぐに後ろをついて来た。

「それで先輩、今日はどこに買い物に行くんですか？」

ちよつどホームに来た電車に乗り、並んで座るとそう訊いて来た。

「隣のショッピングモール。ちよつと買いたいものがあつてな、そこでしか買えないんだよ。」

「そうだったんですね。それなら私のお買い物にも付き合ってもらつてもいいですか？ちよつと色々と買わないといけなくて……」

「まあ、それくらいならいいぞ。なんなら荷物多くなるんだつたら持つし」

「ほんとですか?!」

「ああ」

「楽しみだなあ〜」

なんて話しながら目的地まで時間を潰した。

そして数分、隣のショッピングモールに到着しました。

「さて、着いたわけだが、俺の買い物は後でいいからお前のから回るか？」

と先輩が案内板を見ながらそう言ってきました。

「いいんですか!？」

「いいぞ。それで、どこの店に行きたいんだ？」

「えーつとですね……。新しい本と服を見に行きたいですね。服はウニクロでもいいかなって思ってます。先輩は何を買うつもりだったんですか?」

「俺か?俺は部活で使うもので足りないものをな。んー、先に本屋行くか。それより後はその都度決めればいいだろうし」

「はい!それじゃ、行きましょう!」

「って、おい、引っ張るな!自分で歩ける!」

私はそう言っ先輩の腕を掴むと引っ張って目的の本屋に向かい始めました。

本屋について面白そうな本を買おうと、私たちはそのままショッピングモールをぶらぶらし始めました。服屋では恥ずかしかつたけど私が選んだ服を先輩に見てもらって可愛いって言ってもらえた服を買ったり、逆に私が先輩の服を探してみたりしました。そして、

「はあー、楽しかったですね、先輩!」

「まあまあな」

時間は夕方、ショッピングモールを出て帰りの電車に乗っています。

「それにしても、あつという間に帰りの時間になってしまいましたね」

「だな」

「……」

「……」

会話がなくなってガタン、ゴトンと電車が走る音だけが響いている。しばらくして私たちの最寄り駅に電車が着き、電車から降りて改札を通り、いざ別れようとした時、

「……なあ、まだ時間あるか?」

と先輩から呼び止められた。

「……へ?」

「だから、この後まだ時間あるのかって聞いてるんだよ。それでどうなんだ?」

「あ、は、はい。まだ大丈夫ですけど……」

「なら、ちよつと寄り道していいか?」

「は、はい」

「なら、行くぞ」

そう言うのと先輩は私の手を握って歩き始めました。

先輩に手を引かれて連れて来られたのは――

「こんな時間に来ちゃって大丈夫なんですか？それに休みだし」

「大丈夫だろ。別に部活で忘れ物を取りに来たって言えば」

「そんなものですかね」

「そんなもんだろ」

そう、学校です。私は何か守衛さんに言われなにかヒヤヒヤしてましたが、先輩が言った通り、忘れ物を取りに来たと言うとあっさりと通してくれました。そして、そのまま校舎に入り、靴を履き替えると、「寄り道って学校だったんですね。何か本当に忘れ物したんですか？」

「んー……忘れ物っちゃ、忘れ物だな。お前の」

「え？どういう――」

「ほら、こっちだ」

「んー、私忘れ物なんてしてたっけ……。って、あ、待ってくださいよ！」

忘れ物なんてあったかなと考える私をよそにさっさと歩き出した先輩の後を追いかけます。そして、

「ほら、着いたぞ」

「ここ、ですか？」

「ああ、ここだ」

私たちは屋上に来ました。んー、私、ここでなんか忘れ物したっけ……。んー、あの日なんか落としていったのかな……。なんて考えながら先輩の方を向くと、

「お前、本当に覚えがないのか？」

「え、ええーと、はい」

何故か先輩が呆れた視線を私に向けているのを見てしまいました。……。そんな目で見られても、本当に心当たりないんですってば、先輩！と心の中で思っ、そのまま言っつてしまおうと思っ、口を開こうと

すると、

「返事」

「ッ?!」

「告白の返事。お前、この間は途中で逃げただろうが。だからお前の忘れ物」

「えーっと、それは、そのー……」

思わず視線をそらしてしまった。確かに、そう考えれば私の忘れ物なんだろうけど……。

「今日は逃げんなよ?次、返事欲しいって言われても絶対言わねえからな?」

「……先輩」

「ん?」

「この間は途中で逃げちゃってごめんなさい。なんか答え聞くのが怖くなってつい……」

「ついで逃げられる側のことも考えてくれよ」

「本当にごめんなさい!」

そう言って勢いよく頭を下げました。ちよつとして、

「あははは!怒ってねえって。ひー、おかしい!」

なんて聞こえてきたので、頭をバツとあげて先輩を見ると、お腹を抱えて笑っていました。

「そんなに笑うってひどくないですか、先輩!すつごい怒らせたって思っただのに!」

って言って先輩に詰め寄りました。すると、手首を掴まれて先輩の方に引き寄せられたかと思いきや、立ち位置が入れ替わって私は壁に押し付けられてしまいました。

「え?ちよ、これ」

なんて今起こった展開に戸惑っているのと、

「一回しか言わねえから、ちゃんと聞けよ」

なんて先輩が真剣な顔で言ってくるので、急に顔が熱くなってしまいました。

「……」

「……。この間も言った、てか言いかけたけど、俺にとって幼馴染で年下だったから妹みたいな存在だと思ってた。この間までは」

「この間、までは？」

先輩の言い方がなんか変でついつい繰り返してしまいました。この間までつて……。どういうことだろ？

「ああ。そのときにお前のことを一回幼馴染ってこと抜きで女子としてどうなんだろ、って考えたんだよ。それでな、お前って寝坊ぐせさえなければ、一緒にいて楽しい奴なんだよな。それに……」

「それに？」

言い淀んでしまう先輩をちよつと期待を込めた瞳で見ている。先輩は気まずい顔をして、

「そ、それにその、か、可愛いし／＼／」

なんてそつぽを向いて言うものだから、余計顔が熱くなってしまいました。

「あ、ありがとう、ごぎいます／＼／」

「……。コホン、とにかくだ。お前のことを可愛いくて、一緒にいて楽しい奴とは思ってるんだ、幼馴染抜きで。んで、次にお前が誰かと付き合ったらどうなんだろって考えたんだ。お前に自覚ないかもしれないけど、他の奴からも結構人気あるみたいだから。それで考えたらなんか嫌だったんだよ。お前が誰かと付き合うって考えると」

「……。え？」

え、え？先輩、今なんて言った？私と先輩以外の誰かが付き合うって考えたら嫌って……。え？それって、

「やつと分かったんだよ」

そう言っつて私を抱き寄せると、

「……。あ」

「好きだ。好きなんだ。俺は、お前が」

「……。嘘？ですよね？」

「嘘なんかじゃない。一人の女の子としてお前が好きなんだ」

私は先輩の体を押しして離れて、

「じゃ、じゃあ、この間一緒に駅前のカフェに行った人って誰なんです

か？」

と聞きました。先輩は一瞬考えると何か納得したような顔になつて、

「ああー、見られたのか。あいつはただのクラスメイト。ちなみに、あいつ彼氏もいるし、お前の思っているような関係じゃないぞ？」

「へ？」

「あの日はただ相談に乗ってもらってただけ。それに、友達も別に呼んでたから二人つきりってわけじゃなかったし」

「そ、それじゃ」

「そう、お前のはやとちり。聞きたいことはそれだけか？」

「え、えつと……」

「無さそうだし、改めて——」

と言って手を私に伸ばし、

「俺と付き合ってくれるか？」

「——はい。はいっ！」

その手を取る代わりに先輩に飛びつきました。

「うおー！」

「先輩、先、輩……。嬉しい、です、私。先輩に、好きって、言ってもらえて……。私、私も、先輩のことが好き、です。よ、よろしくお願

いします、先輩」

「ああ、こつちこそよろしく」

そう言っちよつと苦しいくらいに抱きしめてくれました。

後輩&先輩く4く

「送ってもらって、ありがとうございます、先輩」

「気にすんなよ。付き合ってるんだし」

「は、はい……」

あの後、

『…あの、先輩』

『どうした?』

『こんな風に抱きしめてもらってるのは嬉しいですし、ものすっごいドキドキしますし、離れたくないって思ってるんですけど、あの、その……』

『…これ以上遅くなるのも悪いし、そろそろ帰るか?』

『っ!は、はい!』

といった感じで今に至ります。しばらくして十字路に差し掛かって、

「そーいや、こっちであってるよな?」

と私の家への道を指しました。

「はい!でも、ここまでで大丈夫ですよ?先輩あつちですよ?」

最後まで送ってくれようとしているのはすごい嬉しいけど、なんだか申し訳なくて断るのに、自分の家の方向に続く道と別の道を指さしました。

「ん、そうだが気にしなくていいぞ。それより、そっちは門限とか大丈夫なのか?もう7時とかだけど」

「あ、はい、先輩と出かけるって言ったたら『楽しんでらっしやい。帰り遅くても大丈夫だからね』って言われちゃいました」

「……」

先輩が呆れたように頭を横に振りました。そして、

「……おばさんに言っておじさん言いくるめる手伝いしてもらうか」

「なんか言いました?」

「家まで送るって言ったんだよ。ほら、行くぞ」

「は、はい！」

なんか誤魔化された気もしたけど、さっさと歩いて行ってしまおうのでとりあえず追いかけてきました。

それから少し歩くと、私の家につきました。

「着いちゃいましたね」

「そうだな。それじゃ、また明日……つと、忘れてたわ」

「?どうしたんですか?」

「明日朝、あそこの交差点で待ってるから、一緒に学校行こうぜ」

「は、はい!いいんですか!」

「いいから言ってるんだよ。寝坊したら置いてくからな」

「うう……。わかりました。それじゃ、先輩、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

そう言っただけで先輩は来た道の方を向いて歩き出しました。その姿が見えなくなるまで見送って私も家に入りました。

「ただいまー」

「おかえり。意外と早かったのね。それで、先輩とはどうなったのかな?」

「え、えーつとそれはその……」

「うまくいったんでしょ?そうじゃなきゃ、こんな時間まで帰ってこないってことないだろうし」

「／／もう部屋に戻るから!」

凶星をつかれてしまっただけで恥ずかしくなった私はお母さんを見捨てて部屋に戻りました。

そして、翌日、

「ああー!!寝坊した!先輩と一緒に行く予定なのに!もう行っちゃったかな?」

案の定、寝坊した私は慌てて家を飛び出して待ち合わせ場所まで走っています。待ち合わせ場所に着くと、先輩はまだいました。

「お、おはよう、ございます」

「やっぱり寝坊したか。残念だが、走らないとHRに間に合わないな。ほら、行くぞ」

「は、はい」

そう言っって先輩と並んで走り出しました。

4色Factors プロローグ

中1のとき、親が再婚し私——望月咲愛は相手方の連れ子の結兄——
望月結叶の義妹になった。

初めて会ったとき、結兄が気になって仕方なかった。お父さん以外の男の人としかも同い年（誕生日はあっちの方が先だけど）とあまり話さなかった私にとってはそれが好奇心からだったのか、はたまた別の何かだったのかはその当時の私に聞かないと分からないけど。と
りあえず一緒に暮らしてきた。

そして、高2の春——

「ねえ、結兄、お願いがあるんだけど……」

この一言から物語は動き出した。

高2の春、星条高校の掲示板の前、

「あ、結兄、結兄！また同じクラスだよ！」

「ああ……、そうだな。にしても、高校入ってから連続とは……」

私の横でそう言ったのが義兄の結兄だ。そして、

「お、お前からまた同じクラスなのかよ（笑）普通、兄妹ってクラス分けられるもんじゃ無かったっけ（笑）」

「そこら辺は決まってるみたいですよ。私たち4人はまた同じクラスですし」

と話1年のときからの友達鈴ちゃん——沢井鈴と結兄の友達の
滝沢くん——滝沢正輝が話に混ぜてきた。

「これから1年よろしくね、鈴ちゃん!!」

「はい、咲愛ちゃん！」

「よろしくな、正輝」

「おうよ、親友！」

そうして私たちは教室へと向かった。

その日は始業式をして自己紹介だけで学校が終わり、私と結兄は家に帰る前にスーパーに寄っていた。

「咲愛、今日の昼飯は弁当買って帰るとして、夕飯は何食べたい？」

「ん〜、唐揚げ……かな」

「咲愛はほんとに唐揚げ好きだよな〜」

と言いながら鶏ムネ肉と付け合せの野菜を買い物カゴに入れていく。

「だって結兄の作る唐揚げ美味しいんだもん！」

「はは、そりやどうも。咲愛は料理以外の家事出来んの、何でなんだろうな」

「う、うるさい！お弁当先見てくる！」

「あ、ついでに俺の分も頼むわ」

「はい」

そうして、買い物を終えて家に帰ってからお弁当を食べ、明日の休み明けテストの勉強をした。

その夜、

「ふー、ごちそうさまでした。いつもご飯作ってくれてありがとう、結兄」

「いえいえ、こんぐらいどうってことないさ」

「私が料理出来たらいいんだけど……。それに、他に料理出来る人は夜遅くまでいないからね。あ、後片付け私しとくから置いていてね」

「それじゃ、お言葉に甘えて。勉強してくるわ」

そう言っただけで結兄はそのまま部屋へ向かった。

私は洗い物を済ませてお風呂のお湯を入れ始めてからリビングでテレビを見ながらくつろいだ。しばらくして、お風呂にお湯が貯まったので私が入り、お風呂から出ると少ししてから結兄が入る。またリビングでくつろいでいると結兄がリビングに入ってきた……上半身裸のまま。

「つて、な、な、なんで上の服着てないの?!」

「ああ、すまん、すまん」

と言いつ、キッチンの方へ行くと冷蔵庫を開け、牛乳を出し、コップに入れると一気に全部飲み干した。

「それ、ほんと好きだよね」

呆れ気味に言うつ、

「別にいいだろ、咲愛になんか害がある訳でもないし」

と言つて服を着ると私の隣に座つてテレビを見始めた。

「ねえ、結兄、お願いがあるんだけど……」

「お願い?別にいいけど、咲愛にしては珍しいな」

「むう……、別にいいでしょ!それで、内容なんだけど……」

「おう、なんだ?」

「私たちが相談室みたいなのしてみたいんだけど……ダメ、かな?」

「……は?」

私の言つたことが突然過ぎたみたいで目を丸くして聞き返してき
た。

「だーかーらー、相談室だよ、相談室。恋愛とか、悩みとか聞いてアド
バイスあげるあの相談室!」

「いや、それは分かつてるんだが……なんでまたそんなこと……」

「いいじゃん、結兄つて色んな人からよく相談されてるんだし、ね?」

「まあ、それもそうだが……」

「お願い!」

「……はあ、うちのクラスだけだぞ?」

と洩々という感じだけどOKしてくれた。

「ありがとう、結兄!後、テスト終わつてから始めるつもりだから、結
兄がLIMEで言つといてね?」

「なんで俺が……」

「それじゃ、そういう事で!おやすみ、結兄!」

「お、おやすみ」

私はそう言つてさっさと自分の部屋に入った。

◆ ◆ ◆

咲愛がリビングから出た後、1人残された俺はまだ思考が追いついていなかった。

「なんでまたあんな事言い出したんだよ……全く。まあ、咲愛のお願いだし、いいか。我ながら咲愛に甘いもんだな」

と1人眩きリビングを後にした。

翌日のテストが終わり、

「ねえ、ねえ、咲愛（結叶）が相談室始めるって本当なの（なのか）?!」

「そ、そうだけど……」

といきなり聞かれた。

「でも、クラスの人に対してだけだよ?」

と私が、

「他のクラスの奴に言わないようにしてくれよ」

と結葉が続けて言うのと、

「はーい」

と皆揃って返事をした。

その日の放課後、

「ふー、まさかあんなに相談持ちかけられるとは思わなかったよ」

「あ、ああ、そうだな。流石に疲れた」

私たちは教室でぐったりとしていた。

「初日だからあんまり来ないと思ってたのに……」

「そうだな。しかも、ほとんどが恋愛相談だったからな」

などと2人して愚痴をこぼしていると、

「よう、咲愛ちゃんに結叶、随分お疲れのようだな」

「大丈夫ですか?」

と鈴ちゃんと滝沢くんが教室に入ってきた。

「2人ともどうしたの? あ、もしかして……」

「ち、違うぞ? オレはお前らをからかいに「よし、なら帰れ」いやいや、そんなあつさり帰そうとすんよ!」

と結兄と滝沢くんが小競り合いを始めたので私は、

「それで、鈴ちゃんはどうしたの?」

「えっと、相談に来たんですけど……疲れてそうですからまた明日――
――大丈夫だよ! 鈴ちゃんの相談ならいつでも聞くよ! それでどんな

内容なの?」あ、あの、ここじゃ話にくいのでどこか別の場所でもいいですか?」

「うん! 結局、私は鈴ちゃんの相談受けるから、滝沢くんの方お願いね。終わったら先帰ってくれてもいいから。さ、鈴ちゃん行こっか」

「はい!」

そう言っただけで私たちは教室から出て人影の少なそうな場所に向かった。

しばらくして、私たちは近くの喫茶店へ来ていた。

「さて、どんな相談なのかな?」

と私が少しニヤニヤしながら訊いた。

「あのですね……わ、わたし、滝沢くんとお付き合いしたいなど考えています……」

と鈴ちゃんが顔を赤くして俯いて言った。

「そんなところだろうと思ってたよ。だって、鈴ちゃんって1年の頃から滝沢くんの事好きだったもんね」

「え、え! な、なんで咲愛ちゃんがそれを知ってるんですか?!」

と言うと鈴ちゃんはさらに顔を赤くしてしまった。

「それで、どんな所を好きになったの?」

「……1年の2学期ぐらいからですけど、わたしが日直だったり、掃除当番だったりした時に毎回手伝ってくれるようになったんです。今まで話したことも無かったんですけど、それを機に話す機会が増えていきます……」

「いつの間にか好きになってたんだね」

「……はい」

「あれ? でも滝沢くんも多分相談に来たんだよね?」

と言った途端、鈴ちゃんが顔を上げてこちらを真っ直ぐ見てきた。

「そうなんです……。もし、滝沢くんも恋愛についての相談をしているのなら、好きな人がいるってことです……。よね。わたし、どうしたらいいんでしょうか……」

「滝沢くんがどんな相談してるか分からないけど、そんなに簡単に諦めちゃダメだよ！」

「さ、咲愛ちゃん？」

私が急に強く言ってしまったことに驚いた鈴ちゃんが不思議そうにこちらを見た。

「ご、ごめんね？でも、伝えたくても伝えられない人もいると思うから、ね？私はどうであれ鈴ちゃんの恋が実るように頑張るよ！」

「ありがとうございます、咲愛ちゃん！それにしても、咲愛ちゃんがそう言うなんて驚きました。全く聞かないですけど、咲愛ちゃんにも好きな人が——」

「いないってー！」

「……そうですか。咲愛ちゃんも何か悩み事があつたら言ってくださいね」

「ありがとう、鈴ちゃん！大好き！」

「わたしですよ、咲愛ちゃん！」

それから店を出た私たちはそれぞれの帰路についた。

◆ ◆ ◆

咲愛達が教室から出て足音が聞こえなくなった途端、

「結叶おっつ!!オレは、オレはどうすればいいんだよ!!」

と正輝がいきなり抱きついてきた。

「ちよ、お前離れろ！暑苦しいわ！」

「ス、スマン」

と言つてすぐ離れた。

「……フウ、それでホントは何を相談してきたんだ？」

「オレ、相談しに来たのはいいものの、マジでヤバイかも……」

「……ヤバイ？何がだよ……」

正輝は何かに苦しんでいるように俯いたまま言った。

そして、真剣な顔で俺を見ると、

「オレ、沢井さんの事が好きだ！」

「うん、知ってる」

「反応薄っ!!」

「いや、だって毎日沢井さんのことみて『オレ、あんな子と付き合いたいなく』とか言ってただろ……それに、1年の時なんか事ある事に沢井さんの手伝いしてただろうが」

「うっ、そ、そうだが……」

「沢井さんもなんか相談しに来てたみたいだな」

と言うと、

「そうなんだよ!!オレ、沢井さんの事が好きなのに、沢井さんも相談しに来てたってことは、好きな人がいるかもしれねえって事だろお!!」

「まあ、そうなるわな」

気の毒だな。好きだって言ってた人に好きな人がいるかもしれないって分かったんだから——でも、男なら……

「おい、正輝」

「なんだよ、結叶。傷心のオレをさらに虐めようってのか?はは、オレって間接的に沢井さんにフラれたもの——」

「甘ったれるな正輝!!お前の沢井さんへの気持ちはそんなもんじゃないだろう!!」

「……へ?」

「好きな人に好きな人がいたとしても告白する、それが男つてもんじゃねえのかよ!!」

——俺はこう言っつていいんだよな?

「ゆ、結叶……!そう、そうだよな!サンキュ!!オレの友がお前で良かったよ!おかげで告白する決心ついたわ!なんかあったらまた相談しに来るかもしれねえけど、その時はまた頼むぜ!それじゃ、またな!」

「お、おう!応援してるぜ!」

胸に何か引つかかりがあるような気がする。でも、俺はそれが何なのか気づかないまま正輝を送り出した。1人教室に残された俺は、

「…フウ、買い物して帰るか」

と呟き教室を出た。



鈴ちやんと喫茶店で話してからの帰り道、

「はあく……なんであんな事言っちゃったんだろ……。ああ言っちゃったら自分も好きな人います！って宣言してるようなものじゃない。はあ……」

とトボトボと歩いていると、

「おーい、咲愛〜！」

「ゆ、結兄！き、先に家に帰ってるもんだと思ってた」

「いやー、途中買い物しにスーパー寄ってて。そうだ、今日の晩御飯はうどんだけいいか？」

「うん！」

そう言っただけで私たちは揃って家に帰った。

晩御飯を食べ終えて後片付けをしていると、

「相談どうだったんだ？」

と結兄が尋ねてきた。

「えっとね、私たち、去年も同じクラスだったでしょ？元々気になってたらしいんだけど、滝沢くんが鈴ちゃんを手伝うようになってから話す機会が増えていつの間にか好きになってたんだって。それで滝沢くんに告白したいけど、どうしようって内容だったよ」

「……は？」

「今日、滝沢くんも何か相談に来てたでしょ？それでどうしたらいいんだろうってさ。結兄はどんな相談されたの？」

「ちよ、ちよつと待て、それホントか？」

「そうだけど……それがどうかしたの？」

「いや、正輝は沢井さんが好きで告白したいって相談に来たんだよ！」
「……え？え、ちよつと、え？なに、2人は両想いなのにそれを知らずに相談しに来て、お互いに誰か好きな人がいるって勘違いしちゃってるってことなの？」

「そうなるな、うん」

「……えー……！！」

状況を理解した私は、夜だということにも関わらず叫んでしまっていた。結兄は、

「シイーツ！夜だから、な？ちよつとは考えろよ？」

「ご、ごめん……」

「それにしても、凄く偶然だよな」

「そうだよね。……これからどうしようか……。2人に両思いだからさつさと付き合っちゃえって言うのは……」

「いや、流石に無理があるだろ。でも、どうにかしてやりたいよな……」

「だよね」

と言つて2人揃つて頭を抱えた。そして、少し落ち着いてからふと疑問に思つたことを聞いてみた。

「それにしても、結兄がこんなに熱心になるなんて珍しいもんだよね」

「そ、そんなことはねえ……。ぞ？そう言う咲愛だつてそこそこはりきつてるじゃねえか」

「ん〜……。そうなのかな？私はいつも通りのつもりなんだけど……」

「そ、そう……。か。ま、まあとりあえず2人の事きちんとしてやらないとなー」

「そうだね！……。あ、お風呂にお湯溜まったみたいだし、先入ってくるね」

「おー」

私はそう言つてお風呂へ向かった。そして、お風呂から出るとすぐに部屋へ戻つて寝た。



翌日の放課後、帰りの支度をしていると、

「すくずちゃん！一緒に帰ろ？」

と咲愛ちゃんが声を掛けてきた。

「はいーちよつと待つてくださいいね」

「うん！……ねえねえ、結兄も一緒に帰る？」

「ああ、うん、いいぞ。正輝も一緒にどうだ？」

「オウ！帰りどっか寄るか？」

どうやら、望月さんと滝沢くんも一緒に帰るみたいです。

「んー、私も結兄も大丈夫だけど、鈴ちゃんはどうする？」

「わ、わたしも今日は特に何も無いので大丈夫ですよ」

と言つてカバンを持って立ち上がるのを見た咲愛ちゃんが、

「よし、それじゃ、行こっか」

「二はい！（オウ！）」

こうしてわたし達は4人で寄り道をして帰ることになった。

いつもは私1人で歩いている通学路も咲愛ちゃん、望月くん、そして片想いの相手の滝沢くんと一緒にだとなんだか少し違うように思っています。しばらく歩いていると、

「あ、クレープの屋台だ！みんなで食べようよ！」

今日はいつも通る広場にクレープのワゴンが来ているのを咲愛ちゃんが見つけて食べに寄ろうと言いました。

「別にいいぜ、な？正輝」

「オウ！」

「鈴ちゃんは？」

「いいですよ。クレープなんて久しぶりですから」

と言うことで、寄ることになりました。それぞれ好きなものを買って、近くのベンチで座って食べました。食べ終わりゴミをくず箱に捨ててから移動してしばらく歩くと、

「あ、私と結兄はこっちの道だからここまでだね。鈴ちゃんは帰りどっちなの？」

「そうだな。正輝は帰りどっちだったっけ？」

「わたしはこっちですね」

「オレ？オレはこっちだな」

「え……」

とわたしと滝沢くんが指したのは同じ方向でした。ビックリして滝沢くんの方を向くと、ちょうど滝沢くんもこちらを向いていました。

「そ、そうだったんだ。アハハ……」

「は、はい／＼／」

となんだか照れくさくなってしまい顔を背けてしまいました。そうしているとき、咲愛ちゃんが、

「それなら、滝沢くんが鈴ちゃん途中まで送ってあげるのはどう？」

「あ、ああ。そ、そうだよな、うん。じ、じゃ、途中まで送ってくよ、沢井さん」

「あ、ありがとうございます、た、滝沢くん。そ、それでは、また明日、咲愛ちゃん、望月くん」

「うん！また明日ね〜2人とも〜」

「また明日な」

「じゃあなく、結叶、咲愛ちゃん」

そう言って咲愛ちゃんと望月くん、わたしと滝沢くんそれぞれ、帰路に着いた。

△ △ △

パツと見はいつも通りにしてるつもりだけど、内心は結構緊張していたりする！なんせ、

「か、帰り道一緒なんて、き、奇遇だよな〜」

「そ、そうですね。奇遇ですね」

片想いの相手の沢井さんと一緒に帰ってるからさ！それにしても…会話が弾まない！！そもそも、誰かと一緒に帰ること自体ほとんどない経験ないし、ましてや好きな人なんてたまったもんじゃない！

お互いの距離がぎこちなく開いたまま橋の上を歩いている。何か話題になりそうな事は……と周りをキョロキョロしながら歩いていると夕日が目に入ってきた。そこで、

「この橋からさ、夕日がキレイに見えるよな！」

と話を振ってみた。すると、

「え？……あ、本当ですね。この橋は通る事がないんですけど、こんなふうに夕日が見られるんですね。知らなかったです」

「そ、そうだったんだ。実はここ、オレの秘密の夕日の絶景スポットなんだ！」

そう言つて沢井さんの方を向くと、橋の手すりの近くまで行つて夕日を見ている横顔が見えた。風が吹き、彼女の髪がなびく。柔らかな香りが少し涼しい風に乗つてこちらまで来る。夕方になって少し寒いはずなのに、オレは体の芯から何故か熱くなっている。沢井さんはオレの想いなんて……。でも、それでも……と考えていると、

「あの……なんでわたしに教えてくれたんですか？」

と夕日を見たまま訊いてきた。

「え、えくつと、それは……その……と、友達には教えてるんだ！この事、結叶にも言ったことあるし！」

と言つてすぐに後悔した。咄嗟に口から出た言葉だったが、まるで沢井さんは友達だと言つてるような言葉だった。溢れてきた冷や汗はオレがさらに緊張していると告げている。沢井さんは俯くと、

「……そ、そう、ですか……わたしは友達、なんですね。も、もうここまで大丈夫です。それではまた明日、滝沢くん」

そう言つて来た道の方を向いてまくしたてるように行つてしまった。そんな沢井さんを見て慌てて、

「待ってー！」

と言つた。でも、振り返ることなくそのまま走つて行つてしまった。

「くそっ、こんなつもりじゃ……」

と言葉がこぼれ落ちた。



滝沢くんにとつてわたしは友達でしかないという雰囲気のことを聞いたわたしは、

「……そ、そう、ですか……わたしは友達、なんですね。も、もうここまで大丈夫です。それではまた明日、滝沢くん」

と言って来た道の方を向いてまくしたてるように言ってしまった。そして彼が、

「待ってー！」

と言ってきた。その声に振り返りかけました。でも、こんな、今にも涙が溢れだしそうな顔を見られたくなくてそのまま走り去りました。そのまま家まで走って帰り、すぐ部屋に入ると、制服のままベッドへ倒れこみました。そして、

「う、うう……」

家の誰にも聞かれないように枕に顔を押し付けたまま泣いてしまいました。

泣き止んで時計を見ると、既に12時を回っていました。ご飯も食べる気になれ無かったのでとりあえずお風呂に入ることになりました。お風呂から戻ってきてスマホを見てみると、

『今日はどうだった?』

と咲愛ちゃんからメッセージが届いていた。それを見てまた涙が出そうになったが、どうにかして堪えると、

『明日の朝、相談したいことがありますので、教室にいつもより早めに来てくれませんか?』

とメッセージを送った。すぐ既読になり、

『わかった』

と返事が来た。

『ありがとうございます』

と返事するとすぐ携帯の電源を切り、眠りに落ちていった。

△ △ △

「よお、正輝。どうしたんだ、こんな朝早くに呼び出してくるとか」

翌日、オレは朝早くに結叶を校舎裏へ呼び出していた。

「結叶、聞いてくれ！じ、実は……」

昨日の事は自分が悪いってのはわかっているんだが、一人でウジウジ考えてたらどうにもならなくなったんだよな……そこで、結叶に簡単に事情を話して何かアドバイスを貰えないかと思っていたのだが……

「お前、馬鹿だろ。そりゃ、お前が悪いわ」

返ってきたのは辛辣な言葉だった。

「そんなぐらい分かってる！……分かってんだよ……」

「どうどう、今更焦ってもなんも変わんねえだろ」

「……それもそう……だな。ハア……、恋って難しいんだな……」

……言葉一つ間違えただけでこんなにも複雑な気持ちになるとは……

「なに、ふ抜けたツラしてんだよ、正輝。まさか、諦めるとか言わねえだろうな？」

「まさか、そんな訳ねえだろ！」

「なら、しっかりとしろ！お前なら、大丈夫だから、な？」

「お、おう。サンキュな、結叶！」

淡々と話す結叶がとても大人っぽく見えてしまい少し悔しかったがそれが今はありがたかった。

「……オレ、もうちよい頑張ってみるわ」

「その意気だぞ」

と背中を叩かれた。まあ、こうして相談に乗ってくれてる友人ってこののはやっぱりいいもんだな！

◆ ◆ ◆

昨日の夜、鈴ちゃんに滝沢くんと何か進展があつたかどうか聞こうかとメッセージを送ると、明日相談があるから朝早くに教室に来て欲

しいと言われた。これは何かあったと思いすぐに了解と伝えた。そして、今日は普段よりかなり早くに教室へと向かった。そして、鈴ちゃんの姿を見つけると、

「昨日、あれから何があったの」と前振りナシに訊いた。

■ ▲ ▲ ▲
わたしが教室で待っているとパタパタと廊下から聞こえてきました。そして、教室に咲愛ちゃんが入ってくると、

「昨日、あれから何があったの」と訊いてきました。

「実は……」

わたしは昨日咲愛ちゃん達と別れてから何があったのか全部話しました。

「咲愛ちゃん……わたしはどうしたらいいんでしょうか……。このまま滝沢さんと友達でいいといけないのでしょうか……」

と言ってしまった。そんなわたしを見て、咲愛ちゃんが、

「……ねえ、鈴ちゃん」

と話しかけてきました。

◆ ◆ ◆

私は鈴ちゃんの話聞いて滝沢くんの意気地無しとと思ってしまった。照れ隠しだからといって友達にしか教えてないとかはダメでしょ、うん。こっちは2人が両想いって知ってる訳で、この事を今鈴ちゃんに言っちゃうと余計話がややこしくなるんだろうな……とりあえず、励まさないと

「……ねえ、鈴ちゃん」

「な、なんですか?」

「鈴ちゃんの気持ちってそんなものなの?友達にしか教えてないって言われただけで揺らいじゃうものなの?」

「ち、違います!」

「なら、そんな簡単に諦めちゃダメだよ」

「で、でも……」

と鈴ちゃんは中々うんと言ってくれない。そんな鈴ちゃんを見て、
「……昔、友達に聞いた話だけどちよつといいかな？」

と言ってしまった。鈴ちゃんは少しポカンとしていたけど、
「は、はい」

と言った。……前に勢いで言っちゃった時は誤魔化せた——はず
だけど、今回は誤魔化せない……よね？でも、そのうち鈴ちゃんには
言おうと決めてたからいいかと思いき呼吸をした。

「その友達ってね、親が再婚して、お兄ちゃんが出来たらしいんだ。初
めてあつた時、お兄ちゃんに一目惚れしちゃってただけど、その事
に気付けずにそのまま何年も一緒に過ごしてたんだって。そしてあ
る日、そのお兄ちゃんの事が好きだつて気付いちちゃったんだって。で
も、今の関係を壊してしまいそうで何も出来なかつたみたい。気付い
てからはお兄ちゃんが普段通りであることが苦しくて、辛くて、悲し
くて、どうしようもなかったんだって」

と言いつつ鈴ちゃんの方を見ると、とてもビックリした顔でこち
らを見ていた。……これはバレたね、うん。

「だからね、鈴ちゃんは頑張つて。絶対に大丈夫だから。私はそう信
じてるよ」

と付け足して一息つくど、

「あ、ありがとうございます、咲愛ちゃん……あの、1つ訊いてもいい
ですか？」

と尋ねてきた。

「ん、なんでも」

「その友達って……咲愛ちゃん、の事……ですよね？」

「……そうだよ、流石に気付いちやうよね。出来れば誰にも言わない
でね？」

「もちろんですよ！……あの、もしかして相談室を始めたのも——」
「そうだよ。自分の気持ちを確かめたかったんだ。相談っていつでも
ほとんど恋愛相談だったからね。もう気付けたから、鈴ちゃんの相談
が最後。……身勝手だよね、こんなのって」

「そんなことないですよ、咲愛ちゃん。相談に乗ってくれて嬉しかつ

たとみんな思っているはずですよ。ですから、いいんです」

「……ありがと、鈴ちゃん」

私達はそう言って笑い合った。しばらくして、私は元々考えてた計画の1つを実行しようと思ひ鈴ちゃんに相談してみた所、

「え、えつと、そんなことをして本当に大丈夫なんでしょうか……」

「うん、大丈夫だよ♪」

「なら、いいですよ！あ、でも服が……」

「明日、2人で服買いに行こ？」

「はい！ふふ、今からとてもドキドキします／＼」

といい返事を貰えた。そして、生徒がチラホラと登校してくるのが見えてきたので、

「それじゃ、また詳しい事は連絡するね！」

「はい！」

「あ、それと夕日の事、結兄は聞いたこと無いはずだよ。そもそも、そっち方面に行かないからね」

「……え？どういう——」

「それは本人に聞いてね♪」

と言つて私はお花を摘みに向かった。

その日の夕方、家でゆっくりしていると、

「なあ咲愛、明後日のあの2人のデート（？）上手くいくと思うか？」

と結兄が尋ねてきた。

「ん〜……わかんない、かな？」

「わかんないってお前な……」

「だつてそうでしょ？全部あの2人次第なんだからさ」

「それもそうだが……」

「そんな心配なら、後つけながら見守ればいいんじゃないの？」

「いやいや、それはちよつと……な？」

「ふーん、まあいいや。私、明日鈴ちゃんと買い物に出かけるからお昼作らなくていいよ〜」

「ん、わかった」

「うん。私、もう寝るね？おやすみ、結兄」

「ああ、おやすみ、咲愛」

私はそう言って立ち上がってドアの前まで行って立ち止まると、

「あ、そうそう、明後日の予定空けといてね」

「……は？ちよ、ま、待て——」

と結兄が言っている途中でドアを閉めて今日の放課後を思い返し
ながら自分の部屋に戻った。

——今日の放課後

「ねえねえ、結兄」

「ん？どうしたんだ、咲愛」

「鈴ちゃんと滝沢くんの2人だけでお出掛けさせようと思ってるんだ
けど、どう思う？」

「はあ?!」

私の言った事に対し結兄はとてもビックリしたらしくバツとこっ
ちを見てきた。

「うるさいよ、結兄」

「す、すまん。でも、なんでまたそんなことさせようと思ったんだ？あ
の2人ってケンカ？中だったんだろ？」

「わかってるよ？でも、仲直りしないとダメだし、どっちも奥手っぽい
から、強制的に2人だけで出かせせたらなんとかなるんじゃないか
と」

「なるほど……な。まあ、咲愛がそう言うんならなんとかなるん……
だよな？」

「……多分？鈴ちゃんにはこの事もう言ってるし、滝沢君を誘うよう
にも伝えたから、後は滝沢くん次第……あ、鈴ちゃん、いいって言っ
てもらえたみたい」

話してる途中で鈴ちゃんから報告のL I M Eが来た。

「そうか。明後日どうなるんだろうな」

「そうだね！」

などと言いながら私達は家へ帰った。

そして、部屋に戻った私は部屋に入ってベッドに倒れ込むと、

「本当に明後日どうなっちゃうんだろ……」

と呟いて色々考えながらぼーっとしていると、いつの間にか眠りに
ついていた。

今、わたしと咲愛ちゃんはデパートへ買い物に来ています。

「ねえねえ、鈴ちゃん」

「どうしたんですか、咲愛ちゃん？」

「この服なんてどうかな？」

とわたしの前に青色のブラウス、水色のボーダーのTシャツ、ベージュのスカートを差し出して来ました。わたしはそれらを受け取って試着室に入りました。着替え終わって出たのですが、咲愛ちゃん

「うん、すごく似合ってるよ！滝沢くんも可愛くて言葉が出てこないんじゃないかなって言うくらいだよ！」

と捲し立てるように褒めてくれたのですがわたしは、

「も、もう、褒めすぎですよお／＼／」

恥ずかしくなってしまう、さっと試着室に戻って着替えました。その後、咲愛ちゃんの服も選ぼうとしたのですが、家にあるので大丈夫だから外で待ってるねと言って店から出てしまいました。わたしは仕方なく支払いを済ませて店から出ました。

それからお昼を食べたり、服以外の店も回ったりしました。

そして——お出掛けの当日です！楽しみで待ち合わせより20分ぐらい早く集合場所に着いてしまいました。が、そこには滝沢くんの姿がありました。初めてみる私服姿に見とれてしまっていると、滝沢くんがわたしに気付いたようでこちらに向かって手を振っています。わたしは駆け寄ると、

「おはようございます、滝沢くん」

「お、おはよう、沢井さ——」

「早めに来たつもりなのですが、って、どうかしました？」

滝沢くんがわたしの姿を見てすぐに顔を背けてしまったので聞いてみたのですが、

「い、いや、なんでもないよ？うん。ただ、沢井さんの私服がカワイイ

なあって……あ」

「っ！／＼／＼あ、ありがとうございます。滝沢くんもその……か、カツコイイ、です」

「あ、ありがとう／＼／＼」

お互いに照れ笑いをしながらそこに居るとどんどん人が増えて来たので、

「そ、そろそろ行きませんか？」

「そ、そうだな！先にご飯の方がいいと思うんだけど、いいかな？」

「っ！は、はい！」

そう言つて滝沢くんがわたしの手を握つて歩き出しました。わたしは突然のことにびっくりしましたが、それ以上に恥ずかしかったり、嬉しかったりで、手を握り返すと、滝沢くんの隣まで小走りで行つて並んで歩き始めました。



鈴ちゃん達が移動を物陰から確認すると、

「さて、鈴ちゃん達が移動し始めたし、私たちも行こっか！」

「あ、あの……。さ、咲愛さん？」

「？結兄、いきなり敬語なんか使つて……。どうしちゃったの？」

「どうしちゃったの？じゃねえよ！いきなり出掛けるから着いて来てつて言われて来たら、尾行とか一体なんだよ！」

と、結兄が詰め寄ってきた。

「び、尾行とかじゃない、よ？ただ、親友として、相談された側として2人の進展の様子をバレないように見守る権利くらいあったっていいでしょ？」

「ま、まあ、言いたいことはわかるが……。つて、それが尾行だろ！」

「いいじゃん、バレなきや大丈夫だって……。それに結兄と一緒に遊べるしね」

「ん？後半聞こえなかったけど、なんか言ったか？」

「な、何にも言つてないよ？あ！あの2人、お昼食へに行くみたいだよ

「追いかけてなきゃ！」

「お、おい、咲愛！急に引っ張るなよ！」

私はどきどきに紛れて結兄の手を掴んで引っ張ると、彼らの入った店へと駆け足で追いかけた。



「ご飯を食べ終えたわたし達は今日の目的地である遊園地に来ました。やっぱり、休日ということもあって人が多いです。この中には当然カップルもいるわけで……周りから見ればわたし達もそうなんでしょう？」

「入場券買いにくけど、フリーパスにする？」

と滝沢くんが声をかけてきたので一旦考えることをやめて、

「あ、はい、それでいいですよ」

と返事をしました。しばらくチケットを買うための列に並んでいとわたしたちの番になりました。

「こんにちは！フリーパス2人分で！」

「かしこまりました。現在当遊園地では『春が来た！春のカップル特別割キャンペーン』を行なっております、カップルで来られたと確認できた方のフリーパスの割引をさせていただきます。失礼ですが、お2人はカップルでしょうか？」

と、受付の人が訊いてきたのでわたし達はびっくりして受付の上にある料金表を確認しました。そこには受付の人が言っていた通りのキャンペーンが書いてありました。わたしが違いますと言おうとすると、

「はい、そうですよ！」

と滝沢くんがわたしの手を握って言いました。びっくりして滝沢くんの方を見るとこっちを見ていて目があってしまったのでパツと顔をそらしてしまいました。受付の人はそんなわたし達を見て、

「ふふ、初々しい彼女さんですね。フリーパスカップル割学生2枚で2000円です」

「それじゃ、ちょうど2000円で」

「2000円ちょうどいただきます。……こちらがパスになりますので、失くさないようにしてください」

「わかりました。それじゃ、行こっか」

と滝沢くんはパスを受け取ってわたしの手を引いて歩き出しました。わたしはしばらく引つ張られるままでしたが、

「あ、あの、滝沢くん、お、お金は——」

「いいよ、お金は。今日、沢井さんところやって遊べるの、オレすっげー嬉しいんだ!!だから、ちよつとぐらいカツコつけさせてくれよ」
「わ、わかりました。ありがとうございます。……やっぱり、わたし滝沢くんが——」

「よーし!!遊園地といったらやっぱりジェットコースターだよな!つて、沢井さんは絶叫系大丈夫?」

「は、はい、大丈夫です! (聞かれてなくてよかったです)」

「そういや、結叶って実は絶叫系無理なんだって!意外じゃね?」

「ふふ。そうだったんですね、すごく意外です」

そうしてわたし達は何気ないことを話しながら遊園地に入ってきました。



その頃——

「ほら、うだうだ言っていないで行くよ、結兄!」

私達も鈴ちゃん達の後を追って遊園地に入っていた。結兄は横で

「まさかあいつらと同じだけ金がなくなっていくとか、ありえねえだろ……」

と財布の中を覗きこんでぼやいていた。

「そりゃ、びこ……じゃなくて見守るためなんだから、同じくらいはなくなるかもしれないでしょ!あ、鈴ちゃん達ジェットコースター行ってみたいだし、そこらへんで待ってこ?」

「咲、咲愛、俺がまだジェットコースターに乗れないと思ってるのか

？」

「あ、大丈夫になったの？なら、私乗りたいし行こっか」

「ごめんなさい、嘘です、嘘つきました、ジェットコースター無理です」

「はあ、だと思つたよ。ほら、そのベンチで座つとこ」

この通り、結兄はジェットコースターというより絶叫系が全部ダメなのだ。……まあ、そういうところも可愛いと思うんだけどね。

私はそんなことを思いながらベンチに座つて結兄と他愛もない話をして待った。



「怖かったです、楽しかったですね」

「ヤベー、マジで怖かった(汗)。もうちよつとカッコつけようと思つたのに」

「横で乗ってくれただけでも私は嬉しかったですよ？ふふつ、でもあそこまで滝沢くんが叫ぶなんて、ふふつ」

「ちよ、笑いすぎだつて！」

「す、すみません、ふふつ」

しばらくの間滝沢くんの怖がり方を思い出してしまつて笑つてしまいました。

笑いが治つてきてからわたしは、

「……ふう。次、お化け屋敷に行きませんか？」

「よし来い！お化け屋敷なんて怖くないぜ！さ、行こう！」

「はいー！」

と言つて、お化け屋敷に向かい始めました。



私は、お化け屋敷へ向かう鈴ちゃん達を見て、

「次はお化け屋敷なんだ……近くのベンチで待っていたいな」

お化けが苦手な私はそう言った。そんな私を見て結兄は、

「ずっと見ては待ってるんじゃない？折角遊園地に来たんだ、俺達が乗れるものでも乗ろうぜ？」

「それもそうだね、うん。それじゃ、コーヒーカップにでも行こ！」

そう言っただけ私達はお化け屋敷の近くにあつたコーヒーカップへ向かった。



「ゼエ……ゼエ……、こ、ここのお化け屋敷怖すぎかよ。完全にナメてた……」

「ハア……ハア……、そ、そうですね。……（そういえば、滝沢くんの声がいつもより近くから聞こえるような）」

「あ、あのお、沢井さん？そ、その、う、腕に当たって……」

「え？——ツ！」

さつきから何となく近くから滝沢くんの声が聞こえると思つたのですが、なんと腕に抱きついてしまつていたのです。

「す、すみません、迷惑でしたよね」

と言つて滝沢くんの腕から離れました。……恥ずかしかったですけど、もう少しさつきの体勢でいたかつた……つて何を考へてるんでしょう。と内心慌てていると、

「い、いや、迷惑というより、嬉しかったというかもうちよつとさつきのままでいたかつたというか……つて、あ」

「~~~~つ!!」

「ちよ、き、沢井さん?!ま、待つて！」

わたしは恥ずかしくなつてしまい、滝沢くんから逃げるように走り出してしまいました。

数分ぐらい走つたでしょうか、滝沢くんと完全に逸れてしまいました。

「ここはどこなんでしょうか。近くに地図もありませんし……どうしましょう」

と困っていると、

「あれ、キミ1人？お兄さん達と一緒にいい場所に遊びにいかない？」
「おー、可愛いじゃん。こう、守ってあげたい感じの子で」

「Yeah, Shall we go? (いいね、俺たちと行こうぜ?)」

となんだか怪しい3人の男の人に声を掛けられました。

「い、嫌です。そ、その、友達と遊びに来ているので」

「そんなこと言わずにいいじゃん。どうせならそのお友達も一緒にいいよっ。」

「そうそう。キミみたいな子のお友達なら絶対可愛い子だろうし」

「い、嫌です！失礼します！」

と目の前にいる男の人達から逃げて人の多そうなところへ行こうとしたのですが、

「そうはさせねえよ？」

「キャッ！」

と手首を掴まれて引っ張られました。

「は、放してください！」

「嫌だね。ほら、こっちに来い！」

とさらに強く引っ張って来たので、

「い、いや。だ、誰か、助けてください。助けて、滝沢くん！」

と抵抗していると、急に肩を掴まれたと思ったら手首の痛みがなくなりよろめいたわたしを誰かが受け止めてくれました。振り向くと、肩で息をしながら怒っている滝沢くんがいました。

「た、滝沢くん!？」

「ハア、ハア、お、おまた、せ、沢井さん」

△ △ △

「た、滝沢くん?!」

「ハア、ハア、お、おまた、せ、沢井さん」

ま、間に合ったー!! 沢井さんを人混みで見失ってそれからずっと走り回ってやつと見つけたと思ったらなんか変な奴らに連れていか

れそうになつてたからとつきにやつちまったけど、大丈夫か、これ？
とりあえず、沢井さんの前へ庇うように立つと、

「ああん？おい、にいちゃん、その子とこれから遊びに行こうとしたたのに何邪魔してくれてんの？」

「嫌がつてるだろうが！この子オレの彼女なんで、諦めてくんね？」

後ろで沢井さんがちよつとビクツとしたけど、今は気にしてる場合じゃないよな。

「は？何言つてんだテメエ？おい、お前らやるぞ！」

「おう！」

「ぐっ……、うぐ、がはっ……」

「た、滝沢くん！」

「おい、にいちゃん、まだやんのか」

「絶対、沢井さんに手エ出させねえからな!!」

「……ツチ、やめだやめ。興ざめだ、行くぞ」

「いいんすか？」

「Are you really? OK? (マジで？いいのか?)」

「つせえな、いいつつつてんだろ！ほら、行くぞ！」

「うつつす (OK)」

と言つて男たちはどこかへ行つた。



男たちがどこかへ行つた後、わたしは滝沢くんを近くにあつたベンチに座らせて看病していました。

「くーっ、やつぱり殴られるのは痛いや。もうちよつと鍛えようかな？」

「滝沢くん！タオル濡らして来ました！」

と言つてそれを滝沢くんの顔の痣ができている部分に当てました。

「ったー！……ありがと、沢井さん。にしても、情けねーよな。女の子1人守るのにこんなにならげとか」

「そんなことないです！滝沢くんが助けに来てくれて嬉しかったです」

し、とてもカッコよかったです！」

「そ、そっか。なんか照れるな／＼／」

「そろそろ移動できそうですか、滝沢くん？」

「おう！あ、そういえばさつき勢いで彼女とか言っちゃってごめんね?!」

「い、いえ、気にしてないです！それにちよつと嬉しかったりなんて……って、忘れてください／＼／」

「え、それって、どういう・・・」

「忘れてください!!／＼／」

あーもう、わたし何やってるんでしょう！あれじゃあまるで……わたしは恥ずかしくて走り出してしまいました。

「待って、沢井さん！」

「キャッ！」

滝沢くんはわたしが走り出した瞬間にベンチから立ち上がり、わたしの手を掴んで自分の方に引っ張ると抱きしめてしまいました。

「え、え？た、滝沢くん？」

「好きだ！」

「——え？」

「オレは、沢井さんが好きだ！」

「……友達としてですよね？」

「違う！オレは後悔してたんだ！あの時、このことを言おうと思ってたんだ！……でも、オレ、テンパって友達だけに教えてるとか言っちゃって！好きな人の前になつたらいつも通りになれなくて！特別なんだよ！だから……好きだ、沢井さん」

わたしは滝沢くんに好きだと言われてとてもびっくりしました。それ以上にとても嬉しくて、照れくさくなつて、愛おしくなつて、滝沢くんを抱きしめ返すと、

「わ、わたしも、わたしも滝沢くんのことが好きです。友達じゃなくて1人の男性として、滝沢くんが好きです！あの時はすごく悲しかったです、辛かったです！でも、それでも、今日、滝沢くんがわたしのことを好きって言ってくれて、とても、とても嬉しいです！本当はもう

少し雰囲気のある時に言っただけだと思ったりしましたが、それ以上は幸せです」

まくし立てあげるように言った。そして、そのまま顔を上げると、「こ、こんなわたしですけど、わ、わ、わたしでよければ付き合ってくださいませんか?」

滝沢くんはびつくりしたような顔をするとはにかみ、

「よ、よろしくお願いします!……って立場逆でしょ!」

「そ、そうですよね!」

「でも、スッゲー嬉しい!」

「も、もう!／＼い、行きましょ!」

「そうだな!まだまだ遊び倒すぞ!」

「はい!」

そうしてわたし達はさつきまでの友達とは違って恋人として楽しむことにしました。



鈴ちゃん達が仲睦まじげに歩いていくのを見ていた私たちはとうとうと、

「はく、よかった!うまくいったみたいだね!」

「オロオロ……やったな、正輝(泣)」

「いつの時代の言い方よ、結兄……もう、あの様子なら私たちの助けはいらないよね」

「そうだろ。絡まれてた件は真面目に逃げたかったのに」

「結兄ってそういう時だらしないよね!」

と軽く背中を叩くと

「助けることはしないけど、折角だし最後まで見届けようよ!」

と言って鈴ちゃん達が歩いて行った方向へ走り出した。

「は、ちよ、待てよ咲愛!俺を置いてくんな!」

という声を背中に受けながら。

◆ ◆ ◆
 夢を見ている。

目の前には俺の妹がいるが、どこか様子がおかしい。彼女は俺に背を向けていて前方に広がる闇をじっと見ているようだ。

「——咲愛？」

呼びかけたが返事は帰って来ず、少しの間を置いてから

「ねえ、結兄。……私のこと、どう思ってるの？」

彼女は呟きながら振り返った。その瞬間、

「咲愛っ！」

咲愛が闇の中に徐々に引き摺り込まれ始める。悲しそうな瞳をしなながら沈んでいく。

なんの冗談だよ！クソツタレ！どう思ってるなんて、今更だ。

俺は単に咲愛は妹だから、兄として好き……だ？

本当に？

『好きな人に好きな人がいたとしても告白する、それが男ってもんじゃねえのかよ!!』

『ゆ、結叶……！そう、そうだよな！サンキュ!!オレの友がお前で良かったよ！おかげで告白する決心ついたわ！なんかあつたらまた相談しに来るかもしれないねえけど、その時はまた頼むぜ！それじゃ、またな!』

なんであの時自分の言ったことに自信を持てなかつたんだ？まるでこれじゃ——

俺は、どうしたら——

「……い、……兄、結兄つてば！もう起きなよ！……つてどうしたの？なんかうなされてたけど」

「ああ、咲愛か。なんでもないぞ？」

「んー、それならいいけど……。なんかあつたら言つてよ？兄妹なんだし。あ、そうだ、もう朝ごはんできてるから早く降りて来てね。鈴

ちゃんに呼ばれて早く学校に行かないといけないから」

「わかった。俺も正輝に呼ばれてるしすぐ準備するわ。あと15分待っててくれ」

「早くしてよね！」

と言つて咲愛は部屋から出て行った。

——15分後

「さて、行くか！」

「うん！」

俺達は一緒に登校し始めた。



早めに学校に着いたわたしは中庭でブーツと咲愛ちゃんを待っていました。しばらくして、

「鈴ちゃん、お待たせ！」

と咲愛ちゃんが駆け寄つて来ました。

「朝早くに呼んじやつてすみません」

「いいよ！それで、なんのお話なのかな？早く滝沢くんに会いに行きたいんですよ？」

と茶化すような言い方で昨日、どこかで見られていたのだと分かりました。

「告白してるところ見てたんですか!?!?!」

「ううん、なんか、この前までと違って、仲睦まじげに歩いてるのを見たから、そうなのかなあーって。」

「そ、そうだったんですか……。でも、改めまして、わたし、正輝くんとお付き合いをするようになりました。色々ありがとうございます。咲愛ちゃん」

「よかったね、鈴ちゃん！それにしても、ふくん」

「な、なんですか？」

「もう滝沢くんのこと下の名前で呼ぶようになったちゃって。このこの」

「……あつ！えつと、こ、これは、その……って、咲愛ちゃん達、最後まで付いて来てなかったんですか？」

「そうなんだよ！前よりも仲良く歩いてるなーっていうのを見てから私も後を追おうとしたんだけど、見失っちゃって……」

「そ、そうだったんですか」

ちよつとホツとしました。でも、

「……で、結局あれからなにをしたのかな？」

咲愛ちゃんが含みのある笑い方でこんなことを言ってくるものですから顔がとても熱くなつて慌ててしまいました。

「っ！／／さ、咲愛ちゃん、な、なに、なにを、とは？」

「ん？観覧車乗ったり、ファミレス行ったりしたのかなってことだけど、鈴ちゃんは何を想像したのかなあ？」

「っく！！／／も、もう！からかわないてください！」

「あははっ！ごめんごめん。でもあれから何したのかは教えて欲しいな？」

「わ、わかりましたけど、誰にも言わないでくださいね？」

「やった！」

少しハメられたと思いながらも、昨日のことを思い出して話し始めました。

——昨日

わたし達は付き合つて晴れて恋人になった後、ティーカップや初めに乗ったものは別のジェットコースターに乗ったりして疲れてベンチに座っていました。

「はい、沢井さん。りんごでよかった？」

と滝沢くんがジュースを買つて来てくれました。

「はい、ありがとうございます」

と言つてわたしがりんごジュースを受け取ると、滝沢くんが横に座りました。

「ふうー。それにしても結構遊んだな」

「そうですね。……あ、このジュース美味しいです」

「お、そうなんだ」

「滝沢くんも飲んでみますか？」

「えっ!!いい、いい、の？」

「え?・・・あっ／＼す、すみません」

「い、いや、こつちこそ、ゴメン／＼」

それからわたし達は黙り込んでしまいました。つい先程付き合い始めたばかりでお互いにお互いを意識しすぎているみたいでとても照れくさいです／＼。それに、先程、わたし、その、か、間接キスしませんか?と言っているようなもので・・・あー、もう、一体何をしているんでしょうか、わたしは／＼。

黙り込んでしまってから数分、そろそろ何か話さないと……

「あ、あの！」

「す、すみません。先にどうぞ」

「ご、ごめん。先に言っていたいよ」

……完全にかぶってしまいました。ど、どうしましょうと少しオロオロしていると、

「か、観覧車に行こ!次何か乗ったら帰らないとダメだろうし、今の時間なら景色が綺麗だろうし！」

「そ、そうですね!行きましょう！」

気まぎれならなくてよかったですとホッとしました。お互いにまだぎこちないままですが観覧車の方に歩いて行きました。

「ま、まさかこれに乗ることになるとは……」

「ふふつ。大丈夫ですよ、落ちませんから」

観覧車に並ばずに乗れましたが、この遊園地には全面ガラス張りの「透明ゴンドラ」があるらしく、わたし達は運良く(?)それに乗ることになりました。滝沢くんはジェットコースターですら怖がっていたのでかなりビクビクしています。

「さ、沢井さんはこ、怖くないのか？」

「はい。元々高いところや絶叫系が好きですから。それに今は、その、滝沢くんと一緒にですし／＼」

「え、あ、そ、そうなんだ!／＼あ、見て、沢井さん!あっちスツゲー

キレイだよ！」

「本当ですね……。とても綺麗です」

滝沢くんが指差した先には紅く染まっていく海と沈みかけの夕日。ふと滝沢くんの方を見てみると彼の横顔がとても輝いて見えました。今日、わたしに告白してくれたこと、とても嬉しかったです。こんなわたしでも好きだと言ってくれて、改めて彼に恋をして、恋人になることができ、本当に幸せだと思った。わたしは鞆から小さな箱を出すと、

「滝沢くん」

と声をかけました。こちらに振り向くと同時に箱を前に出すと、

「……………え？な、なに？」

「今日、ここに連れて来てくれて、一緒に遊んでくれたお礼です。受け取ってくださいませんか？」

滝沢くんは箱を受け取るとすぐに開封して中身を取り出した。

「これって——イヤリング？」

「はい。いつもつけてるので、いいいかなと思ひまして。……………どう、でしょうか？」

「あ、ありがとう！うわー、スツゲー嬉しい!!……………ちよつと目瞑っててくれる？」

「は、はい」

そう言っわたしは目を瞑りました。しばらくガサゴソという音がしたかと思うと、少しゴンドラが揺れ、呼吸音が近くまで来ました。びっくりして目を開けると、滝沢くんの腕がわたしの首に回されていて、顔が目の前にありました。あまりにも急だったので固まってしまっている。滝沢くんが離れて、元のところではなく横に座ると、
「実は、沢井さんにあげようとオレも買ってたんだよね、プレゼント！」

「……………これ」

わたしの首にかけられたネックレスを持ち上げて見ていると視界が滲んできてしまいました。

「え！沢井さん?!ネックレス気に入らなかった？」

「っ！ち、違います！ち、ちが、うんです。うれ、しくて……。グスツ。ごめん、なさい。泣いたり、なんか、してしまつて」

「沢井さん——」

滝沢くんはわたしにとって勿体ない人なのかもしれません。こんなに格好良くて、優しくて、わたしを守ってくれて。こんなわたしじゃ——と思つていると、滝沢くんがわたしを抱きしめてきました。壊れ物を扱うように、でも力強く。

「?!た、滝沢く——」沢井さん、オレは沢井さんが好きだ。いつも楽しそう？、日直の仕事も真面目にして、勉強熱心で、笑顔が可愛い沢井さんを見て好きになつたんだ。これからいろんな沢井さんを見ていくと思うけど、それでも好きでい続けるよ」……う、うう。た、たき、ざわ、くん」

わたしが泣き止むまで滝沢くんは抱きしめてくれていました。

泣き止んで体を離すと、

「……滝沢くん、イヤリング貸してくれませんか？」

「え？沢井さんがくれたのだよね？いいけど……」

「ネックレスをつけてくれたので、お返しにわたしもイヤリングをつけてあげます」

「ありがとう、沢井さん！……ハイ」

イヤリングを受け取ると、ドキドキしながら滝沢くんの耳にそつと触れました。ビクツとなつて耳が赤くなるのを見たわたしは、照れるんだなとわかると、少し可愛く思えてしまいました。

「……はい、つけ終わりました」

「あ、ありがとう／＼／＼」

「耳を触つた時、ビクツとして可愛かったですよ」

「男に可愛いっていうものじゃないだろ……。でも、これも、今日も本当にありがとう、沢井さん」

「はい！こちらこそ、ありがとうございました。本当に楽しかったです」

「……よし！沢井さん！」

「は、はい！」

「名前で呼び合いませんか?!ほら、付き合い始めたし、苗字にくん付けさん付けってなんか、ね?」

「ふふっ、そうですね。」

「そ、それじゃあ・・・スーハー・・・す、鈴／＼／」

「は、はい／＼／。ま、正輝くん／＼／」

名前で呼びあつた後、なんだか照れくさくなって笑ってしまいました。そうしているうちに観覧車も終点につき、ゴンドラから降りると、手を繋いで帰りました。

——現在

「——という感じでした／＼／」

「えー!つまんなーい!耳を触ったあたりでほっぺにチュッてしたらよかつたのに!」

「無理ですよ!もうあれ以上は死んじゃうかもしれないというくらい恥ずかしかつたんですから!／＼／」

「初々しいねえ♪そのネットワークスがそうなんだ!似合ってるよ!」

「あ、ありがとうございます／＼／」

「それにしてもいいなー。付き合えて」

「望月くん、最近変わったことってないんですか?」

「それが、なんか悩んでるっぽいんだけど、話してくれないんだよね」

「そうなんですか・・・正輝さんに望月くんが何で悩んでるか知らないか聞いてみますね」

「ありがとうございます!鈴ちゃん!」

「いいんです。わたしがしたくてしているので。そろそろ教室に向かいますよ?」

「うん!」

わたしは、これがちよつとでも咲愛ちゃんに対してのお礼になればいいなと思ひながら教室に向かいました。



「結叶おおお!!」

「うわ!びつくりしたー、なんだよ、正輝」

咲愛と校門前で別れて教室へと向かっていると、正輝がものすごい勢いで駆け寄ってきた。それも、とてもいい笑顔で。尾行していたので理由はわかり切っているが、

「じ、実はな」

「沢井さんとうまくいったんだろ?おめでと」

「ど、どうしてそれをおー?!」

「ま、まあ、いいじゃないか、そんなこと。……で、どこまでいったんだ?」

「な、な、なに、なに言ってるんだよ、結叶ー!ま、まだ、鈴とは手つ、繋いだくらいだし!」

「へえ、『鈴』ねえ。もう名前呼びかよ」

「ま、まあな。……お前のおかげだよ、結叶。サンキュな」

「お礼言われる筋合いはないんだがな。正輝が頑張ったからだろ」

「お、おう。でも後押ししてくれただろ?だからサンキュな」

いつも通り、でも少しだけ雰囲気が変わった正輝を見て、本当にうまくいってよかったと思う。

「あ、鈴がいるし、行ってくるわ!」

そう言って走っていく姿を見て苦笑しながらその場に立っていた。



私と鈴ちゃんが教室へと向かっていると、滝沢くんがこちらに走ってくるのが見えたので、

「ほら、王子様が迎えに来てくれたみたいだよ。私先に行ってるからHRに遅れない程度にねえ」

「も、もう／＼／＼」

と短い会話をして別れました。

滝沢くんとすれ違い、1人で教室に向かっていると、結兄が立っているのを見つけたので、足音を忍ばせて近づくと、

「ゆるい兄！どうしたのぼーっとして」

「うおーき、咲愛か。い、いや、なんでもないぞ。それにしてもあの2人うまくいって良かったよな」

「そうだね。……ねえ、本当に悩んでることかないの？」

「なんもないって。ほら、教室に行くんだろ？行くぞ」

「……うん、わかった」

なんか誤魔化してるんだろうなっことは分かったんだけど、追求できなくてそのまま結兄と一緒に教室に向かった。

・▲▲▲

その日の放課後、咲愛ちゃんと望月くんはスーパーのタイムセールで争奪戦をするために先に帰ってしまったので、今正輝くんと一緒に帰っています。

「……」

付き合うことになってから初めての放課後で、気まづかったり、恥ずかしかったりで無言のまま並んで歩いています。

「あの」「あのさ」

「先にどうぞ、正輝くん」

「いやいや、鈴が先でいいよー」

「えっと、ちよつと長くなりそうなので、正輝くんが先に言ってください」

「んー、分かった。じゃ、じゃあ、どこか寄って帰りませんか？」

「そ、それって……」

「ほ、放課後、デートってやつ／＼。もうちよつと一緒に居たいしな／＼」

「は、はい！／＼わたし、一回だけでいいので食べてみたいものがあったんですけど、1人じゃダメで……。ダメですか？」

「だ、ダメじゃない！行こう！」

「ありがとうございますー！こっちはですー！」

わたしは正輝くんの手を握ると、わたしが行きたいと思っていたお

店へ向かい始めました。

ある喫茶店に入ったわたし達が奥の方にあるテーブル席に案内され座ると、しばらくして、

「いらっしやいませ。ご注文は何に致しましょうか？」

「オレはブレンドコーヒーで。鈴は？」

「わたしはオレンジジュースとこ、これをお願いします」

と正輝くんメニューが見えないように店員さんを見せて“ある”写真を指しながら言うと、店員さんが微笑みながら、

「かしこまりました。少々お時間がかかりますので、出来上がるまでお待ちください」

と注文を取ると水を置いて、メニューを持って奥へ戻って行きました。

「時間がかかるって何頼んだんだ？」

「ひ、秘密です！／＼／＼ど、どんなのが楽しみにしてください！」

「そこまで言うなら……にしても、鈴も喫茶店とか来るんだな」

「たまたま咲愛ちゃんと一緒にですが」

「へえ、そうだったんだ」

「……」

それを機にまた無言になってしまいました。どうしようかとしてはらく悩んでいると、

「お待たせいたしました。ブレンドとオレンジジュースと”男女ペア限定”パフェです。ご注文は以上でお揃いでしょうか？ごゆっくりしてください」

店員さんはそう言ってわたし達の前にそれぞれの頼んだ飲み物とハート形のクッキーやチョコが散りばめられ、アイスも小さめのが2つついている少し大きめのパフェ、伝票を置くとまた奥に戻って行きました。

「す、鈴が食べてみたいものって……」

「こ、これ、です／＼。咲愛ちゃんと、好きな人ができたらその人と食べたい、という話を以前しまして／＼。……ダメ、ですか？」

「だ、ダメじゃないけどさ、スプーン1本しかないぞ？」

「え！あ、そ、そうですね／＼。もう一本持って来てもらいましょうか？」

「多分だけど、こういうものなんじゃない？ほ、ほら、さっき、男女ペア限定って言ってたぐらいだし」

「そ、そうかもしれないですね……そ、それじゃ、正輝くん」
「ん？」

「あ、あくんです／＼」

「?!あ、あーん／＼……う、うん、お、おいしい／＼」

「そ、そうですか／＼。で、ではわたしも」

「鈴、スプーン貸して」

「あ、は、はい、どうぞ」

正輝くんも自分でパフェを食べたいのかなと思って素直にスプーンを渡すと、

「ほら、お返し。あーん」

「え？あ、は、はい！あ、あくん／＼。……た、確かに美味しいですね／＼」

「だろ？」

「は、はい！でも、これってその、いわゆる、か、間接、キ、キスなのでは……／＼」

「そそそ、そうだな／＼」

「……」

また無言です。勢いで「あーん」をしてしまったものの、やっぱり恥ずかしいです！／＼

しばらくして、正輝くんが、

「な、なあ、早く食べないとまずくね？ちよつとアイス溶け始めてるし」

「あ、本当ですね。正輝くんがスプーン持つてるので、先に食べたいだけ食べてください」

「ん、わかった。なら、鈴の話でも聞きながら食べることにするわ」

「はい」

そして、わたしは話し始めました。望月くんが咲愛ちゃんにも相談

できないようなことがあるかもしれないけれど、それを訊いて欲しいこと。咲愛ちゃんと望月くんが〃義〃兄妹であること。そして、咲愛ちゃんが望月くんのことを好きだということ。正輝くんは義兄妹のこと、好きだということ聞いた時は思いにも寄らなかつたみたいでとても驚いていました。

「……わたしもパフェ食べたくなったのでもらっていいですか？」
「あ、ああ、もうオレ、いらなから残りつても3分の1ぐらいだけど、全部食べていいよ」

と言うので、正輝くんからスプーンをもらってパフェを自分の方に寄せて食べ始めました。……やっぱり甘いものは美味しいです！
「とりあえず、結葉の悩み事に関しては本人に訊いてみるけど。まさか、咲愛ちゃんがねえー……」

「わたしも初めて聞いた時はすごくびっくりしました。でも、咲愛ちゃん達なら大丈夫じゃないかなって思います」
「んー、でも、表向きは血の繋がった兄妹って理解だしな……。まあ、オレもあの2人ならって思うけど」
「そうですね」

それから、わたしがパフェを食べ終わるまでは正輝くんは何か考えているみたいでした。

パフェを食べ終えて帰路についていると、

「なあ、鈴」

「なんですか？」

「オレは結葉に何か悩みがないか訊くだけでいいだよな？」

「はい。すみません、こんなお願いしてしまって」

「いって、オレだつてあいつには世話になつたし」

「ありがとうございます、正輝くん。あ、ここまででいいですよ」

「お、そっか。それじゃあ、また明日！」

「はい！」

そうして別れる寸前に正輝くんの服の裾を引くと、

「っん／＼／」

「?!?!」

「ま、また明日、正輝くん／＼」

わたしは正輝くんの頬にキスをすると、固まってしまっている正輝くんを放って走って家に帰りました。そのままの勢いで家に着くと、すぐに自分の部屋に入り、ベッドに倒れ込むと、

「ああー!!／＼わたし、その場の勢いだけであ、あんな、ほ、頬にキ、キスだなんて!／＼いつかはあ、あ、あ、あれ以上も……あれ以上なんて……うう／＼」

と悶えてしまいしばらくバタバタしてしまいました。

正輝と沢井さんが上手くいって本当に良かった。的確なアドバイスなんて、恋愛経験のない俺が言えるわけなかったのに。本当にあいつが頑張っただけで、俺は何もしていない。

けど、正輝達が付き合い始めたのを聞いてからなんか妙にモヤモヤする。別に正輝から沢井さんを奪いたいとか、そういう感じではないのはわかっている。なんせ、あの2人が付き合えるようにしたから。しかも、授業でもブーツとしていることが多くなったらしく、正輝にも、他の友人からも、そして咲愛からも心配される始末。一体何にモヤモヤしているのか全く自分ではわからない……けど、それでも、俺は知っているのに気づけていない、と感じてしまっただけ。本当に何の理由なく。

今は夜、咲愛が眠りについてから自分の部屋のベッドに寝転がってブーツとしていた。

——♪♪

「……ん？こんな時間になんだよ、って、正輝からのLIMEか。なにになに？」

ベッドに寝転がっていて重たい体を無理やり起こして携帯をとると、

『すぐに学校近くの公園に來い』

「はあ？何時だと思ってるんだよ、あいつ」

ただ、正輝のことだから遊びで言ってるんじゃないさそうだし。渋々寝巻きの上から上着を羽織ると、咲愛を起こさないようにこっそり家を出た。

「お、来たな、結叶。待ちくたびれたぞ」

「いきなり呼んどいて、それはねえだろ」

正輝は公園にあるベンチに座って待っていた。俺はその横に座ると、

「で？話ってなんだよ。最近夜寒いのも忘れて寝巻きに上着だけだか

ら、早く帰りたいたいだよ」

と話を切り出した。

「ま、早くなるかならないかは、お前次第だよ」

「は？どういことだ？」

俺がそう言うのと、正輝は話し出した。

「とぼけんなよ、何に悩んでんだ？」

「なんも悩んでねえよ。大丈夫だつて」

「嘘だな。最近のお前ブーツとしすぎだ。咲愛ちゃんも心配してんだろ？」

「……」

「オレと鈴が付き合えるようになったのはお前のおかげだぜ？だから、今度はお前の番だ。相談しろよ、結叶。オレとお前の仲だろ？」
「……だから、なんもないって。沢井さんにまでそんな風にしつこくしてたら嫌われるぞ？」

「結叶！オレはお前のことだけじゃねえからこんなにしつこくなつてんだよ！お前何か悩んでるだろ、絶対！」

「なんもないって言ってるだろ！」

「嘘つけ！お前、どうせ家でも悩んでブーツとしてんだろ!?咲愛ちゃんがそんなお前を見てなんと思わないと思ってるのか!!」

「んなことわかってんだよ！」

「わかってんなら、相談してやれよ！咲愛ちゃんのこと、考えてやれよ！お前、兄なんだろ?!」

「考えてる！」

「違う！お前は今までの妹のことを考えてんだよ！今の妹のことを考えてやれって言ってるんだよ！」

「だったら、俺はどうすればいいんだよ！わかんねえんだよ！」

「ここまで言ってる墓穴を掘ったのはわかったが、今まで押し込めていた分、俺の心が全部吐き出してしまえと言っているかのように続きを口にする。

「わかんねえんだよ、自分の気持ち。咲愛のことをどう思ってるのか。正輝達が付き合い始めてからずっと、お前に言った言葉が頭から

離れなくなつて、モヤモヤして」

「お前、バカだよな」

「……は？」

「そこまでわかつて、なんで答えでねえんだよ」

「だから、わk「お前、咲愛ちゃんのこと好きなんだろう？」——え？お前、今、なんて？俺が、好き？咲愛を？」

「そうだよ、鈍感無自覚やろう」

「ひでえ言われようだな」

「そりやそうだ。……で、実際どうなんだ？」

正輝がそう言つて来たので、ちよつと考えてみる。

最近正輝達を見てモヤモヤしていたのは——んー、多分羨ましかつたから、だと思ふ。

んじや、なんで羨ましいなんて思つてたんだ？——無自覚に誰かが好きで自分もあんな関係になりたいと思つてたから……だよな、多分。

それじや、誰が好きなんだ？

——咲愛。

ここにたどり着いた瞬間、顔が熱くなり、急にドキドキし始めた。

——ああ、そうか。俺は咲愛のことが好きなんだ。義妹としてでなく女の子として。

「……俺は咲愛のことが好きだ。ありがとな、正輝」

「いいつてことよ、今度何かおごつてくれたら」

「わかつたよ」

「後のこと、しっかりやれよ！じゃあな」

「おう」

正輝がベンチから立ち上がつて公園から出ていくのを見届けてから長く息を吐いた。それから、俺もベンチから立ち上がり、家に向かつて歩き始めた。今までよりもすつきりした気分で。ただ、咲愛にどう伝えればいいのか、ということが頭から全く離れず、家に着いてベッドに寝転がつてからもずっと鼓動が早くなりっぱなしで朝になるまで起きていた。

最終回



朝、私が結兄を起こしに行こうとリビングを出ると結兄が階段を降りて来ていた。

「あ、結兄、おはよう！今日はちゃんと起きたんだね！」

「お、おう、おはよう。な、なんというか、考え事してて寝てないというか」

と何故か目を合わせてくれないまま横を通り過ぎていく結兄。

「バカでしょ。朝ごはんは食べれそ？」

「ああ、それは大丈夫」

「なら、早く食べちゃお？」

「そうだな」

私が椅子に座り、その向かいに結兄が座ると、

「いただきます！」

と声をそろえて言ってから朝ごはんを食べ始めた。

朝ごはんも食べ終わり、使った食器を洗って食器乾燥機に入れ、学校の準備をして、学校に向かってしていると、

「咲愛」

「ん？どしたの？」

「今日学校早く終わるだろ？ちよつと行きたいところあるんだが一緒に来てくれね？」

「それはいいけど、皆で？」

「いや、俺とお前の2人だけで」

「ふくん、いいよ！でも、なんでまた急に？」

「そ、それは……」

「それは？」

「な、なんとなくだよ！」

「ま、いいけど（やった！結兄とのお出掛け♪楽しみだな〜！）」

「そ、そっか」

と放課後に出掛けることになり、内心喜んでいると、前の方に鈴ちゃんと滝沢くんが並んで歩いてるのを見つけた。私は鈴ちゃんに向かつて走り出すと、

「すくすくちゃん！」

と、鈴ちゃんに抱きついた。

「キヤツ！さ、咲愛ちゃん、お、おはようございます」

「おはよ！朝から仲良く登校とかラブラブだねえ」

「っ／＼／」

「さ、咲愛ちゃん、当たり前だつて！／＼／」

「正輝くんも何言ってるんですか！／＼／」

「・・・ハッ！」

「正輝、お前バカだな」

「お、結叶もいたのか。おはよう」

「おう、おはよ」

そして私達4人は仲良く（からかいながら）学校へ向かった。



——そして、放課後、

「さて、行こうか、咲愛」

「うん！それでどこ行くの？」

「そのうち教えるさ。ほら、とりあえず駅に行くぞ」

と言つて、咲愛の手を握つて歩き出した。

「ちよ、結兄、自分で歩けるつて！」

「別にいいじゃねえか。それとも嫌か？」

「い、嫌つてわけじゃないけど……恥ずかしいじゃん！／＼／」

「気にしな—い、気にしな—い。電車に間に合わないかもしれないから早く行こうぜ！」

と恥ずかしがってる咲愛を強引に説得して駅に歩き始めた。

駅について切符を買つてホームに行くと、ちょうど電車が来たので

乗り込んだ。そして、電車に揺られること数十分、俺達は電車を降りて隣町に来ていた。

「それじゃ、行くか。はぐれんなよ?」

「わ、わかったけど。本当にどこに向かっているの? 教えてよ!」

「んー、まいつか。とりあえず、歩きながら話すわ」

と言って歩き出すと咲愛が横に並んでついて来た。

「これから行くのは、俺のとおっておきの場所なんだ。1人になりたい時とか、悩んだ時によく行くんだけど、景色いいからいつか咲愛を連れて行きたいな、って思ってたんだ」

「へえ、そうだったんだ。あ、もしかして、たまに1人で出かけてたのってそこに行くため?」

「そうそう。いやー、学校早く終わって良かったわ」

「別に休みの日でもいいじゃん、なんで今日なの?」

「そ、それは……」

「それは?」

「……まだ秘密だ。ほら、置いてくぞー!」

「待つてよ、結兄!」

これを最後に会話がなくなり、目的地に着くまで歩くことに集中していた。

しばらく歩いて小高い丘を登ると、

「さ、着いたぞ。ここが俺のとおっておきの場所だ」

「わあ、すっごいキレイ!」

そこには辺り一面に色鮮やかな花がたくさん咲いていた。

「だろ?」

「うん!」

前に出て咲愛が花畑に目を奪われているのを見て、ああ、やっぱり好きだなと思った。だから、

「なあ、咲愛」

「何?」

「好きだ」

「——え？」

咲愛がすごい勢いで振り向いて俺を見た。

「俺は、咲愛のことが好きだ。妹としてじゃなくて、1人の女の子として、咲愛が好きだ。付き合ってくれ」

そう言つて俺もまっすぐ咲愛を見つめる。そして、咲愛の方へ向かう。

「え、ちよ、え？ほ、ほんとに？わ、私で、いい、の？」

——後6歩

「ああ」

——後5歩

「だって、義理の兄妹なんて知らない人から見たら、兄妹で付き合つてる、つて変に見られるよ？」

——後4歩

「いいよ、咲愛がそばにいてくれるなら」

——後3歩

「で、でも色々、た、大変なことになるんじゃない？」

——後2歩

「構わない」

——後1歩

「で、でも——」咲愛、俺はお前だから、好きになつたんだ。お前以外じゃダメなんだよ……っ」

黙つて俯いてしまった目の前の咲愛を抱きしめると、

「咲愛、好きだ。俺と付き合ってください」

と囁いた。腕の中で咲愛が少しビクツとする。そして、咲愛がおずおずと抱きしめ返してくると、

「私も、私も好き、大好きだよ、結兄。こんな私でいいなら、よろしくお願いします！」

「当たり前だろ！こっちこそ、これからもよろしくな！」

翌日、私と結兄は鈴ちゃんと滝沢くんに付き合い始めたこと、このことを誰にも言わないでほしいことを報告した。2人ともまるで自

分のことかのように祝福してくれた。

私——望月咲愛には付き合っている人がいる。相手は義理の兄の結兄。生活は今までとあまり変わらないけど、今までとは少し、ううん、とつても大きく変わった関係。この先も、私と結兄が付き合っていることは私、結兄、鈴ちゃん、滝沢くんだけのひ・み・つ。

夏の終わりの祭り

前編

私―千夏（ちなつ）は毎年夏の終わりにある地元の祭りへ数年ぶりに来ています。なんで数年も行つてないのかつて？子供の頃ならまだしも、いい歳した大人が独りで祭りとか恥ずかしいし……。なら、なんで行くのかつて？それは、

「おーい、千夏ー！待たせちまったか？」

「ううん、待つてないよ。私もさつき来たところだから」

「そうか。その浴衣似合ってるな。お前にピッタリだわ」

「あ、ありがとう／＼／＼」

「いえいえ、それじゃ、行くか」

「うん！」

そう、今声をかけてきた幼馴染の海音（かいと）に誘われたからだ。昨日、海音から数年ぶりに連絡が来て、

『今、久しぶりに地元に戻つてんだけど、千夏は明日の祭り行くんか？』

『久しぶり〜。行くかは考えてるところ〜』

『そうかい。なら、一緒に行かねえか？』

『んー…なら、行こうかな』

『んじゃ、5時に神社の前に集合なー』

『はーい』

というやりとりがあつたのだ。

そんなこんなで今に至り、私達は久しぶりの祭りを目一杯楽しんでます。始めの方は人が少なかったけど、時間が経つにつれて人が多くなつてきて歩きにくくなつてくる訳で、

「キヤツ、す、すみません」

人とぶつかってしまった。それに気付いた海音が、

「大丈夫か、千夏」

と声を掛けてくれた。

「う、うん、大丈夫だよ。ありがとう」

「人多くなってきたし、その格好じゃ歩きにくいよな。…仕方ない、俺の服の袖掴んで歩くかか？それとも、昔みたいに手でも繋いで歩くか？」

と、からかうように手を差し伸べながら訊いて来るものだから、私はびつくりして、

「え、いいいよ。私は大丈夫」人が増えて歩きにくいんだろ？それとも、今更恥ずかしくなったのか？」そ、そんなんじゃないよ！うう……：そ、それじゃ、お願いします」

と言つて差し伸べられた海音の手を握つてお互いの方が当たるか当たらないか微妙な距離感で並んで歩き始めた。

「ん……。やっぱり、海音つて昔から結構背伸びたよね。なんかこう、男の子つて感じから男！つて感じになった！」

「はは、そりゃ、どうも。そういや、もうそろそろ花火始まる時間だよな？あそこに見に行かないか？」

「うん、いいよ！」

と言つて私達は花火を見るために近くの浜辺へ向かった。

私達は浜辺に着くと近くの階段に座つて、

「…懐かしいね、ここ。なんにも変わってない」

「そうだな。俺がこつち出してから数年は経ってるのにな」

「うん、そうだね」

と話していたが、それつきり無言になってしまつて、2人揃つて夜空が映っている渚を眺めていた。それから程なく花火が上がり始めた。

「—ねえ、海音」

「どうした？」

「昔、学校の帰りに一緒に並んで歩いて帰った事とか、お祭りのたびにこうやつて花火を見た事とか覚えてる？」

「—当たり前だろ？」

「なら、さ。あの約束も覚えてたりする？」

「……ああ、もちろん」

私達はあの日―私と海音が高校を卒業して別々の道に進むと決まった年のこの祭りの日―この場所で約束をした。

後編

私と海音は昔家が隣同士ということもあって兄妹のように遊んでいた。学校の行き帰りも一緒に、祭りがあるといつも一緒に行ってはぐれないように手を繋いで見て回っていた。季節は何度も巡って私達は高3になった。その頃でも行き帰りは一緒になったりしたが、周りからしよつちゆうからかわれてお互いに恥ずかしくなったし、友達も多くなってきたから祭りへは一緒に行くことが無くなっていった。でも、大学からは進路が別々になってしまいかもと思った私が海音を祭りに誘ってみたらOKしてくれた。そして、祭り当日私と海音は昔みたいに祭りを回った。

最後の花火がもうそろそろ始まるという時間になると海音が、「なあ、ちよつと一緒に来て欲しいところあるんだけど、一緒に来てくんねえか?」

「別にいいけど…。もうそろそろ花火始まつちやうよ?」

「ああ、それなら大丈夫だ。そこの方が見やすいんだよ」

「そつかく。それじゃ、いいよ」

そう言っ私は海音に付いて行った。しばらく歩くと、人気のない浜辺に着いた。

「ねえ海音、ここがそうなの?」

「ああ。一昨年ぐらいかな、偶然見つけたんだよ。今日千夏に教えるまでずっと隠してたんだ」

「え、なんで?」

「最初は一番大切な人に教えたかったからだよ」

「へえ。——って、え? 一番大切な人って、え?」

「お前だよ、千夏。俺にとつて千夏が一番大切なんだよ」

「そつかく、そうだったんだ」

「な、なんだよ」

「ううん、なくんも。私もね、海音が一番大切に好きだよ!」

と照れ笑いしながら言っ瞬間、海音が私を抱き締めてきた。

「キヤツ」

「俺も、俺も千夏が大好きだ。」

「わかってなかったけど、実は両思いだったんだね」

「ああ。……でも、今は……というか、これからか。受験もあるし、お互いに自分の事で大変になるだろうから、付き合えない」

と言うと私の肩に手を置いて体を離すと、

「だから、約束しようぜ」

「……約、束？」

「そうだ。いつか——」

「いつか、また2人でこの祭りに来て、この場所で花火を見ようって。

そのとき、お互いの気持ちが変わって無かったから付き合おうっていう約束、だろ？」

「うん、そうだよ」

私は花火を見ながらそう言った。

「私の想いはあの頃から全く変わってないよ。海音が大好き」

「俺も」

と言って海音は私を抱き締めると、私の耳元で、

「俺も変わってねえよ。千夏の事が大好きだ」

そしてあの時と同じように体を離して向き合おうと、

「俺と付き合ってくれるか？」

と、あのとときからずっと私が望んでいた言葉を言ってくれた。私は嬉しくて涙を目の端に滲ませながら、

「はい。こんな私ですけど、よろしくお願いします」

と答えた。そして、花火が輝く夜空の下で私達はどちらからとも無く顔を寄せて、キスをした。

……この先、キスをする度に私はこの時のことを思い出すんだろうな
……。だってすごく嬉しかったから。

Pure School Love

1

「さあ、ついにこの季節がやって参りました!!皆さんがこの2ヶ月間かけて作り上げてきたクラスの企画の成果を見せる時です!今ここに、開原高校、文化祭の開催を宣言します!!」

「「うおおおおおおおおおー!!」」

学園に開催宣言のアナウンスが流れた瞬間、周りにはテンションの上がりようがわかる位の叫びが響き渡った。そんな中、俺——樹は、たつき「やっとか…これで最後の文化祭になるのか。感慨深いものを感じるな……」

と、呟いて突っ立っていると、

「なにじっくり言いながら突っ立ってんのよ、樹」

と、後ろから声をかけられた。

「いやいや、これが高校最後の文化祭なんだぞ?なんか感慨深くないか?」

と、声をかけてきた友人——さつき沙月に言う。

「そ、そうかもしれないけど…。い、今はそれ関係ないじゃん!ほら、始まったんだし、屋台行こうよ!」

と言うが否やすぐに歩き始める。が、そちらとは逆の方に歩き出した沙月を見て慌てて、

「おい、屋台そっちじゃねえぞ、沙月!」

呼び止める。沙月は罰が悪そうにこちらを見て、

「……えへへへ?」

「誤魔化しても無駄だ……。はあ…、沙月の方向音痴は今に始まったことじゃねえけどさ。ったく仕方ねえ、沙月、ほら」

誤魔化そうとしているので、呆れつつ手を差し出した。

「……うっどゆことど?」

…意味が分かっていないらしい。

「次、気付かないうちにどこかに行かれたら面倒だからだ!」

と言って、少し強引に沙月の手を握る。沙月がびっくりしたようにこちらを見てから、

「わかったよう。それじゃあ、エスコートよろしくね、樹！」

と、ちよつと照れた雰囲気のまま満面の笑みで面と向かって言うてくるものだから、俺は顔を赤くしてしまった。

「…顔赤くしてどうしたの？」

と、不思議そうにこちらを見てくる。

「何でもない！ほら、行くぞ！……天然過ぎるぞ。お前のせいだ、ばか」

「ちよつと、引つ張らないでよ！自分で歩けるからー！」

俺は誤魔化すように沙月の手を引つ張って、屋台の方へと向かい始めた。

——そもそも、俺がなぜ沙月と一緒に文化祭を回ることになったのか。それは遡ること4日前……

「なあ、樹は最後の文化祭誰と回るんだ？」

この友人たちとの発言がきっかけだった。

「んー、1人で自由気ままに回るつもりだったんだが、何でだ？」

「いや、一緒に回んねえか？っていうお誘い」

「今年で最後だし、どうよ？」

「いい『ねえねえ、樹！今年の文化祭、一緒に回る？』つと、沙月か」

OKと返事しようというところで、沙月が会話に入ってきてすぐに誘ってきたのだ。

「ねえ、いいでしょ？どうせ今年も1人で回るつもりなんでしょ？」

「うっ、そ、それはそうだが……」

「なら、いいよね！ね？」

とすごい勢いで迫られたからついつい、

「わ、わかったよ。……と、言うわけだが、お前らも一緒に来るか？」

と、誘いを受けてしまったが、他の友人たちも誘ってみた。

「いやいや、お前たち2人と一緒になんて回れるか！仕方ない、俺たちは俺たちで回るか」

「そうだな！というわけで、お前たち2人で回ってくれ」

とニヤニヤしながら言われた。

「何ニヤニヤしてんだよ……。ってことで沙月、2人だがいいか？」

「もちろん！よろしくね！」

そう言つて沙月はすぐに離れていった。残った友人たちは、

「リア充爆発しろ！」

と変わらずニヤニヤしてイラついたように言い残して自分の席に戻った。

「何言つてんだよあいつら。にしても、今回の文化祭、沙月と回れるのか…。楽しみだな」

友人たちの言葉に呆れつつも、文化祭が待ち遠しくなった。

「さてと、どの屋台から回るんだ？」

と誘われたことを思い返した後、横にいる沙月に訊いてみた。

「どーしよーかなー……あ、あそこのたこ焼き食べたい！」

「お、いいぞ？俺が買ってくるから。そうだな……あの木の近くのベンチで待っていてくれ。」

と言つて買いに行こうとすると、

「え、私も行く！てか、いつも自分の分は自分で買いに行けつて言ってるじゃん！」

と言つてくる。

「そ、そうだけど……今日ぐらいいいんだ！」

「そ、そうなの？」

「そうだ！だから、さつき言った場所で待ってろ！迷うなよ！」

「は〜い」

そして一旦別れた。

たこ焼きを買つて戻ると、

「あ、おかえり！はやくたこ焼き食べよ！……つて1パックしか買つて来なかったの？」

「ああ。朝からたこ焼き食う気になんねえんだよ。ほら、食べたかったんだろ？」

と言つと沙月が、

「それじゃ、遠慮なく！……ん〜、おいしい！」

「よかったな、沙月。……やっぱ1個くれ、沙月」

「言うと思った（笑）。それじゃ、あ〜ん」

「あ、あ〜ん。……おお、確かにおいしいな」

「でしょ？もういらぬなら、残りは私が食べ……」

と急に沙月の言葉が止まったので見てみると、沙月がつまようじをジーツと見ていた。

「どうしたんだ？つまようじを見たりして」

「う、ううん、何でもないよ!?私、他の屋台のも食べたいから、残りあげるね!」

「いや、残りあげるって、お前、2個ぐらいしか食ってねえだろ?!」
と言うと、沙月が少し顔を赤くし、慌てた様子でたこ焼きが残っているパックを押しつけながら、

「も、もういいの!ほら、早く食べないと、先行つちやうよ!」
と、言ってきた。

「それはやめろ!お前すぐどこにいるか分からなくなるから!食べ終わるまで待ってろ!」

そう言ってたこ焼きを受け取ってハフハフしながら食べ終わると、立ち上がり、

「さてと、次はどこ行く気なんだ?」

「んくとね、とりあえず屋台はいいから……そうだ、お化け屋敷行こ!」

「屋台じゃなくていいのか?…まあ、沙月がいいならいいか。それじゃ、さつそ『お、樹じゃねえか!』お、伊月いつきか!この間、カラオケ行ったぶりか?にしても、なんで今日来てんだ?」

移動し始めようと言うところに中学からの友人である伊月が声をかけてきた。

「駅でチラシ見てな。暇だったし、樹の学校でも見てやろうかとな。……それで、その横にいる可愛い子誰?」

「ああ、友達トモの沙月だ。沙月、こいつは中学からのダチで伊月だ。……って、おい、沙月!」

俺が伊月を紹介すると、沙月なぜかむすっとした顔でこちらを見ていたと思えばがお化け屋敷の方へ向かっていこうとしていた。慌てて声をかけると、

「久しぶりに会ったんだから、ゆっくり話せば?私先にお化け屋敷行ってるから」

と不機嫌そうに言うところそくさで行ってしまった。

「お、おい!待って、沙月!そっちは逆!って、あーもー!すまん、伊月、また今度ゆっくり話そうぜ!」

「了解！ちゃんと仲直りして来いよー！」

「ああー！」

俺はそう言うと、沙月を追いかけた。

少しすると、沙月が壁によりかかって座り込んでいるのを見つけた。

「ハア、ハア…。やっと見つけたぞ、沙月。ほら、お化け屋敷行くぞ？」

「ねえ」

「ん？何だ？」

「ねえ、樹にとつて私は何人もいる友達の1人なの？なら『そのことだけど、つと』え？……キャツ！」

沙月の言葉を遮るように沙月の手を引っ張り立たせると、

「沙月は俺にとつてかけがえのない友達なんだ。多分特別、なんだと思っ」

「え、え？そ、そうなんだ／＼／」

「そうだよ。ほら、行くぞ」

「うん！」

と可愛い笑顔で言ってくるので、とっさに顔を逸らして沙月の手を引っ張ると、

「さ、行くぞー！」

「うん！」

俺たちはお化け屋敷に向かうのであった。

そのあと、俺たちはお化け屋敷や占い（？）の館に行ったり、その他の展示や屋台を冷やかして回ったりした。怖いのが嫌いな沙月が文化祭なら大丈夫だろうと思って入ったお化け屋敷では、思ったより手が込んでいたからなのか、沙月が俺の腕にずつとしがみついていた。沙月のほどよい弾力を持つ2つの膨らみが押しつけられていて（本人は無自覚だろうが）恥ずかしいやら嬉しいやらで終始顔が赤くなってしまった。沙月はお化け屋敷から出て俺に話しかけようとしてこちらを向いた時にやっと気付いたらしく、頬を赤く染めてパツと

離れてしまったからちよつと寂しいと思つてしまったのはこの先も
ずつと秘密だ。

次に行った占い(?)の館で、2人の相性とか運勢とかを占つて貰つ
て「相性バツチリ!!」と言われたものだからお互い恥ずかしくなつて
逃げるようにその場を去つて行つた。

俺は沙月が迷子にならないようにクラスや部活の展示や屋台を冷
やかして回る間ずっと手を繋いでいたのだが、周りからの視線が刺
さつて痛かつた。まあ、それでも手は離すことはなかつたが。

瞬く間に時間は過ぎていき、ついに学園祭の締めくくりである後夜祭が始まる時間になってしまったが、俺たちは会場であるグラウンドに行かず屋上に来ていた。

「もう文化祭も終わっちゃうね」

「そうだな。文化祭はどうだった？」

「ん〜とね、すつごく楽しかったよ!!だって、樹と一緒に回れたんだもん!」

「・・・っ!／／」

と可愛い笑顔でこちらを向いていつてくるものだから、すぐに顔を背けてしまった。その後、沙月は躊躇いがちに

「ね、ねえ、樹はさ、どうだったの？」

「」

「樹はさ、私と一緒に良かったの？他の友達と回りたかったんじゃないの？」

と、もじもじしながら尋ねてきた。

「何言ってるんだよ。良かったからこうして一緒にいるんだろうが。」

「そ、そっか」

「ああ」

「・・・」

気まづくなつて、沈黙が訪れた。そして、

『間もなく、後夜祭の目玉イベントであるフォークダンスを始めたいと思います。参加する生徒はグラウンドに集まってください。繰り返します、——』

とアナウンスが流れた。

「も、もうそろそろフォークダンス始まるみたいだし、行く？」

と言って、グラウンドへ向かおうとした沙月の手を引っ張った。沙月は驚いたようにこちらを見ると、

「な、何？」

「い、いや。・・・どうせ今から行っても1曲目には間に合わないだろ、

多分。だから、もうちよつとここで話そうぜ」

「んーそれもそうだね。わかった。でも、2曲目には行こうね、絶対だよー!」

「もちろん。……今更だけど、さ。沙月は何で俺と回りたかったんだ? 他にも回ってくれて言ってくる人いたんだろ?」

「う、うん、そうなんだけど……。どうしてだろうね、私もわかんないや。ただ、」

「ただ?」

「樹と一緒にいたら楽しいかなって、ね。樹こそ、何で私と回ってくれたの?」

「俺は——」

思わず言葉に詰まってしまった。沙月の言ったことは俺も同じ思いた。俺は沙月だから一緒に回った、んだと思う。と考えていると、

「ねえ、俺は、の続き教えて欲しいな」

と上目遣い気味に沙月が催促してくる。もういいや、自分に正直になっても悪くはならないよな、と決心して、

「俺は——いや、俺もお前と一緒に楽しかったら楽しいだろうなって思ったからだよ。あ、後、お前が他の男子と回って欲しくないからだな」

「——え? どういうこと?」

首を傾げて変わらずこちらを見てくる。

「いい加減気づけよ、鈍すぎるんだよ。——俺は、沙月のことが好きなんだ」

ついに言ってしまった。

「——え、い、今……。え?」

沙月、やっぱりびっくりしてんな。

「た、樹、なんて言ったの?」

「俺はお前が好きなんだよ、沙月／＼／＼」

「そ、そっか／＼／＼」

それを最後にまた言葉が途切れてしまった。恥ずかしくて、なんだか顔を背けてしまった。しばらくして、

「ね、ねえ、こっち見てくれないかな、樹／＼／＼」

「ど、どうしッ！」

沙月に呼ばれたので、沙月の方を向くと沙月の顔が俺の顔の近くにあり、俺の唇に沙月のが押しつけられていた、つまりキスされたのだ。何でキスされるんだって考えたが、沙月の唇の感触がその考えをぬぐい去っていく。

「いったい、沙月にキスされてどれくらい経っただろうか。十数秒？ いや、もっと短かったかもしれない。沙月が顔を離すと、

「……ん／＼／＼わ、私も、私もね、樹のことが好きだよ、大好き！」
赤い顔の沙月がとびきりの笑顔で告白してきた。そんな沙月を見ていると、すぐく愛おしさが溢れてきて、

「キャッ！」

沙月のことを抱きしめた。そして、

「俺と付き合ってくれ、沙月。これからもそばにいてください」

と、耳元で囁くように言った。すると、沙月も抱きしめ返してきて、「こ、こんな私で、いいなら、お、お願いしま、す。う、うう……」
「なんで泣くんだよ、沙月」

「だって、だってえ……樹と、樹と両思いだって、わかって、それで、付き合ってくださいって、言われて、……ぐすん。本当に、本当に夢みたいだよ。……ぐすん」

俺は沙月が泣き止むまで、抱きしめたまま沙月の頭を撫で続けた。沙月が泣き止む頃には、フォークダンスも1曲終わりそうだった。

「さて、沙月、フォークダンスも1曲終わりそうだけど、行くか？」

「うん！今日からいっぱいたくさんの思い出を作らないと♪」

「ああー！」

沙月が恋人つなぎをしてきたので、俺もそれに応じて2人並んで校庭に向かった。

最終回

俺たちが校庭に行くと、クラスメイトやら友達やらが集まってきて俺たちを囲んだ。そして、どこ行ってたんだとか、2人きりで十二してたんだとか、もしかしてやっとなり合ったのかだとか、色々言われたが適当にあしらって、フオークダンスに混じった。フオークダンスが終わるとすぐにまた質問攻めにあい、帰り遅くなるだろうなど呆れ混じりに沙月の方を見ると、沙月も同じことを思っていたのかこちらを向いたので、2人そろって吹き出してしまった。それを見て、さらに冷やかしの声が飛んでくる、ということが続きながら学園祭はその幕を下ろしていったのだった。

色々あった文化祭の振替休日を経て学校へ行くと、

「お前、やっとなり合ったと付き合うことになったんだな、おめでと」

とか、

「せいぜい長く続くように友達として祈っとくよ」

やら、

「どこまでいったんだ」

とかを（最後のを言った奴はもちろん一回殴っておいた）休憩になるたびに友達から言われ続けた。どうやら、沙月も似たような状況になっていて、話そうにも話せなかった。昼休みになると全員が言い終わったのか、やっとなり解放してくれ、今昼ご飯を食べ終えて沙月と屋上のベンチに並んで座っていた。

「くっそ！なんでこんなに広まってんだよ！一日しか経ってねえだろ」

「ホント、そうだよね！……今日、樹ともうちよつと一緒にいたかったのに」

「そうだよな。沙月ともうちよい一緒にいれるかと思ったのによ／＼」

「そっか、そうだよね／＼（ヤッター!!一緒のこと考えてくれてた！）」

と言うと、沙月が嬉しそうに恋人つなぎをして俺の右腕に抱きついてきた。

「さ、沙月、ちよ、引っ付きすぎ／＼」

「嫌だった？」

「い、嫌じゃねえよ。スゲー嬉しいんだけど……」

「だけど？」

「えっと、あ、当たってるんだよ！」

「……？——ツ!!た、樹だから良いの！」

「そ、そうか。沙月大好きだよ／＼」

「きゅ、急に何、もう／＼私だって樹のこと大好きだよ／＼」

そう言っただけは触れるだけのキスをした。顔を離すと、

「やっぱり、恥ずかしいな／＼」

「うん／＼」

そう言うと、沙月は一回俺から離れると、体ごとこちらを向いて、

「これからも、よろしくね、樹」

と顔を赤くして言ってきた。急に言われたものだから俺も顔が熱くなってしまう。そして、

「あ、ああ、こちらこそ、これからもよろしくな、沙月」

と言った。そのまましばらく見つめ合って、

「アハハハ！」

と、恥ずかしさからか俺たちは笑い始めた。

どうかこんな楽しい時間を沙月と一緒に過ごせますように、と願いながら。

初めまして、ボクは鷹月香澄たかつきかすみです！今、ボクは鈴風玲音先生すずかぜれおん——皆からは名字を逆から読んで風鈴先生と呼ばれている数学の先生——に教室で2人きりで数学を教えて貰ってます。授業は玲音先生じゃないんだけど、何かわからないことがあると、いつも玲音先生に質問しに行ってます。なんで、担当して貰ってる先生に質問しに行かないかって？それは、玲音先生のことが好き（もちろん、異性として）で、少しでも会える時間を増やしたいからです！

「……さん、……すみさん、香澄さん！」

「ひゃ、ひゃい！」

「ボーツとしていましたが、どこかわからないところがありましたか？」

「え、えつと……、こ、この問題ってどう解くのかなって……」

とつさに、今解いている途中の応用問題を指差していかにも難しく悩んでましたかのように誤魔化しました。

「……何か別のことを考えていたように見えました……まあ、いいでしょう。この応用問題ですね。この問題なら、ここに載っている公式を使って解いてみてください」

誤魔化せてませんでしたけど、スルーして解き方を教えてくれました。

「ありがとうございます、玲音先生！」

それからしばらくの間、時々質問しながらも、わからなかったところを解きます。そして、

「ふうー、終わったー！」

「お疲れ様です、香澄さん」

今日の分を解き終えてすぐに、片付けを始めました。すると、

「あの、気になっていて、聞きそびれていたことがあったのですが、今

聞いてもいいですか？」

「……う？はい、いいですけど……」

普段は話しかけてこないのに急に玲音先生が話しかけてきたので、不思議に思いながら返事をした。

「以前から気になっていたのでありますが、どうして、香澄さんは僕を皆のようにあだ名で呼ばないんですか？」

「んー、なんとなくですかね。ボクには風鈴先生よりも玲音先生の方がしつくりくるんですよ。それに、そんなこと言ったら、玲音先生だって同じじゃないですか。ボクだけ他の生徒みたいに名字じゃなくて名前で呼んでますし？」

「言われてみればそうですが、なんででしょう？」

「ボ、ボクに聞かないでくださいよ！／＼……ボクはさつきも言つたと思うんですけど、しつくり来るからですが、玲音先生はどうなんですか？」

「そうですね……無意識、だったんだと思います。現に、こうして言われるまで気にしていなかったんですから。もしかしたら、特別だったのかもしれませんが、香澄さんのことが」

「……へ？」

「だってそうじゃないですか。他の生徒のことは名字にさん付けで呼んでいるのに、香澄さんだけは違います。これは特別ってことじゃないのでしょうか？」

「……／＼／＼」

「先生として、1人の生徒を特別扱いはあまりよろしくは……って、香澄さん、どうかしましたか？顔が赤くなっています、もしかして、体調を崩しているのでは——」

「ち、違います！好きな人から特別扱いされて流ってわかって嬉しくて——あー！」

言い終わってからハツとして恐る恐る玲音先生を見ると、

「えっと、か、香澄さん？」

なんて、戸惑ってるように見えます。

「えっと、その……」

「先ほどのはどういう——」

しかも、こうやって、深入りしてきました。これは、覚悟を決めるしかないのかな……。ボクは深呼吸をして玲音先生をまっすぐ見ると、

「さつき、つい言っちゃいましたけど、ボクは玲音先生のが好きです！先生としてではなく1人の男性としてです！もちろん、生徒が先生にこんな気持ちを持ってしまうのはいけないことなんだってわかってます！でも、特別だなんて言われたら我慢できませんよ！玲音先生、ボクは、先生だけの“特別”になりたいです!!」

あー、勢いに任せて言っちゃったよ！先生はびっくりして固まってるし……。え、ど、どうしょ?!なんて戸惑っていると、

「あ、あの、香澄さん」

「ひゃ、ひゃい！な、な、何ですか?!」

「僕が言うのも何ですが、ちよつと落ち着いてください」

「は、はい。スーハー、スーハー、……。もう大丈夫です。それで、どうかしたんですか?」

「えつとですね、さつきの返事についてなんです——」

その先は言わなくていいですよ、先生。ボクは気持ちを知ってもらえただけで十分ですから。

「僕は——」

その先を聞きたくなくて逃げ出したいけど、先生が真っ直ぐボクの日を見てきてそれを許してくれない。そして、

「僕は、いいえ、僕も香澄さんが好きですよ。もちろん、1人の女性としてです」

「……え?」

「ですから、僕も香澄さんのことが1人の女性として好きです。表立って出かけたたりもあまりできないと思いますが、それでもいいのでしたらお付き合いしていただけませんか?」

「……え、え?ほ、本当ですか?!で、でも、誰かにバレたりしたら……」

「その時はその時です。僕を香澄さんの“特別”にしてくれませんか?」

「は、はい。はい、はい！……うう」

先生に告白され付き合えることになった、と理解した途端、なんだかものすごく嬉しくなって自然と涙が出てきちゃいました。なんだか恥ずかしくて、先生に見られたくなくて、体ごと反対を向きましました。すると先生は、

「別に嬉しくて泣いてしまうのは恥ずかしいことではないと思いますよ。それに、僕はもう香澄さんの恋人です。これくらいはさせてください」

と言いながらボクの前に回り込んで自分の方に抱き寄せると、ボクの頭を撫で始めました。ボクはそのまま先生の胸に頭を押し付けて思いつきり泣いちゃいました。

——数分後

「あ、あの、先生、もう大丈夫です、よ?」
「わかりました」

と言って先生はすぐに離れてしまいました。うーん、あっさり離れられるとちよつと寂しいかも…、なんて考えていると、

「あの、香澄さん、僕たち付き合い始めたんですよね?」

「は、はい!そうですよ?」

なんて聞いてくるので不思議に思っていると、

「付き合ってからは何をしたらいいんでしょうか?なんといっても、誰かと付き合う経験なんてなかったものですから……」

「そんなの、ボクも同じですよ!本とか、友達で付き合っている子から聞いた話だと、休みの日に遊園地とかショッピングモールに遊びに行ったり、一緒に帰ったりするみたいです。……流石にバレたらダメだからできないですよね……」

「そうですね。……この学校に写真部ってあると思うんですけど、知ってますか?」

「?はい、知ってますけど、それがどうかしたんですか?」

「実は僕はその顧問でして、今月中に新入部員が入らないと廃部になると言われてしまいました……」

「そうだったんですか。でもなどうしてですか?」

「昨年度卒業した方以外幽霊部員なんですよ」

「へえ、そうなんですね。……つてもしかして」

「はい、香澄さんに写真部に入って欲しいなと思ってます。初めてだと大変だとは思いますが。それでも、放課後は一緒にいやすいですし、休日には活動の一環として2人だけで出かけることも——」

「入ります!わからなかったら教えてくれますか?」

「もちろんです」

「やった!」

流れで写真部に入ることになったけど、玲音先生と一緒にいられる

時間が増えるならいつか！なんて思いながら全く終わっていないかった片付けを終わらせると2人揃って教室を出て昇降口へ歩き始めました。

「あ、そうだ、香澄さん」

「なんですか、玲音先生？」

「連絡先を交換しておきませんか？いつでも話せますし、その、付き合っているんですし……。どうですか？」

「は、はい！／＼／＼」

お互いにスマホを取り出して、連絡先を交換すると

「それでは気をつけて帰ってくださいね、香澄」

「——っ!!はい！玲音さん！」

ボクは恥ずかしくなつてすぐに靴を履き替えると家まで走つて帰った。

——コンコン

「失礼しまーす。……玲音先生、入部届持つてきました！」

翌日の放課後、僕が職員室にいと、香澄が入部届けを持ってきてくれました。

「ああ、香澄さん、ありがとうございます。これ、写真部が使っている第2情報室の鍵です。僕は少し用事があるので、先に行って開けておいてもらえますか？」

「はいーそれでは失礼しますー！」

そう言つて職員室を出る香澄を見送るとたつた今もらった入部届けを持って教頭の机まで行くと、

「教頭、以前話していた部活の顧問の件ですが、たつた今写真部に新部員が入ったので、もう少し見送らせていただくことはできないでしょうか？」

「聞いていました。とりあえず、1ヶ月彼女のやる気を見るために様子を見ましよう。ただし、彼女にやる気がなければ……。わかつてますね？」

「わかつています。とりあえず、彼女を待たせているので、これで失礼

します」

そう言つて職員室を出ると、第2情報室へ向かいました。

ボクが第2情報室に入つてそこに置いてあつたたくさんのカメラを見てみると、

「お待たせしました、香澄」

と玲音さんが周囲を確認しながら入ってきました。

「いえ、大丈夫です！それにしても、カメラたくさんあるんですね」「ここに置いてあるのは体験入部やカメラを買う余裕がない方向けに置いてあるものです。昨年度卒業された方々は個人で好きなものを買つてそれを使つていましたから」

「へえー、そうなんです。ボクも買ったほうがいいのかな……」

「買わなくても大丈夫ですよ。ああ、でも、メモリーカードだけは買つてもらわないといけませんね。部の共有のものは置いてませんから」「わかりました！」

「それじゃあ、活動についての相談を始めましょうか」

「はい！」

——数分後

「——では、明後日までは写真を撮る上で必要なことの簡単な説明、明後日以降は実際に撮つて慣れてみましょうか。どこかわからないところはありましたか？」

「とりあえず、大丈夫です」

「わかりました。またわからないところができたらいつでも聞いてくださいね」

「は、はい！」

「さて、今日はこれで終わろうと思うのですが、あまり遅くならないうちに帰ってくださいね？」

「……………」

「香澄、どうしたんですか？」

「……………玲音さん」

「なんででしょうか?」

「えい!」

ボクはまだ玲音と一緒にいたいなと思って玲音さんに飛びつきました。

「っーびつくりするじゃないですか、香澄。危ないから飛びついて来ないでくださいね」

「えへへ、すみません、玲音さん。でも、2人きりなんだし、いいですよね?」

なんて上目遣いで言ってみると、玲音さんはそっぽを向いて、

「……仕方ないですね。あと5分だけですよ」

と言って、玲音からもギュッと抱きしめてくれました。

そして、数分経ったぐらいの頃に、

「さて、これでおしまいです。これ以上は本当に遅くなってしまいますよ。大丈夫ですか?」

「……はい、わかりました。また後で絶対、ぜーったい連絡しますね!それじゃ!」

「ちよつと待ってください!とりあえず、このカメラを渡しておきますので、無くさないようにしてくださいね、それでは、また後で、香澄」

と、第2情報室を出る直前に呼び止められカメラを渡されました。

「はい!それじゃあ、また後で!」

と言って玲音さんに手を振りながら帰りました。

そして、翌日の放課後から、ボクは放課後になると、玲音から写真のことを教えてもらったり、お互いのことを教えあったりしました。そして、ある程度基礎ができたなら、休日写真部の活動としていろんなところにデートに行きました。その時に先生がボクの親にボクと付き合ってる宣言しちゃってちよつとゴタゴタがあったんだけど、最終的には許してくれました！あ、もちろん、写真もきちんと取りましたし、コンクールにも一応きちんと参加しましたよ？落選しましたけど。

——そして、季節は流れて春になり、ボクも高校3年生になりました。写真部もなんとか残っていて、今は新入生の部活体験期間です。写真部は部室である第2情報室で活動内容を説明するポスターと今まで撮った写真を展示しています。が、

「なんで、誰も来てくれないのー！」

期間中に誰か1人ぐらいは来てくれるなんて期待を裏切って誰も来てくれませんでした。

『えー、本日の部活体験の終了時刻となりました。今日で部活体験週間は終わりとなります。新入生の皆さん、入りたい部活は決まりましたか？入部申請は再来週までです。忘れないようにしてください』

と、校内放送が流れ、机に突っ伏しました。そのまま突っ伏していると、

「香澄さん、今日は……その様子だと、今日も来なかったんですね」

と、玲音さんが部室に入ってきて突っ伏してるボクを見てそう言いました。

「はい……。あ、そうだ。今年部員が入らなかつたら写真部ってどうなるの？」

「とりあえず、今年度中は残るはずですよ。今年度の入学案内に書いてしまってるので、無いと言うには無理がありますから」

そう言われてガバツと体を起こしていつの間にか横に来ていた玲

音に抱きついて、

「そうなんだー！なら、これからもよろしくね、玲音さん！」

と言いました。玲音さんは慌てたようにボクを引き剥がして、

「ちよつと、香澄さん！まだ、完全下校時間じゃありませんし、誰か残っているかもしれないですよ！それに呼び方だつて“先生”じゃなくて“さん”になつてるじゃないですか！」

と言つてすぐに廊下まで行くと、誰もいないことを確認してほつとした様子で戻ってきました。それを見てたボクは、

「玲音さんは気にしすぎだと思うよ？もちろん、まだ誰かはいらうけど、こんな校舎の端っこまでこの時間にわざわざ来る人なんていないつて。だから、いいでしょ？ね？」

「そうかもしれないませんが……」

「だめ？」

「……わかりました。でも、5分だけですよ？」

「やったー！」

玲音さんにもう一度抱きつくと、抱きしめて頭を撫でてくれたのが嬉しくなつて玲音と顔を見合わせて、

「玲音さん、大好きだよ」

と言つてみた。すると、

「僕も大好きですよ、香澄」

と言つて、顔を近づけてきたのでびっくりして目を閉じてしまいました。そして、

「んっ」

「んっ?!……ん……ぷはっ！はー、はー、れ、玲音さん？いいいい、今のつて、え？キ、キキキスしたんですか?!」

「すみません、ついしたくなつてしまったので。……香澄は嫌でしたか？」

玲音さんが戸惑つてるボクを見てそう聞いてきました。

「う、ううん、嫌じゃないし、すっごい嬉しいんだけど……。なんだろう、実感がないというか、なんかあつさりしちゃつたなつていうか……」
と言っていると、

それから、数週間経ったある日の放課後、僕は校長に呼び出され、校長室にきています。何も心当たりがない、訳でもないですがあのことはバレてないと思うのですが、一体なんでしょう？

「鈴風先生、これを見てもらえますか？」

そうやって僕に一枚の紙を渡してきた。

「わかりました。って、次回の校内新聞ですか？……え?!」

そこには、『新米教師と生徒、禁断の恋か?!』という見出しとともに僕と香澄がキスしてる写真が載っていました。

「見てもらった通りです。鈴風先生、この記事に書かれていることは事実ですか？」

「……事実だった場合、どのような処分になりますか？」

「無理矢理追ったのなら懲戒処分と考えています」

「無理矢理ではなかったら？」

「2ヶ月ほど減給にしましょうか。私自身は応援したいので処分なしでもいいかと思うのですが、体裁を整えないといけないので。それで、どうなのですか？」

「……事実です。僕と香澄はお互いに自分の意思で付き合っています。もちろん、香澄のご両親からは許してもらっています」

「そうでしたか」

「このことを香澄に伝えてきてもいいですか？」

「もちろんです。これも持っていて大丈夫です。」

「ありがとうございます。それではしつゝあ、ちよつと待ってください」「い」なんでしょう?」

「明日の放課後この件に関する会議があると思います。もちろん出てもらわなければいけません、その時は鷹月さんと一緒に来ていただきたいです」

「わかりました。それでは失礼します」

僕はそう言って校長室を後にし、そのまま香澄が待っている教室に向かいました。教室に入ると既に香澄がいて、

「あ、玲音さん！遅かったね。何かあったの？」

と聞いてきました。

「校長先生に呼ばれてしまいました、すみません」

「え?!ほんとになにかあったの!?!」

「実は——」

僕は明日掲示板に貼られる校内新聞に自分たちのことが書かれること、そのせいでいろいろ聞かれるだろうけど真面目に答えなくて欲しいこと、放課後に会議に呼び出されるかもしれないことを伝えました。

「——というわけなんです」

「ば、バレちゃったんですか……」

「はい。さつきも言ったように適当に誤魔化して貰えばいいですか」

「う、うん」

「さてと、後少ししか時間がありませんが、今日の勉強会始めましょうか」

「お、お願いします」

結局その日はあまり進められずに解散しました。

そして次の日、

「「あれ、本当?!?!」」

「うわ！驚かさないでよー!」

朝、ボクが教室へと入るとクラス全員に校内新聞について聞かれました。

「ごめんって。それで、どうなの?」

「えーつと…玲音、先生のごことは先生の中なら一番好きだよ?異性としては…考えたことないかな」

「「いやいやいや、香澄(お前)と風鈴先生がキスしてる写真まであるのに、それはないでしょ(だろ)!!」」

「だから、声揃えて言わないで!写真って合成とか出来ちゃうから信じない方がいいよ!」

「んー、合成に見えないけど……。でも、記事書いたの日下部（ひかべ）さんだしなあー」

「その日下部さんって？」

「新聞部の副部長で、よく嘘だったり誇張しすぎてる記事書いたりしてるの。それに、元写真部で合成写真作って問題起こしたって聞いたよ」

「へえ、そうなんだ」

「っと、もうすぐ授業始まるし、また後で追及するからね！」

「えー！もうやめてよ！」

結局、休み時間になる度に質問攻めにあつたボクは疲れ切つて部室で突つ伏しています。

「やっぱり、色々聞かれたみたいですね」

「うん……。もう疲れたー」

横に玲音さんがいつの間にか居て、そんなことを言ってきました。

「この後、呼び出されるんですの忘れてないですよね？」

「忘れてないけどさー。大変なんだったのは変わらないんだからいいじゃないですか」

「わかりますけ『先生の呼び出しをします。鈴風先生、鈴風先生。職員室までお戻りください』呼び出されましたし、行きましようか」

「はーい……」

もう少しグダグダしたかったのに、と思いながらも立ち上がって玲音さんと職員室に向かいました。

コンコン

「失礼します」

「待っていましたよ、鈴風先生、鷹月さんもこちらにどうぞ」

「はい」「は、はいー！」

校長が僕たちを席まで案内してくれました。席に着くと、

「さて、お二人に来てもらったのは今朝、掲示板に張り出された校内新聞についてです。ご自身で記事は確認されましたか？」

「はい」

「では、それぞれに訊いていきましよう。まずは鷹月さんに質問します。あなたは鈴風先生が1人の男性として好きですか？」

「……えっと」

事前に僕の気持ちは聞いていたからか、香澄に先に訊いてました。香澄が答えづらそうにこちらをチラチラと見てきたので、

「正直に話して大丈夫ですよ。」

とこっさり伝えるとコクンと小さく頷いて、

「ボクは、玲音さんの優しい所とか、公私はちゃんと区別してくれる所とかひっくるめて、玲音さんの全部が好きです、大好きです」

と、顔を赤くして言い切りました。それを見て、他の先生が驚いた顔をしている中、校長だけが何か悪巧みをしてそんな笑みを浮かべていました。僕がジーツと見ているとこっちちを見て、

「鷹月さん、ありがとうございます。では、次は鈴風先生ですね」

「……楽しそうですね、校長先生」

「そんなことないですよ。それで、鈴風先生は鷹月さんの気持ちに伝えてあげないんですか？」

と相変わらずニヤニヤして言ってきました。短くため息をつくど、

「僕も、香澄の可愛い笑顔や、素直に甘えてくれる所、明るい所など香澄の全部が好きです」

と言い切りました。そして、校長が他の先生を見回して、

「さて、お互いに好きで、公私を区別出来ているのですから交際を許してもいいんじゃないかと思うのですが、先生方はどう考えますか？」

と言うと周りでヒソヒソ話が始まりました。それを確認した校長がこちらへ来ると職員室のドアを開け、

「もうそろそろ終わりますから、もう少し待ってくださいね、日下部さん」

「えっ？」

「あー、やっぱりバレちゃいましたか。入ってもいいですか？」

「当事者でしょうし、いいですよ。私はあちらに混ざってきますので」「ありがとうございます。……風鈴先生、久しぶり」

といつの間にか職員室前にいた日下部さんが入ってきてくると話しかけてきました。

「え、ええ、お久しぶりです。写真部を退部してからは新聞部に入ってますね。今回こそは合成だなんて言われずに済みそうですね。あ、そうでした、今回みたいに誇張したものや嘘のものは書かない方がいいですよ。写真部の二の舞になりかねませんから」

「うっ……。わ、わかりました。それと、あの時はスミマセンでした」と頭を下げられました。

「もういいですよ。それに、あれがあつたから今があるんです」と言つて香澄の手を握りました。

それから少しの間3人で話していると、「結論が出ました。3人ともいいですか?」

と校長から声がかかりました。僕たちは先生たちの方を向いて背筋を伸ばしました。

「では、結論を言います。」
「……」

「鈴風先生、鷹月さん。熱りが冷めるまでは押搦られるかもしれませんが、これからも楽しく学校生活を送ってくださいね」

「そ、それじゃあ(では)」
「お咎めなしです。では、これで職員会議を終わりますでしょうか。日下部さんは今日のことを踏まえて記事にするかどうかはお任せします」
「は、はい」

「では、お疲れ様でした」
「「「お疲れ様でした」」」

と、先生たちが全員出て行き、職員室に僕と香澄だけが残されました。

「れ、玲音さん。こ、これって夢じゃないよね」

「夢ではないですよ、香澄」

「これからも一緒にいられるんだよね?」

「ええ、そうです」

と言うと、香澄が抱きついてきました。僕は受け止めて抱き締め返

して頭を撫でました。

数日後、日下部さんが書いた校内新聞の号外が掲示板に貼られ、それを見たクラスメイトからまた問い詰められたり、お幸せにって言われたりでまた大変な日々が続きました。

最終回

あれから無事に高校を卒業し、大学に入学しました。玲音さんに聞いたところ、ボクが卒業した後誰も部員が入らなかつたらしくて廃部になったみたい。玲音さんは部活の顧問になることはなかつたみたい。それを聞いた時、首を傾げちゃったけど、玲音が、

『週末とかに部活の顧問として学校に行かなくても良くなったので、すぐに会えますしいいじゃないですか』

と言うから嬉しくなって気にしないことにしたのです。あ、そうだ。大学生になってしばらくして玲音が住んでるマンションで一緒に暮らすようになりました。いわゆる同棲ってやつです。平日はお互い学校で会えないし、休日も高校生の頃に比べて予定が合うことも減ってしまうって残念だーって思ってたある日、玲音からどこかの鍵を渡されました。

『これ何の鍵ですか？』

『僕の家の子鍵です。最近あまり会えなかつたですし、よかつたら一緒に住みませんか？』

『え、え？いい、いいんですか？』

『いいから渡してるんですよ』

『え、えへへ／＼あ、ありがとうございます』

ということと一緒に住むことになりました。

そんなこんなで数年後、

「鈴風玲音さん。あなたは鷹月香澄さんと結婚し、妻としてしています。あなたはこの結婚を神の導きによるものだと受け取り、その教えに従って夫としての分を果たし、常に妻を愛し、敬い、慰め、助けて、変わることなく、健やかなるときも病める時も富める時も、貧しき時も、死が二人を別つまで命の灯火の続く限り、あなたの妻に対して、堅く節操を守ることを約束しますか？」

「はい、誓います」

「鷹月香澄さん。あなたは鈴風玲音さんと結婚し、夫として

います。あなたはこの結婚を神の導きによるものだと受け取り、その教えに従って妻としての分を果たし、常に夫を愛し、敬い、慰め、助けて、変わることなく、健やかなるときも病める時も富める時も、貧しき時も、死が二人を別つまで命の灯火の続く限り、あなたの夫に対して、堅く節操を守ることを約束しますか？」

「はい、誓います」

互いに誓いの言葉を述べると、指輪の交換へと移ります。

「それでは、指輪の交換をしてください」

まずは玲音さんがボクの左手の薬指の指輪をはめ、次にボクが玲音さんの左手の薬指に指をはめました。そして、

「それでは誓いのキスを」

玲音さんがボクのベールをそっと上げると、ゆつくりとキスをしてくれました。

「っ、疲れたー」

「そうですね、流石に疲れました」

結婚式が終わって、家で二人でゆつくりしています。

「ふうー。あ、そうだ、玲音さん」

「なんですか？」

玲音さんの方を向いて座り直すと、

「これからも末長くお願いします」

とにっこり笑いながら言うと、玲音も

「こちらこそ、末長くお願いします」

と笑って言ってくれました。

孤独だった勇者の物語 プロローグ

『霧が出る日に森に入ってはならない。もし、そのときに森に入ってしまったら戻ってこられなくなる。——』

これは俺——つるぎゆうと剣優斗がいた村に伝わる伝承の一部だ。俺が覚えているのはこれだけだが、まだ続きがあったと思う。が、長くて覚えることを諦めた。周りの人には、この伝承を覚えている人もいるが、ほとんどが信じていない。俺も信じていない人の一人だった。あの時までは……。

俺は、幼い頃に家族を事故で亡くした。そのせいで周囲に対して心を閉ざすようになった。元々友達は少なかったのだが、これが原因で、友達が減ってついにはいなくなってしまった。料理や洗濯など、並大抵のことはすぐにできるようになってしまったので、一人暮らしをしながら退屈な日々を過ごしていた。今までで興味が出たものなんて無かったから、目標や将来にやりたいと思うことが全く見つからずに、ダラダラと毎日を過ごしていた。このまま退屈な日々を送っていくと思っていた。

そんな日常を変えたのは、ジメツとしていて曇っていた日のことだった。学校からの帰り道で俺は、森の近くを歩いていた。少し道端で休んでいたら、視界の端で何かが光った。不思議に思って顔を向けてみると、森の中で光っているものがあった。

「森にはだれもはいるはずねえのに落とす物とかあるわけないよな。

……霧も出てないし、ちよつと探しに行ってみるか」

俺はそう呟いて森に入った。その瞬間、急に霧が出てきた。

「はあ、どういふことだ？ さつきまで、霧なんて出てなかったのに……」

そう言って振り返ってみると、道がなくなっていた。

「な、なんで、道がないんだよ？ 霧が出たからって道が見えないなんて

ことあるはずねえのに……。それにしても、あの伝承って本当だったんだな。こうなった以上はどうかしてここを出ないといけねえな……。とりあえず、進んでみないことにはどうにもならないよな」
そう言って歩き出した。

——あの伝承にはこんな続きがあった。

『霧が出る日に森に入ってはならない。もし、そのときに森に入ってしまったら戻ってこられなくなる。かもしれない。戻ってこられる可能性はあるが、それはそこにいる人たち次第だ。』
と。

歩き始めてから多分数分ぐらい経ったと思う。さすがに歩き疲れてヘトヘトになって辟易としていたら、ついに視界が晴れてきた。

「お、やっと霧が晴れてきたか」

そういつた瞬間、ぱっと視界が開けた。そして、辺り一面の花畑が目に映り込んだ。

「おいおい、晴れてたときに森に入った時には、こんな場所無かったぞ……。てことは、本当に伝承通りじゃねえかよ。さすがに笑えねえぞこれは」

俺は呆然と呟いた。

歩き疲れてしばらくブーツと座っていると、遠くから、誰かが走ってくるのが見えた。近づいてくるにつれて、姿がはつきりとしてきた。何とそれは、俺と同じぐらいの年齢の少女だった。その少女が、「あれ、何か光ったと思っと思ってきてみたけど、まさか、人がいるなんてね。君はどこから来たの？」

と尋ねてきた。それに対して俺は

「んく、分んねえや。俺、どうやら、ここの住人じゃないみたいだから。」

と、言った。少女は、

「てことは、別の世界から来たってこと？」

「そうなるな」

「ふーん……って、えく!!もし、本当だったら20年ぶりだよ!」

と、とにかく驚いていた。そして落ち着くや否や、

「ここで話すのも何だし、とりあえずついてきて」

少女はそう言って、俺の手を引っ張りながら歩き始めた。

「え、ちよ、急に手を引っ張るなよ!それより、どこ行く気だよ!」

俺は、そう言った。しかし少女は、

「とりあえず、来てみればわかるよ♪」

楽しそうに言った。

数分後、俺と少女はある町にいた。俺は、

「なあ、そろそろ手を離してくれねえか?いい加減恥ずかしくなってきた」

「あ、そうだね。ごめん、ごめん」

と手を離してくれた。俺は、とりあえず疑問に思ったことを聞いてみた。

「お前が連れてきたかったのはここか?」

「んく、もう少し先かな、ちやんとついてきてね」

と言って歩き出したので、後を追いかけた。その町にいる人は、俺

を不思議なものを見るような目で見てくる。

さらに歩くこと数分、ある家に着いた。少女はノックすると、

「おーい、ファイア、いるー？何か不思議な人いたから、連れてきたよ」

不思議な人言うな、と俺が思っているのを知らず、少女は言った。すると、中から女の子が出てきた。

「何だ？騒がしいぞ、ティナ……。と、後ろにいる人がそうか？初めまして。ワシは、ルカード・ファイアだ。一応この町の防衛に関する指揮を任されている。ファイアと呼んでくれ」

と女の子もとい、ファイアがそう言った。すると、少女が思い出したように、

「自己紹介がまだだったね。セシル・ティナだよ♪ティナでいいよ」

「俺は、剣優斗だ。好きな呼び方でいいぞ」

と、ティナの後に俺も自己紹介をした。

「さて、本題に入るが、ティナ、優斗のどこが不思議なんだ？」

とファイアが言う。とティナが、

「そうだったね。剣君は、どうやら別の世界から来たらしいんだ」

といった。

「なんだと!?本当か、優斗?」

「ああ、知らねえうちにここにいた。ところで、俺はどこに住めばいいんだ?」

とファイアが尋ねてきたので俺は答え、さらに聞いてみた。

「そうじゃな……。ティナ、優斗にこの町を案内するついでに少しこの世界について説明してやってくれ。住むところだが、とりあえずワシの家に空き部屋があるから、そこに泊まってくれ」

「わかった。んじゃ、行こうぜ、ティナ」

「うん。それじゃ行ってくるね、ファイア。夕方頃には戻ってくるよー」といって、俺とティナは家を出て、町を歩くことにした。

町をぶらぶら歩いているうちにティナから、この町——ユークリウツの周辺には、協定を結んでいる国『ノーランド』と敵対している国『ネメシアス』があることを教えてもらった。

こんな話をしていると、

「おーい、ティナちゃん！」

と少年が走ってきた。

「あ、レンー！今ね、剣君に町の案内をしてるの」

とティナが言った。

「俺は剣優斗だ。好きに呼んでくれ。えっと……」

「グラウス・レンです。レンってよんでください」

「んじや、レンよろしくな」

「こちらこそよろしくです。ところで、珍しい名前ですね。どこから来たんですか？」

「あのね、レン、驚かないで聞いて欲しいんだけど、剣君はね、別の世界から来たんだ」

「そうなんですか……って、エー!?!」

レンが大声を出したので、周りにいた人が全員立ち止まってこちらを向いたが、すぐに、歩き出した。ティナが慌てて、

「ちよつ、声大きいってレン！」

と注意するとレンは、

「すみません。とりあえずここじゃ邪魔になるので、ウチの店に来て、ゆっくり話しませんか？」

「それいいね♪剣君は、それでいい？」

「ああ、こっちの食べ物の味も知りたかったし、いいぞ」

「それでは、行きましょう！ティナちゃん、優斗さん」

そうして、俺たちは、レンの家の店『グラ食堂』に向かうことになった。

『グラ食堂』についた俺たちは、三人でテーブルを囲むように座り、注文を済ませてから、この町について教えてもらおうことにした。

「ところで、この町はどういうところなんだ？」

「この町は、いろいろな国と交流があって、商業が盛んなんです」

「ついでに、ノーランドは鉱山が近いから、兵士の装備を作ることが盛んなんだ。そして、ネメシアスは海が近くて、漁業が盛んなんだ。それに、軍隊の規模が大きくて、周囲の国の侵略をしようとしてるんだ」

ここまで話をしたところで店員が来て、

「お待たせしました。ご注文の品です。では、ごゆっくり」

と料理をテーブルにおいてから去って行った。レンが、

「ウチの店の看板メニューのミートドリアです。食べてみてください
い」

「ま、とりあえず、いただきます。…うん、うまいな！」

「でしょ！…このミートドリアは、この町で一番おいしいんだ」

と、雑談を始めてしまい、いつの間にか夕方になっていた。

「あ、もうそろそろファイアのところに戻らないといけないね。また今
度ゆっくり話そうね、レン」

「もうそんな時間か。またな、レン」

「はい。では、また来てくださいね」

そう言っただけで俺とティナはファイアのところにへ戻ることにした。

フィナの家へ戻ると、何か騒がしくなっていた。俺とティナは顔を見合わせて、

「何だいったい、どうなってるか知らないけど、とりあえず入ろうぜ」
「そうだね。何があったんだろうね」

と話しながら扉を開けてみると、

「何!? ネメシアスが国境近くまで侵攻して来ただど!! 戦況はどうなってる?」

「なにやら敵側に不穏な動きがありますが、現状のままでは30分は持つと思われませう。」

と、フィアと兵士が物騒なことを言い合っていた。ティナはおろおろしているが、俺は気にせず、

「ただいま、フィア……で合ってるのか? それよりも、ネメシアスが攻めてきたってのは本当か?」

「お、優斗にティナか。今戻ってきたところで悪いが、ワシは用ができて、すぐにでなければいけない。とりあえず優斗はティナの家に泊まらせてもらってくれ。ティナ、いいよな?」

「私は、いいけど……剣くんはいいの?」

と、話が進んだ。俺は今日の前にいる、少しでもこの世界について教えてくれた二人に何かできたらなと密かに思っていた。だからか、
「なあ、俺もついていっていいか?」

と、言ってしまった。すると、やはりフィアとティナは驚いた顔を
して、

「正気か、優斗?! しれないんじゃないぞ?」

「そうだよ!? 何、急に言ってるの?」

と、やめるようにと暗に言ってきた。俺は、

「向こうで訳あって剣術はやってたから、自分の身は守れる。だから頼む」

「ハア、仕方ない、剣は貸す。危なくなったらすぐに逃げるのじゃぞ」
「わかった」

「とりあえず、急ぐぞ。では、行ってくる」
「行ってらっしゃーい。気をつけてね〜」
そして、戦場へ向かった。

数分後、戦場に着いた俺たちは明らかにこちらの軍が劣勢のようだ。

「何でこうなってるんだ？って、どう見てもあの竜が原因だよな？」
「そうじゃな？」

「なら、先にあれを倒した方がいいよな？」

「そうじゃが、やめとけ。あれは……」

「とりあえず、行ってくら」

そう言っただけで、俺のところへ走り出した。

「って、人の話を聞け！ハア、仕方ない。さっさと指示を出してくるか」

と言う声が聞こえた。

ものの五分で竜の足下付近についた。そこでは、

「に、逃げろー!!」「死にたくねえ!!」「グルアアアアアアアア!!」
と悲惨なことになっていた。

「ちよつと、ヤバイなこれ。とりあえず、どうにかしてみるか」

そう言っただけで、俺はフィアに貸してもらった剣を抜いてみた。

「何となくしつくりくると思ったなら、俺が向こうで使ってたのと同じじゃん！ま、とりあえず、斬ってみるか」

そう言っただけで、俺は斬りつけた。だが、

「硬くてえなー!!って、うおおおおお!!」

剣がはじかれてしまい、さらに、気づかれてしまい、こちらを踏みつぶそうとしてきた。とにかく逃げたが、石に躓いてしまった。

「痛くてえな。あ、やっちゃまったな」

竜の足が頭上に迫っていた。

「優斗オー!!逃げろ!!」

フィアが叫んでるのが聞こえたが、そこで、意識が落ちた。

「お………さい、ゆ………。起きてください、優斗」

……誰か、俺の肩を揺すりながら呼んでいるのが聞こえる。声の主を確認するために、目を開けてみた。そこには知らない少女がいた。そして、

「うわ!? 誰、お前? 俺死んだの? てか、ここどこ?」

誰でも、一度は経験したことがあるであろう、いきなり目の前に人がいて驚くという状況だ。しかし、目の前の少女は至って冷静に、

「そういうえば、自己紹介がまだでしたね。私は92代目の精霊王です」

「精霊王ねえ、呼びにくいし、れいって呼んでもいいか?」

「かまいませんよ、優斗。そういうえば、質問の答えがまだでしたね。とりあえず、あなたは死んでいません。そしてここは、あなたの夢の中といった方がわかりやすいですね」

と、少女もとい、れいがそう言った。

「そうか。んで、何か用でもあるのか?」

と、聞いた。

「そうでしたね。優斗、あなたに問います、この先にさらなる困難があるろうとも、生きたいと思えますか?」

「ああ、生きたいよ。それに守らないといけない約束があるし。」

「そうですか………ならば、力を授けましょう」

と、れいが言った。俺は、その言葉に驚いた。

「まじか?!」

「ええ、もちろんです。来なさい、シルフ」

と言うと、新たに女性がでてきた。そして、

「私は、風の精霊シルフ。失礼ですが、精霊王、そこにいるものが新たな主ですか?」

と、開口一番に俺を訪ねてきた。

「こりや、いったいどういうことだ、れい? 俺が、シルフの主って?」

「ああ、言ってませんでしたね。あなたに与える力、それは、精霊使いになることです」

「ふーん……って、俺そんな物騒なものになるのかよ?!ま、それはおいといて、なんで、風なんだ? 相手はワイバーンだろ?」

「そうです。しかし、優斗の様子からしてまず生き残らないといけなはずです。そして、煩わしいのも嫌いなはずです」

「その通りだけど……」

「それなら、シルフと契約してください」

「はあ、わかったよ。どうすりゃいい?」

「簡単です。今から言う言葉の後に、精霊の名前を言ってください」
「おう」

「我、契約せし者。我、汝の力を欲す者。この応答に答えよ、です」

「わかった。『我、契約せし者。我、汝の力を欲す者。この応答に答えよ、シルフ!』」

すると、俺とシルフの足下に魔方陣が浮かび、強い光を放った。すぐにその光は消え去った。そして俺は自分の左腕に違和感を感じたので、見てみた。そこには、くぼみが7個と緑色の石のついたくぼみがある籠手があった。

「こりや何だ? んで、シルフはどこに行ったんだ?」

「それは、かなり珍しいタイプの精霊の籠手です。シルフならすでに石になってくぼみにはまっています」

「この石がそうなのか?」

(そうでございませ、優斗殿)

「うわー! もしかして、今の声はシルフか? 石になってんのに何で話せるんだ?」

と、どうやらすごいことになってきている様だ。

「契約した精霊ならば、その籠手につけているだけで会話できるようになっています。また、籠手が邪魔なときには消えろと念じれば、なくなつて、石が勝手に外れるようになっています。逆に、籠手が必要などときには来いと念じれば現れるようになっていきます」

「ご丁寧の説明ありがとうな。ところで、どうやって力を借りるんだ?」

と、一番重要なことを聞き忘れていたことを思い出した。

「そうでした」

と、思い出したように言った。

「では、力も借り方の説明をします。といってもただ、〃力ある言葉〃を言うだけです。」

「例えば、どんなのがその〃力ある言葉〃なんだ？」

「風、竜巻、嵐などの風に関係する言葉がそうです。攻撃ならブラストと、付加なら武器とエンチャントと、拘束ならバインドと言ってくれればそれが〃力ある言葉〃となります」

「ふーん。要は使い方は多種多様という訳か」

「そういうことです。この様子なら、もう大丈夫そうですね」

と、れいが言った。俺は不思議に思い、

「そりゃ、どういうことだ？」

「もうそろそろ私の力の限界です。意識を体に戻します。どうかご武運を」

「そういうことか。なら、仕方ないか。とりあえず、死なないように頑張るとしますか」

「死なないでくださいね」

と、れいは言って、俺の足下に穴をつくった。

「その穴に入れば、体に意識が戻ります」

「そうか。んじゃ、ありがとな」

そう言って、俺が穴に入ってから、れいが

「優斗、あなたは、私に最も近い存在。もしかしたら——」

俺は、そこまでしか聞けなかった。優斗の今後が変わるかもしれないかもしれないと知らずに。

「行っちゃったか。全部伝えきれなかったな。優斗が行き着く終わりのこと」

れいは、残念そうに呟いた。

ちよつと時を遡って優斗がワイバーンと戦い始めた頃、ファイアは、
「いったい、何故こうなつとるのじゃ？」

と、ここの指揮官に尋ねていた。

「おそらくネメシアス軍がタイムしていると思われるワイバーンによる攻撃が開始。それにより、こちらの戦線が崩れたようです」

と指揮官が説明した。ファイアは、

「とりあえず、ネメシアス軍は何とかしてくれ。ワシは急いでワイバーンを何とかしてくる」

と言い終えると指揮官の返事を聞かずに走って行った。

ワイバーンの全体がはつきり見えるところまで来たとき、優斗がワイバーンの上げている足の下にいた。ワシは、

「優斗オー!!逃げろ!!」

と、聞こえているかわからないがとつきに叫んでいた。しかし、優斗は左腕を前に突き出し、何か呟いたようだ。何をやっとなるんじや、早く逃げんかと思っただが、次の瞬間、ワイバーンが後ろに倒れた。

「ど、どうなつとるのじや?あの体勢でワイバーンは倒れないはずじやが」

立ち止まって、呆然と呟いた。

目を開けると、視界が暗くなる前のままだった。左腕を前に突き出し、

「力を借りるぜ、シルフ。エアロブラスト!!」

すると、左腕の前で空気が爆発し、ワイバーンが後ろに倒れた。俺は、遠くで突っ立っているファイアへ駆け寄ると、

「なぜ、ワイバーンは倒れたんじや?それよりも、その左腕はどうしたんじや?!」

と、ファイアが詰め寄ってきて、すごい剣幕で聞いてきた。俺は慌てて、

「と、とりあえず、質問は後にしてくれ。いくらでも聞くから。それより、先にワイバーンだろ?あと、ちよつと離れてくれ。近すぎて、その……」

と、顔をそらして言った。あと数センチでキスできそうなくらいの近さだったのだ。ファイアも気づいたようで、パツと離れてくれた。なんとなく、顔が赤くなっているのは俺もファイアもそうだろう。ファイア

は気まずそうにしながらも、

「あ、ああ、すまん。と、とにかくだ、質問は後でじっくりするとしよう。それよりも……」

「ああ、さっさとあいつを殺らないとな」

そう言つてワイーンを見ると、立ち上がったところだった。

「行くぞ、優斗。」

「ああ。ソードエンチャント、ウインドウー」

ファイアが突撃したので、俺は指を剣に滑らし、風を纏わせてファイアに続いて走り出す。やがて、武器の届く範囲に入ると、

「ハアアアー」「フン！」

ファイアはメイスで足の小指に当たるであろう部分を叩き、俺は跳んで胴を刀で横に一閃した。ワイバーンは攻撃を受けてよろめいたが、すぐに体勢を直し、俺たちを踏みつけようとしてくる。俺もファイアも既に離れていたもので、当たることはない。続いてワイバーンがこちらに走ってきてるが、構わず、

「エアカッター！」

俺は、足の筋に当たるように調節した風の刃を放った。足の筋が斬られて、ワイバーンが倒れた。

「ファイア、トドメを頼む」

「わかった！」

「エアバースト！」

ファイアはジャンプして攻撃しようとしてたので、ファイアがジャンプした真下で空気を小爆発させ、高さを稼げるようにする。そして、

「メテオ・クラッシュャー！」

と、ファイアがメイスを振り下ろした。ワイバーンに当たると、ワイバーンが動かなくなり、そのまま灰になって消えていった。へえ、モンスターの類いつてああいう風に消えるんだ、と思った。

ファイアがこっちへ歩いて来ていて、見た感じではお互いに大丈夫そうかなっと思つた瞬間、こっちに來てからいろいろなことがいっぺんに起こつたから、変に疲れたのだろう、急に体が重くなり、意識が遠のいていった。誰かが倒れそうになっている俺の体を受け止めなが

ら、
「お、おい！ハア、仕方ない奴じや」
と呟くのが最後に聞こえた。

気がつくと、俺はどこかの部屋のベッドの上にいる。

「うーん、あれ？俺なんでベッドの上にいるんだ？——そういや、ワイバーン倒してから覚えてねえな」

とぶつぶつ言っていると、部屋のドアが開いてティナが入ってきた。

「あ、剣君起きてたんだ……て、剣君もう大丈夫なの？まだどこか痛む？それよりも、ファイアに剣君が起きたの伝えに行かないと！」

「あ、おいつて……まあ、後で聞けばいいか。相変わらず騒がしい奴だな」

ティナは、俺が起きたのに気づくと、慌てて部屋を飛び出していた。

少しすると、ティナがファイアを連れて戻ってきた。

「おお、優斗、起きたのか？具合はどうだ？」

「痛みが全くないから、問題ないな。ところで、どうして俺はここにいるんだ？つか、ここどこ？」

「ワシの家の空き部屋の一つじゃ。ワイバーンを倒した後に優斗が急に倒れたんじゃないよ。そして、優斗をここに運んだのは、ワシじゃよ。もちろん、奴らを追い返してからじゃ」

「いや、ファイアが優斗をおぶって帰ってきたの見たときはすっごい驚いたんだよ！とりあえず、剣君をこのベッドに寝かせて治療してからファイアに事情を聞いたけど大変だったみたいだね。だけど、」

と、そこで言葉を切ると、ティナとファイアは目配せをし大きく息を吸うと、

「二つたい、どれだけ心配したと思ってるの（んじゃ）！?だいたい、三日も寝てたんだよ（じゃぞ）！」

「うっ、何か、すまん、二人にかなり心配かけたみたいで。それでも、二人して同時に言うことはないだろうがよ。さすがに傷つくぞ」

「……ごめん」

と言ったやりとりが終わると、ぐううううくと俺の腹が鳴った。

「あははははははははは！」

「し、仕方ねえだろー！」

ティナとフィアは盛大に笑った。俺は、その間恥ずかしくてずっとそっぽをむいていた。しばらくして落ち着いてきた頃にフィアが、「ふー、笑った、笑った。とりあえず、飯にでもするか。ティナも一緒に食べていくじやろ？」

「……頼む」

「もちろんだよ」

と言うわけで、お昼を食べることになったのだ。

飯を食べ終えてからフィアが、

「それはそうと、優斗、その左腕の籠手は何なのじゃ？治療のためにはずそうとしてもどうやってもはずれないのじゃ。それに、あの時の力はなんじゃ？」

「ああ、そういや説明するって言ってたっけ。ちよつと長くなるけど、時間は大丈夫か？」

「ワシは問題ないが、ティナは大丈夫か？」

「多分大丈夫だよ。ずっとそのこと気になってたからね、早く教えて？」

二人とも大丈夫そうなので、説明を始めた。

「とりあえず、この籠手についてだな。まあ、力の話にも繋がるけどな。これは、れいに貰ったものだ。確か、契約した精霊の力を借りるための道具なんだと」

「ちよつと待ってくれ、今、契約した精霊と言ったか？それより、れいって誰なんだ？」

「れいは、92代目の精霊王なんだと」

「……え？ちよ、ちよつと、精霊王と会ったの!？」

「ああ。ワイバーンに踏まれそうになったときに急に意識が飛んでな。その時に夢の中でれいに会ったんだよ。そこで風の精霊のシル

フと契約したと同時に現れたんだよ、籠手が。かなり珍しいタイプなんだよな、シルフ?」

(そうでございませう。一度に何人も精霊を扱える道具は、籠手タイプのものだけです。例えいたとしても、二人だけです)

「ふーん。今、シルフに聞いたんだが、これは2つしかないらしい」「それって、すごいことなんだよね?」

「そうなんだが、いまいち実感が湧かないんだよな。まあ、これで説明は終わりだな。思ったより短くなったわ。そういや、精霊王ってどういう存在なんだ?」

説明が終わったので、精霊王について尋ねてみた。

「神話上の人物だよ。全ての精霊を統率していて、この世界を創ったとされてるんだよ」

「まあ、実在してるんだけどな」

「な、なあ、優斗は元いた世界に帰りたいと思つてるのか?」

今の会話に参加してなかったファイアが急に聞いてくる。

「いや、その、そんな力を持ったのじゃから……」

「帰つても、扱いが悪くなるってか? そんなのどうでもいいや。

あつちには希望なんてないから、帰る気なんてないしな」

「……え? それって何か寂しくないかな?」

ティナが俺の話の話を聞いて、哀しそうに言った。俺は、

「そんなことないぜ? 両親も親族も友達なんていうのもいなかったんだ。自活のために必要なことはすぐに出来るようになったしな。趣味ももちろん無かったから、毎日意味も無く過ごしてきたんだ」

そこまで言うと、ティナとファイアを見た。何故か、二人とも泣きそうになっていた。

「おいおい、なんでお前らが泣きそうになってんだよ。まあ、こつちに来てから、やりたいことが見つかったから、こつちに残るつもりだよ。こう思ったのは、二人のおかげなんだぜ」

と言うと、二人の頭を撫でながら、微笑んだ。その途端、二人とも耳まで真っ赤になり俺の手を払いのけて下を向いてしまった。

「なんで、そんなに赤くなつてんだ?」

「な、なんでもないよ（のじゃよ）、剣君（優斗）？」

と、赤くなつた理由を聞いたのだが、二人とも慌てて何でも無いと言ってきた。

しばらくして二人が落ち着いた頃、ファイアが、

「優斗よ、ワシの軍を手伝ってくれぬか？」

と、俺に言ってきたのだ。ファイアがなぜ、俺を軍に誘つたのか理由を聞いておきたかつたが、この世界に残ると決めた以上、どうにかして自活しなければ駄目だろうなと思つていたので。なら問題ないかという考えに行き着いたので俺は、

「それはもちろんいいぜ」

「そ、そうか。ならさつ「けどなファイア、なんか俺に隠してることでもあるんじゃないのか？」つて、な、な、何を言ってるのじゃ、優斗よ？ワシは優斗が新しい精霊王の候補の一人だからって見方にしておこうなどとは考えておらぬぞ」

「ふーん、てか、俺が精霊王の候補つてどういうことだ!？」

「し、しまった。そ、それはじゃな……」

一応承諾して理由について鎌をかけてみたら、とんでもない理由が聞けた。ファイアが戸惑っていると、

「ファイア、今更誤魔化すのは無理じゃないかな？」

とティナが言う。

「それも、そうじゃの……優斗、おぬしにはまだ話していないことがあつたのじゃ」

なんだか、嫌なことが始まってしまいそうな気がするが、とりあえず続きを聞くことにした。

「本当は、あの神話には続きがあつたのじゃ。精霊王は百年に一度交代するのじゃが、それが一ヶ月と二週間後なのじゃ。そして、新しい精霊王のいたる土地が豊かになるそうじゃ」

「つまり、今のうちに味方につけておいて、ほかの精霊王の候補を倒したいってことか？」

「う、うむ。そういふことじゃ」

ファイアは少しばつが悪そうに、

「この話の後で悪いのじやが、優斗は本当によいのか？」

と言ってきた。

「まあ、いいさ。一度決めたことを変えるのは、俺の信念に反するんでね」

「そ、そうか。ならば、これからよろしくじやな」

「ああ、よろしくな。ところでさ、ここにずっと世話になるわけにもいかねえし、どっか住めそうなところ探してくれねえか？」

「ん、わかったのじや。とりあえず、安静をしばらくの間言われてるからその間にどこか探しておこう。」

と言う会話の後、ふと外を見ると空が赤くなってきたことに気づいた。「なあ、もう夕方なんだが時間は大丈夫なのか？」

「……え？嘘でしょ（じやろ）？」

といって、窓の方を向いて確認していた。するとティナは慌てて立ち上がり、

「やばい……早く帰らないと怒られちゃう……ふ、二人ともまたねー！」

と言って、走って部屋を出て行った。そして、ファイアが、

「優斗、夕食は食べられそうか？」

と、何事もなかったように話してくるので、

「んー、このままもう一眠りするわ」

と、俺も普段通りに返事をした。

そして、ファイアがお休みと言って部屋を出ていった。そのあと、優斗とファイアがそれぞれの部屋で笑ってしまったのはティナには内緒なのであった。

「あーあ、面白かったわ。一体、これから何が起こるんだろうな？」

俺はひとしきり笑って、そう呟いてから眠りについた。

優斗が起きて数日後、ワシとティナは、ある喫茶店の隅で話していた。

「あの時の優斗君の笑顔は反則だったよね」

「ああ。そうだな。普段は無愛想で少し怖い感じだからな」

「そうだよね。笑ったときは凜々しい感じとかわいい感じが混じってたもんね」

「あの時は、何でも無いと誤魔化したけど、お前のせいだぞって言ってしまっただったな」

と言うと、二人とも優斗の笑顔（本人曰く微笑み出そうだが）を思い出してしまい、また顔を赤くしてしまった。

「なんか、ドキドキしちゃうよね。何でだろうね？」

「確かにな。何故じゃろうな？」

このとき、二人は気づいていなかった。同じ人を好きになってしまったことを……。

「よっしゃー！ やつと運動が出来るぞー！……ってなるはずなのに、なんだよこの本の量は！」

「剣君、口より手を動かしてよ。精霊について知りたいなってん昨日言ってたよね？」

「それは、そうなんだけどさ……」

あれから数日後、ファイアが誰も使っていない家に住めるように手配してくれた。医者にもう体を動かしてもいいと言われて喜んでいるところにファイアとティナが精霊に関する本を持ってきて今に至るのだ。

ファイアはずつと本とにらみ合っていて、こちらの話は聞いていないようだ。俺もさすがに反論を諦めて本とのにらみ合いを再開した。

しばらくすると

「あぁー！ー！」

と、ティナが急に大声をだした。

突然、ティナが大声を出したので、俺とファイアは、

「!!ど、どうしたんだ(のじゃ)、急に!?!」

と尋ねた。ティナがある本のページを見せながら、

「これってシルフのことだよな？」

「どれどれ……ふむ。確かにシルフじゃな。ほれ、優斗も見てみよ」

「あぁ。……そうだな。シルフに訊いたら分かるみたいだな」

どうやら、精霊にはそれぞれに相性のいい精霊の居場所が何となくだが分かるらしいのだ。俺は籠手(自由に具現化が出来るらしい)を具現化させると、

(と、言うわけだ。どこにいるか分かるか?)

(分かるのはヘルフレイズですね。どうやら、北東の洞窟内にいるみたいですよ)

(そんだけ分かれば十分だ。ありがとうな、シルフ)

(いえいえ、これくらいはお礼を言われるほどでもございません。また用がございましたらお呼びください)

シルフと話し終え籠手を消すと、

「何か分かったのか？」

と、フィアが訊いてきた。

「ああ。北東の方にある洞窟にヘルフレイズがいるんだとよ」

「うむ。ならば、すぐに準備をするとするか。どうせ止めたとしても
ティナも付いてくるつもりじゃろうし」

「もちろんだよ！」

いつもの三人で洞窟に向かうことになった。

「ところでさ、剣君の籠手って本当に不思議だよね……」

と、ティナが急に訊いてきた。

「ティナ、それはここにいる全員が思ってることだから言わないでくれ」

と、言うつと籠手を具現化させる。籠手の手甲から翼のようにスロットが3個ずつ一対付いていて、その付け根にあと一つスロットが付いているのだ。コレを初めて見た人で不思議に思わない方が不思議だ。

「なんか、ごめんね」

「いいよ、もう慣れてきたし」

と言つて籠手を消した。

「まあ、とりあえずさっさと準備して来いよ。俺は玄関で待つとくわ」
「うん！ちよつと待っててね（くれよ）」

数分後、玄関前に集合し、

「さ、行くか」

「おー!!」

こうして、北東の洞窟に向けて出発するのだった。

数時間後、俺たちはある洞窟に着いた。

(なあ、ここで合ってるのか、シルフ?)

(はい、この奥からヘルフレイズの気配がします)

「ここにヘルフレイズがいるらしいから仲間にしてさっさと帰って休もうぜ」

「うん！」

「……」

「どうかしたの、ファイア？森の中に何かいるの？」

「…。あ、ああ、なんでもないのであるが、心配じゃからここに残る」

「…、そうか。頼むわ、ファイア。よーし！行くぞ、ティナ」

「うん！」

そう言つて、俺とティナは洞窟に入つて行つた。

洞窟を奥へと進んでいくと、壁の松明に何故か火が灯つた。少しして、奥に大きな空洞が見えてきた。そして、

「我は、炎の精霊の“ヘルフレイズ”なり。汝、我に何用でここに来た？」

と、空洞の奥の台座の方から声が聞こえてきた。俺は、

「大切な人を守るだけの力を手に入れるために来たんだ！さつさと、力をよこせ！」

と、その方へ叫んだ。

「フハハ、面白い。その力を持ちながらも、さらに力を欲するというか。ならば、汝の力を我に証明してみよ！」

「ああ、いいぜ！ティナはここにいろよ！」

と言つて、奥へ駆けていった。そして、ヘルフレイズと対峙すると、

「さあ、始めようぜ！家に帰つてさつさと休みたいんだよ」

「よかろう、さあ、来るがよい！」

俺とヘルフレイズとの闘いが始まった頃、ファイアは森の中に潜んでいた追つ手(?)を捕まえて縄で縛り、追つてきた理由を問い詰めていた。

「なぜ、ワシらをつけたのじゃ？」

「そりゃ、言う訳にやいかねえんだ。こちらとて、依頼者のことを軽々教えられねえんだよ」

「それはそうじゃな」

「そうだ、そうだ！ノーランドの精霊使いからの依頼だなんて、教えられるかよ！」

「おい！何言ってるんだよ、テメエ！」

「ひい！す、すみません……。で、でも、新しく生まれた精霊使いの調査だってことは言ってる無いですよ？」

「今言ったじやろうが……。じやから、優斗は精霊の力を使わなかったのじやな」

「あ……」

「おい！テメエ！さつきからベラベラ喋ってるじゃねえぞ、コラ！」

「少しは大人しくしとれ」

「いてっ」

内輪もめを始めかけていた追っ手たちの頭を剣のさやで叩いた。

「さて、優斗の方は、どうなったのかの……」

と、洞窟の方を向いて呟いた。

一方、優斗に置いて行かれたティナは、

「剣君、大丈夫かな……。それに、さつき言ってた『大切な人』って誰のことなんだろう？」

と、呟いていた。

「汝よ、先程までの威勢の良さはどうしたのだ？まさか、コレで終わりではないだろうな？」

と、ヘルフレイズが俺に尋ねてきた。ヘルフレイズの方にはあまり疲労が見えないが、俺は既に立っているので精一杯なのだ。

「こっちの風の攻撃を吸収するとか、反則だろ……」

「ククク、汝の攻撃など痛くも痒くもないわ！さて、もうそろそろ終わりにするかの。後でついてきた女二人にも同じ場所へ行つて貰うとするかの」

「っ！そんなことさせてたまるかよ……。あいつらは絶対守つて見せるんだ！」

と、ヘルフレイズに向かって言った。すると、俺の体が急に光って、何も見えなくなった。

「お久しぶりです、優斗」

目を開けると、れいが俺の前に立っていた。

「ああ、そうだな。まさか、またここに来る羽目になるとはな……」

「ふふつ、今回はどうするつもりですか？」

「どうするつてもな……ただ、今の力じゃ、どうにもなんねえんだよな……」

「となると、優斗は約束を破るつもり「んなこと、してたまるか！」ひっ！」

俺がれいの話の途中で大声を出したからか、れいがビクツとした。

「……、すまん」

「い、いえ、き、気にしないでください。今回は精霊を与えられません、ヒントなら教えられます。知りたいですか？」

「お、教えてくれるのか？」

「もちろんです。……私はそんな存在になってしまいましたから」

「ん、どうかしたか？」

「い、いえ、何でもありませんよ?!ヒントですが、“力ある言葉”の例外

です」

「はあ!?!あれって、例外あったのか!?!」

「は、はい。あの……少し離れて貰ってもいいですか?」

「あ、ああ、すまん」

無意識のうちにれいに詰め寄ってたらしく、言われるまで気付いていなかった。俺は、れいから離れると、

「んで、その例外って何なんだ、一体?」

「普段から、力を使う際には制限がかけられているんですけど、それを外して貰います」

「制限なんてあったんだ……。どうやって外すんだ?」

「えつとですね、いくつかの条件を満たして貰う必要があります。一つ目は、相手の攻撃を一回以上受けることで、二つ目は、相手より自分が弱いと自覚しながらも抗う気持ちを持つことで、三つ目は、一人で闘うことです。それらを満たしたとき、精霊を扱う武器が光りますので、`リミッターパージ`と言ってください。もちろん、今の優斗なら使えますが」

「了解つと、んじや、とつととあいつを「待ってください!」と、どうしたんだ、れい?」

俺が行こうとすると、れいが引き留めてきた。

「今更ですが、その籠手を何故使えるのですか?」

「ほんとに、今更だな、それ。使えるも何も、初めからだぜ?」

「それはそうですね、でも、それでも……」

「それでも?」

「その籠手は、ここにあつてはいけないんです!それは、この世界から転移させた物なんですから!」

「れい、それってどういうことなんだ?冗談だよな?」

「いえ、本当です、優斗。私の時にスロットが複数あつた装備を持っていたのは、私を含めて二人だけでした。私はまだ持っています、もう一つ——今優斗の使っているその籠手は別世界へ転移させたはずなんです!」

「そういや、こっち側に来る前に何か見たような……」

「そうですか……優斗は選ばれてしまったみたいですね、その籠手に」
「それは、どういう……」

ことだ、と言う前に意識が遠のいた。

「優斗、あなたは必ず最後まで残ります。そして……」
そこまでしか聞けなかった。

意識が戻ると、やはり何にも変わっていないままだった。

「ごっからが本番だぜ、ヘルフレイズ！」

「ほう、その体たらくでまだ闘うと言うのか？」

「ああ、行くぞ、シルフ！リミッターパージ！」

そういつた瞬間、俺の周囲に凍てつくような風が吹き始めた。

（何故、使えるのですか?!これは王しか知らないはず……まさか）

（そのまさかだよ。さっさと終わらすぞ!）

「この力は、そうか!王よ、貴様か!こやつの中の違和感は!」

「ごちやごちやうるせえな!これ以上は時間をかけられねえから次で
終わらせるぞ!」

「フハハハハ、よかろう!来るがよい!」

「ああ、行くぜ!ニブルヘイム!」「インフェルノ!」

俺とヘルフレイズの攻撃がぶつかり、辺りが白いもやに包まれた。

しばらくしてもやが晴れると、ヘルフレイズがいなくて、ヘルフレイズのいた場所に赤い石が落ちていた。

「か、勝てたのか?リミッターオン(そういや、今回は契約とかやんなくていいのか……)」

と呟きながら石の近くへ行き拾うと、

（ねえ、聞こえてる?）

（……誰だ?）

（ヘルフレイズだよ!）

（ほんとにそうなのか?キャラが違いすぎるんだが……）

（だって、周りからちよつとでも怖く見られて恐れられたいじゃん!）

（そんなものなのか?）

(そんなものなの！それよりも、早く帰りたいんじゃないの？)

(そうだな。それじゃ、帰るか)

(うん！)(はい！)

そう思念で話してから来た道に戻っていった。

剣君が入っていった部屋で何か爆発音が聞こえてから数分後、剣君が赤い石を持って出てきた。私は剣君に駆け寄ると、

「剣君、大丈夫なの?!その手に持つてる石ってもしかして…」

「ああ、ヘルフレイズのだよ。俺はとりあえず動けるし、大丈夫だな、うん。もう、ここでの用はねえし、早く帰ろうぜ！」

「うん！ねえ、そういえばさ、フィアは来なかったけど、外で何をしてるの?」

「ああ、とりあえず、見たらわかるさ。先行つとくけど、道間違えんなよ」

そう言うと、剣君はさっさと行ってしまった。私は慌ててその後ろ姿を、

「ま、待ってよ、剣君！」

と言って追いかけていった。

出口が近づくにつれて、外の様子のはつきりと見えてきた。

「おーい、フィア…ってその人たち誰?!」

「おお、二人とも戻ったか。その様子じゃと、何とかヘルフレイズの力は手に入ったようじゃの」

「おう。んで、そいつらが俺たちをつけてたのか？」

「そのようじゃよ。どうやら、土の精霊使いの差し金らしいぞ」

「ちよ、ちよつと待って!?!つけられてたってどういうこと?」

「そのままじゃよ、ティナ。優斗の周辺を調べとつたんじやと。此奴らが馬鹿なおかげで訊きたかったことは全部訊けたわ」

「みたいだな。連れてく意味もなくなったし、面倒だから、ここで解放しとくか?」

「剣君…そこは面倒って言ったら駄目じゃないかな…?」

「いや、テイナ、こっちの情報は与えてねえんだ、いいよな、ファイア？」
「そうじゃな。もう放って帰るかの」

「うくん…、何がいいのか分からないけど、まあ、いいよね！早く帰ろっか！」

テイナは納得しきつてなさそうだったが渋々という感じで俺とファイアが無理に納得させて、そのまま三人で帰ることにした。

翌日、俺とティナとフィアは俺の家に集まっていた。

「ねえ、ねえ、これからどうしよつか」

「そうじゃな……当分はこちらに攻めてくる国もないじやろうから、もう少しこちらの軍を強化しておきたいところじゃが……」

「ん？なんか問題でもあるのか？」

「その、あれじゃ、資金が……。税は変えたくないしの……」

「この国って、ほかよりも税が軽いつて噂なんだよ」

「へえ、そうだったんだな。…他の国の大会かなんかに出て賞金を貰うってのが手っ取り早いかな」

「そうじゃが……この国の者でそんな大会に招待されるようなのがいないじゃよ」

「そうだったんだね」

「どうしたも『剣さーん、お手紙でーす！』ったく、なんだよ」

と、毒づきながら手紙を受け取りにいった。戻ってきて毒づきながら、

「たく、なんだよ。すまん、ちよつと先に開けさせて貰うな」

「いいよ(ぞ)」

「おう。どれどれ……こりや、タイミング良すぎだろ。まあ、これでなんとかなるかもな」

「どうしたの、剣君。その手紙になんて書いてたの？」

「ほら、見てみるよ」

と言つてとりあえずフィアに渡して、見るように言った。

「どれどれ……土の精霊使いから……って、なんでなんじゃ?!」

「あの人たちじゃないかな？」

「そうだろうな。ノーランドで開催される豊穰祭への招待状と、その豊穰祭の余興とする精霊使いだけのバトルーナメントへの参加状だ。恐らく、全員集まるだろうから、今誰が一番強い精霊使いかわかるな。しかも、賞金もそこそこに出るらしいから一石二鳥だな」

「そうじゃが、優斗はいいのか？」

「ああ、ちょうど腕試しもしたかったしな」

「そうだったんだ、それじゃ、行こ？」

「やはり、ティナも付いてくるんじゃない」

「当たり前だよ！だってお祭りだよ？そんな楽しいこと行かないって選択肢なんてないよ！」

「ワシはゲストで呼ばれとるし、3人で行くかの」

と、いうことで3人で豊穰祭に行くことになったのだ。

1週間後、俺たちはノーランドの中心街に着いた。

「へえ、ここがノーランドの中心街か。ちゃんとした街なんだな。来るまでの道中はほとんどが森だったり、畑だったりしたから街も自然が多い物かと思ったんだが、建物も結構あるんだな」

と呟くと、

「あたりまえじゃろ。確かに、ここ以外はほとんどが自然じゃよ。毎年豊穰祭をするんじゃない、街にちゃんとした宿泊施設とかがなかったら駄目じゃろ」

とフィアに言われた。そして、

「さてと、ここに留まってるのも通行の邪魔になるじゃろうから、もうそろそろ移動せんかの？」

「はい」

「ん。案内してくんねえか？後で俺だけ迷うとか嫌だから」

「そうじゃな。それじゃ、はぐれないようにちゃんといってくるようにするんじゃないぞ？」

「はい」

俺たちは賑わっている街へ繰り出した。

数時間後

「「疲れた！」」

俺とティナが声をそろえていった。

「ぬしら…早すぎるぞ。あと何日はこっちにいとかんと駄目んじゃないぞ？」

「だって、面白い物が多くて〜…」

「それは最もじゃが、その調子じゃもたんどぞ？」

「ティナ、ファイアの言うとおりだぞ？」

俺がファイアに便状すると、

「優斗（剣君）のセリフじゃないじゃろ（ないでしょ）！！」

2人にそろって言われた。

「なんでだ？」

「だって、剣君はこっちに来てから初めてのお祭りでしょ？ちやんと楽しもうよ！」

「ティナの言うとおりじゃな」

「そ、そんなものか？」

「『そうじゃよ（そうだよ）！！』」

「お、おう」

ファイアとティナの説得で俺も祭りを楽しむことになった。

それからしばらく三人で歩いておると、優斗が、

「……なあ、ファイア、俺の集場所ってどこなんだ？」

と訊いてきた。

「うむ…この付近じゃったはずじゃが。急にどうしたんじや？」

「いや、もうそろそろ集合時間だったはずだからさ。」

「そっか。終わったらすぐ宿に行ってね？」

「ああ、わかった。多分疲れるだろうからな。俺は行くけど、ふたりは楽しんどけよー」

と言って、優斗は人混みに消えていった。すると、

「ねえねえ、ファイア」

「何じゃ？」

「これからどうしよっか」

と、聞いてきた。恐らくティナも優斗がいないからつまらんのじやろ。

「祭りは始まったばかりじゃし、今日全部回る必要もないじゃろ」
「！それじゃあ」

「うむ。先に宿に戻って優斗の帰りでも待つとするかの」
「うん！」

ティナも賛成してくれたから、宿へ向かって優斗を待つことになった。

「多分ここなんだろうけど…普通の料亭じゃねえか！」

フィアに言われた場所に来てみたものの…と考えていると、

「あんたが剣優斗であつてるか？」

と声をかけられた。

「あ、ああ、そうだが。お前は「ほら、早く行くよ！もうそろそろ顔合わせ始まるからね！」つておい、話を聞け！」

「ほらほら、行くよ〜」

と見ず知らずの女の子にいきなり腕を引っ張られ、拒否する間もな
いまま料亭に入った。そのまま、ある部屋へ連れて行かれると、そこ
にはすでに四人いて、

「遅い！」

と口をそろえて言われた。女の子が、

「ごめん、ごめん。さてと、これで全員集まったし、始めよつか、
楽しい会食を！」

と宣言した。

「……は？」

俺はあまりにも急だったから、そう言ってしまった。

「えっと、どういうことだ？」

と、俺を連れてきた女の子に問いかけると、

「ああ、流石に急だったね。これからバトルーナメントのルールを
決めたり、交流を兼ねてお食事会ってことだよ」

「は、はあ…」

俺はとりあえず相づちを打った。

「さてと、新入りもいることだし、とりあえず、自己紹介をしようか。
ボクはクラウス、地の精霊使いだよ」

と、女の子ークラウスが言うのと、

「次は私が。私はディーナ、水の精霊使いですわ」

「…シエイド。影の精霊使い」

「ワシヤ、ウルフ。岩の精霊使いじゃ」

「ほ、僕はフォル。木の精霊使いです」

と他の精霊使いも簡単な自己紹介をした。

「最後になったが、俺は剣優斗。風のせいれ「違うでしょ、剣優斗。ヘルフレイズもいるでしょ？」な、なんでって、あいつらに探られてたんだっけ」

「そうだよ。ほら、さつきと正直に言う！皆聞きたそうだから」
誤魔化そうと思っていたが、そううまくもいかないらしい。

「つたく、分かったよ。改めて、風と炎の精霊使いだ」

と言って少し間を置いて、

「「：は？」」

と俺とクラウス以外の精霊使いの声がハモった。

「ほらほら、皆、闘う機会を楽しみにしようよ、ね？剣優斗♪」
とからかうような笑みでそう言った。

皆が落ち着いてきた頃に料理が来たので、それを食べながらバトルトーナメントのルール説明をしてその日は解散となった。簡単に説明すると、明後日と明後日の二日間に開催され、明後日は総当たり、明後日は勝ち星の多い2人で決勝をするようだ。動けなくなった方が降参したら負けだそうだ。

楽しくなりそうだなーと思いつつながら宿へ戻っていった。宿に着くと、

「「あ、お帰り！」」

と、ティナとファイアが出迎えてくれた。

「ただいま、二人とも。まだ寝てなかったんだな」

「うん。剣君が戻ってくるの待ってたんだ。明日からの予定決めたいからさ。」

「そっか。遅くなってごめん？」

「いや、いいのじゃ。それで、予定の方はどうなのじゃ？」
と訊いてきた。

「明後日と明後日は無理だけど、それ以外の日は大丈夫だな」

「そっか。なら、まだ行ってないところ一緒に周ろ？」

「ああ、いいぜ？」

「やった!!」

「俺は風呂入るから先寝といてもいいぞ？」

「わかった。おやすみ、優斗（剣君）」

「ああ、おやすみ。」

そう言っつて俺は浴場へ、ティナとフィアは寝室へ向かった。

風呂から出て、寝室へ行き、ベッドに入った。しばらくこの先のこと、特に精霊王はどうやって決められるのか考えていた。だが、いくら考えても無駄だなと考えるのを止めた。それから少しボーツとしてから眠りについた。

翌日俺たちは昨日行けていなかったところへ行ったり、色んな物を見て回ったりしてお祭りを楽しんだ。

—そして、

「ただいまより、余興である精霊使いだけのバトルーナメントを開催します!!」

「!!」「!!」「!!」「!!」「!!」「!!」

バトルーナメントが始まった。開催宣言が行われている頃控室では、

「さてと、最初の組み合わせだけど、まずはボクとフォル、ディーナとシェイド、ウルフと剣優斗って勝手に決めちゃったけど、良かったかな? : 別に反対するわけじゃなさそうだからこのままいくよ。その後は全員がちゃんと当たるように自由に決めてね〜」

「「おうー!」「はい!」「了解」

と言っつと、

「もう間もなく第1回戦の開始となります。出場する人は集まってください」

と、アナウンスが流れた。

「さて、そろそろ始まるけど、皆特別席で見とね〜」

と言っつてクラウスとフォルが控室を出た。それから少ししてから

残った人全員で控室を後にして特別席に向かった。

そして、その日の夜、

「はあく〜、疲れた。キツすぎるって…」

かろうじて決勝に進めた俺は宿の机に突っ伏して、その横ではファイアとティナが嬉しそうにしながらも少し心配そうにしている。

「お疲れ様、剣君！決勝に進むなんてすごいね！」

「そうじゃ、他も中々手練れの様じゃったからの。決勝に進めただけでも誇っても良いと思うぞ？」

「まあ、そうなんだろうが、相手がな…」

俺が懸念しているのは、対戦相手のクラウドだ。あいつとは今日闘った限りでは勝てない、などと考えていると、

「その通りじゃな。どう闘うつもりなのじゃ？相性最悪じゃろ？それに、あの精霊が作っている鎧はどうするのじゃ？」

「そこなんだよな…打つ手がないわけじゃねえけど、実際にできるかどうかわかんねえんだよな」

「そっか…明日、頑張つてね、剣君」

「頑張るのじゃぞ、優斗」

「ああ、できるだけ抗ってみるよ。明日も忙しいだろうし、もう寝るわ。2人も早めに寝るんだぞ？」

「うん！おやすみ、剣君（優斗）」

「おやすみ、2人とも」

そう言っただ俺は寢室に行つてベッドに潜ると、すぐ眠りについた。

そして、翌日、

「ただいまより、バトルトーナメント決勝戦を行いたいと思います！
とりあえず、選手入場です！最初に入場するのは、我らが精霊使い、ク
ラウスだ！『ワアアアアアアア!!』続いて、異世界（？）からの新
参者、風と炎、まさに異色の精霊使い、剣優斗だ！『剣君（優斗）ガ
ンバレー！』……さて、選手両者が入場しました。これより、決勝戦
を開始したいと思います。準備はよろしいですね？…それでは、試合
開始!!」

「ノーム、クリエイト。さくて、剣優斗、このままじゃ面白くないだろ
うし、君にハンデをあげよう」

「は？」

「だ・か・ら、ハンデだよ、ハ・ン・デ。そうだな…君がボクの鎧を壊
せるまで攻撃しないってのはどう？」

「なめてるだろ、テメエ」

「そりゃあね、昨日ボクに負けてるからね」

「そんじや、後悔すんじやねえぞ！シルフ、制限解除（リミッターパ
ージ）！」

俺がそう叫ぶと、周囲の気温がすこしずつ下がる。

「え、な、何、これ」

昨日使っていないなかったからか、クラウスは戸惑っているようだ。

「これが俺の本当の力だ、ボケが。さあ、いくぜ、ブリザード！」

「そ、それくらいじゃ壊せないよ？」

どうやら、大技が来ると思っていたらしく、少し余裕が戻って来た
ようだ。

「そう言っられるのも今だけだな。これで終わりだ、ヘルフレイズ、
フレイム！」

「だから、それくらいじゃ…」

とクラウスが言っていると、急にクラウスの鎧が壊れ始めた。

(つて、オイオイ……これ、どうやって止めんだ?)

俺はクラウドをいなしながら訊いた。

(そうですね…精霊(ノーム)をあの方から離れたらいいのでは?)

(それもそうだな。でも、お前たちだけじゃ足止めできねえしどうすんだ?)

(なら、ウンディーネの力を使えばいいじゃん。ここにいるし)

「それもそうだな。おい、ディーナ!」

「な、なんですか!?!」

俺は変わらずクラウドの攻撃をいなしながらだったから、驚いたんだろうなと言う声でディーナが答えた。

「ウンディーネを貸せ!」

「な、何でですか?!あなたに貸さずとも、私が『つべこべ言わずに、さつさとしろ!』は、はい!」

そういうと、ディーナは青い石を投げてきた。クラウドと距離を取ってからそれを受け取ると、

「あんがとな!それじゃ、力を借りるぞ、ウンディーネ!」

(扱いが荒いですね、剣さん。まあ、今回だけですよ)

(ああ、すまん。さつさと終わらすぞ!)

了承を取ってから、

「ウンディーネ、制限解除(リミッターパージ)!」

と叫んだ。すると、シルフの時とは比べものにならないくらいの冷気が吹き荒れた。

「さて、と。ウンディーネ、アイシクルロック!」

すると、クラウドの足下から凍っていき、間もなくクラウドは動きを止めた。そして、俺は、

「お前は一回精霊なしからやり直せ、馬鹿が」

と言っただけでクラウドから黄色の石を外した。

目を覚ますと、いつの間にかベッドに横になっていた。

「あ、あれボクは……!!そういうえば試合は——」

「終わったぞ、お前の負けでな」

横にいた剣優斗がそう言った。

「そっか、ボクは負けたんだね。こんな事初めてだよ」

「今まで負けなしかつたんだろうから当たり前だろ」

「それもそうだね。……ありがと、助けてくれて」

「あれ以上暴走されたらあいつらが傷ついちまうからだ。それ以上でもそれ以下でもねえ」

「そっか。そんなに大切なんだね。……ボクのノーム、君に使って欲しいんだけど、ダメかな？」

「今、なんつった？」

思わず聞き返してしまった。

「だから、君がこれからノームを使って、って言ったんだよ。君が持ったままなんですよ？」

「まあ、そうだが……」

「なら、そのまま持って行って。おねがい」

と頭を下げられた。

「わ、わかった、わかったから。も、もう大丈夫そうだし、行くわ。じゃあな、クラウドス」

「うん、また」

そう言って、俺はクラウドスのいる部屋から出た。

それから俺はティナとファイアと合流し、ユークリウッドに帰るのだった。

豊穰祭からの帰り道ファイアが、

「優斗よ、これからどうするつもりなのじゃ？」

と訊いてきた。

「どうするって？」

「だって、剣君は最有力候補のクラウドスに勝ったし、精霊も3人いるでしょ？ほとんど剣君で決まりじゃん」

「ん？…あ、でもそうなるのか。そういや、選定まであと何日なんだ？」

「20日じゃよ。自分が関係してることなのじゃからちやんと覚えて
おいたらどうなのじゃ？」

「はははは……すまん、すまん」

それからは他愛の無い話を宿に着くまでしていた。

その夜、剣君が寝てからファイアが、

「の、のう、ティナ」

と躊躇いがちに話しかけてきたから、

「どうしたの?」

と聞き返した。ファイアはなにか決心したようにこつちをまつすぐ見て、

「優斗への気持ちはどうするつもりなのじゃ?」

と言ってきた。

「へ?……え、ちよ、な、なんでそんなこと聞くの!」

「いや、優斗は恐らくこのまま精霊王になるじやろ。その前にその、こ、告白しないのか?」

「…できればしたいよ。もし、告白してOK貰えたとして、もうほとんど一緒に居られる時間が無いんだよ!?!ファイアは嫌じゃ無いの!?!」

「それもそうじゃが、言わんと後悔する方がもつと嫌なのじゃ」

そこで会話が途切れて静寂が訪れた。しばらくしてファイアが、

「…ユークリウッドに帰ってから順番に優斗と二人きりで出かけるようにせんか?その時に告白するかどうか決めんか?2人だけで優斗との思い出作りたいじやろ?」

と、提案してきた。

「…わかった。でも、ファイアが言い出しっぺなんだからファイアが先だよ?」

「う、うむ、わかったのじゃ。それじゃ、寝るとするかの。おやすみ、ティナ」

「うん。おやすみ、ファイア。」

そして、私たちはそれぞれの部屋に戻って眠りについた。

それから数日して、ユークリウッドに着いた。なんだかファイアとティナの様子がおかしかったが気にするなと言われたので気にしないようにしていた。

そして翌日の昼、俺が家でゆっくりしていると、
「優斗、居るか！」

といきなりフィアが入ってきた。そして、居間にいる俺を見つけると腕をつかんで、

「一緒に行きたいところがあるから、ついてこい！」

と言って立たせて連れて行こうとするから、

「ちよ、ちよつと待て、フィア！2分、2分だけ準備するのに時間くれ
！」

「そ、それもそうじゃな。外で待つとるからの」

そう言っ外に出て行った。俺はすぐに準備をして家を出ると、

「お、来たか優斗！それじゃ、行くぞー！」

「あ、ちよい待てー！」

俺が家から出てくるとすぐにフィアが歩き出したので、ついて行く
しかできなかつた。

数分後、近くの山の麓に来ていた。

「さて、日が暮れるまでには登り切るぞー！」

「マジかよ…まあ、いいか。ところで、フィアは俺をどこに連れて行き
たいんだ？」

「登り切るまでのお楽しみじゃ。ほら、行くぞー！」

「わかつたよ」

結局目的を教えてくれないまま山登りが始まった。

そして数時間後、日暮れの少し前に頂上に着いた。

「スゲー、眺めだな！連れてきたかつたのってここなのか？」

「いや、もう少し先じゃ」

「そうなのか？」

「うむ。こつちじゃ」

そう言っ俺の手を引いて茂みへと入って行く。

「今から行くところは、ワシの好きな人と一緒に行きたいと思つた
ところなんじゃ」

「…は？それって」

そこまで言うのと、視界が一気に開け、辺り一面の金木犀が目飛び込んできた。

「す、スゲー…てか、さっきのって」

「ワシは優斗のことが好きじゃ」

ファイアは俺の前に出て、頬を赤くしながらそう告げてきた。

「お、俺は」

「へ、返事はまだよい！できれば早めが良いが、選定の日までにして欲しい。ただの、もう一人告白するかもしれない。…それを踏まえたうえで返事が欲しいのじゃ」

「わ、わかった、考えとくよ。ここに連れてきてくれてありがとうな、ファイア」

「う、うむ。どういたしましてなのじゃ」

それからしばらく横に並んでその景色を眺めてから山を下りた。ファイアを家に送って自分の家に帰った。その夜、

「まさか、ファイアが俺のこと好きだったなんてな…もう一人ってティナじゃ…まあ、そんな訳ねえよな」

と呟いてそのまま眠りに落ちた。

そして翌日の昼、俺が昨日みたいに家でゆっくりしていると、コンコンとドアがノックされた。

「はいはい、誰ですか、ってティナじゃねえか、どうしたんだ。」

「こ、こんにちは剣君。い、一緒に行きたいところがあるんだけど、時間…大丈夫？」

「いいぞ。それじゃ、準備するからちよつと待っていてくれ」

「うん！」

俺はデジャビュを感じながらも家の中に戻って準備をして外に出るから、

「いったいどこに行くつもりなんだ？」

と訊くと、

「そ、それは行ってからの楽しみね。ほら、行く？」

と言って俺の腕を引っ張って歩き出したので、

「ちよ、自分で歩くから引つ張るな！」
と行ってついて行くしか無かった。

それから十数分後、俺たちは花畑に来ていた。

「ん？ここって…」

「そうだよ、私が初めて剣君に会った場所。覚えてる？」

「ああ。俺が丁度こっちに来た時だったな。あのときは本当に助かった」

「どういたしまして」

「……」

それから2人の間に沈黙が訪れた。ティナは少しもじもじしていたが、やがてなにか決心したように口を開いた。

「ね、ねえ、昨日フィアに告白された？」

「!?いいいきなりなんだよ!」

「豊穰祭からの帰りにね、フィアと話したんだ。順番に優斗と出かけようって、その時に告白するかどうかはその時に決めるって」

「そうだったのか」

「うん」

「…」

「わ、私ね、初めは告白しようとか全く考えてなかったの。どうしたって時間がほとんど無いから。でも、でもね、フィアに言われて気付いたの。言わないままじゃ嫌だって。だから言うね。私も剣君が好きです!」

と俺をまっすぐに見つめて伝えてきた。そして、

「へ、返事は今日じゃ無くて良いけど、できるだけ早くして欲しいな」

「………明日の昼、伝えたいことがあるからフィアの家を集まってくれねえか?」

「それって…」

「頼む」

「…わかった」

「それじゃ、遅くなってもあれだし、帰るか?」

「う、うん」

俺たちはそうして花畑を後にした。ティナを家に送って俺も自分の家に帰った。

そして翌日、俺はファイアの家の前に居た。

「スーハー……よし！」

深呼吸をしてからドアをノックして、

「入るぞ、ファイア、ティナ」

「ど、どうぞ（なのじゃ）」

中に入って居間へ向かった。そこには緊張した面持ちの2人が待っていた。ファイアは、

「は、話とはなんじゃ？」

と恐る恐る訊いてきた。俺は、

「2人の告白への返事だよ」

とビクツと体を震わせて目を閉じてしまった。

「俺には2人のどっちかかって選べねえわ。2人の気持ち、スゲー嬉しかったし、俺も2人が思ってくれてるのと同じくらい2人のことが好きだから！」

と告げると、2人は目を開けてきよとんとすると、

「アハハハ!!」

と笑い出した。俺は急に恥ずかしくなってきた、

「な、何笑ってんだよ!？」

と少し強めに言ってしまった。

「だ、だって、剣君らしいんだもん」

「そ、その通りじゃな。どっちかを選べんのなら、どっちも選べば良いんじゃないよ、優斗」

と、少し笑いながら言ってきた。

「いやいや、そんなことして良いのか？」

「確か、本人さえ良ければ良いよね？」

「うむ！」

「と言うことだけど、剣君はどうなの？」

と、ふたりが期待の籠もった目で見てきた。俺は、

「それじゃ、フィア、ティナ、俺と付き合ってください！」

「はい！」

そうして俺は2人と付き合うことになった。それから選定の日
で3人で一緒に楽しく過ごした。

最終回

そしていよいよ選定の日が来た。

「そういや、どうやって選定されるんだ？」

「精霊王がどこかに候補者を集めてする…じゃなかった？」

「そうなのか。それにしても、どこかって……」

（それなら知ってますよ、優斗殿）

（そうだね）

（そうだよ。俺なら、はつきりとわかるぜー）

「…どうやら、グランディウスがわかるらしい。2人は付いてくるか？」

「もちろん！少しでも長く一緒に居たいもん！」

「わかったよ。それじゃ、行くか！」

「うん！」

そうして俺たちは選定の場へ向かった。

案内された場所に着くと、俺以外の精霊使いが集まっていた。

「俺が最後なんだな。さて、何が起こるんだろうな」

と呟くと、辺り一面が光り体がフワツとしたと思っただけなら知らない場所に飛ばされていた。

「どこどこだ？」

「選定の祭壇です、優斗」

聞いたことのある声が後ろから聞こえたから振り向くと、そこにはれいがいた。

「久しぶりだな、れい」

「ええ、そうですね、優斗。精霊は3人ですか、これなら…」

「あの、あなたは誰ですか？」

俺がれいに聞き返そうとしたところでディーナがれいに質問していた。

「まだきちんとは言っていませんでしたね。私は92代目の精霊王です。今回の選定ですが、既に終わっています」

「「「「……づえ?」「」」」」

「そりやどういふことだ?」

「れいの言ったことの衝撃さに俺以外が言葉を失っていた。

「言葉通りです、優斗。93代精霊王は優斗、あなたです」

「「「「えええええー!!!」「」」」」

今度は全員が絶叫した。

それからしばらくして全員が落ち着いたら頃、

「優斗、あなたは精霊王になりたいですか?」

と訊いてきた。

「ならなくても良いのか!」

「はい。その籠手に7人の精霊を使役していたなら無理ですが、今ならまだ間に合います」

「お、俺は……」

そこで言葉を切ると、後ろに居る2人を見た。離れないでと思わせるような眼差しを向けてくる。そんな2人に笑いかけて傍に行つてから、

「俺は精霊王にならない。まだ大切な人と一緒に居たいからな」

「:わかりました。では、あなた達は元居た場所に戻します」

「ありがとうな、れい。それと、あとは残つたお前らで勝手にしてくれよ」

「さようなら、優斗」

その言葉を最後に視界が真っ白になり、気付くと元居た場所に立っていた。

「せ、優斗ー」

「き、剣君ー」

ファイアとティナは抱きついて泣き始めてしまった。

「泣くなよ2人とも。帰ろうぜ?」

「うん!」

そうして精霊王を巡る俺の闘いは終わり、俺はファイアとティナと最

期まで一緒に楽しく過ごした。ちなみに、次の精霊王にはディーナになつたらしい。

図書委員の綴る恋物語

1

パラ：パラ：

放課後の図書室、横で彼女―桜明日花（さくらあすか）が本のページをめくる音と時計が時を刻む音だけが響いている。そして、

「もうそろそろ閉める時間ですね。準備しましょうか」

本を閉じてそう言う。

「そうだね。もう誰も来ないだろうし」

僕―谷村葵（たにむらあおい）はそう言って彼女と一緒に図書館を閉める準備を進める。

そして、廊下に出て図書室を閉めると、

「今日はお疲れ様でした。それではまた」

「はい。また」

そう言っただけで解散する。

これが僕と彼女の日常だ。クラスも違うし、そんなに話すこともない。でも、僕は彼女について、ある〝秘密〟を知っている。

それは――

「みんなー、今日は来てくれてありがとう！楽しんでいってね！」

「うおおおおおー！ー！ー！」

「~~~~~♪~~~~~♪」

スマホの中で歌っている女の子―桜花（おうか）。それが図書委員で同じ日の図書委員当番の桜だということだ。もちろん僕も偶然知ったことだし、誰にも言っていない。どうせ誰も信じないだろうから。

数日前、

「やっぱり、あの声どこかで聞いたことある気がするんだけど、どこ

だったかな…」

朝、学校へ行く道でそんなことを呟いていた。あの声というのは、最近になって人気が出てきたネットアイドルの「桜花」のことで、どうやら地声らしく、最近聞いた声に似ていたので気になって仕方なかったのだ。

「んー、でも思い出せないし気にすることでもないか。早く教室に行って本でも読も」

考えていたことを振り払うように頭を振って学校に向かう足を少し早くした。

そしてその日の放課後、図書室へ一番乗りした僕はカウンターの裏に回って椅子に座ると、持ってきていた本を鞆から取り出して読み始める。僕が本を読み始めて数分したぐらいだろうか、

「谷村くん、今日も早いですね」

と声をかけられた。本から顔を上げると、桜さんが横に座ろうとしている所だった。

「この居心地がいいから。居れるならならずと居たいくらい。そういう桜さんも早い方じゃないか？」

「私も、あなたと同じようにここが一番落ち着きますから」

そう言つて座ると、僕と同じように鞆から本を出して読み始めた。それを見届けると僕も本に視線を戻す、が、

（ん？今の声どこかで……）

何故か桜さんの声に引つかかりを覚え、ちよつと記憶を辿る。

（んー、あれ、そういえば桜花みたいなの……。いやいや、まさか）

何故か桜花のことが頭によぎってしまった、確認するためにスマホを取り出すと、イヤホンを挿して桜花の動画を流す。

「——ッ!!」

何をし始めたのか気になったのか分からないけど、桜さんがこちらの画面を覗き込んで、ビクつと体を震わせた様な気がしたけど、とりあえず無視だ。そして、動画を見終えてスマホとイヤホンを片付けると小声で、

「桜さん、当番が終わってから少し時間ある？」

「は、はい……」

「わかった。それじゃ、今は当番の方をきちんとしよう」

「はい」

それで会話が終わり、本を借りたい、返したい人が来たら対応して、それ以外は静かに本を読む時間が続いた。

今日も図書室を閉める時間になりました。私と谷村くんは閉館の準備をして、お互いの荷物を片付けて廊下に出ました。いつもならそこで解散しているのですが、

「さっきの話なんだけど」

と当番中の話を切り出されました。

「はい」

「流石に学校で話して誰かに聞かれたら困るだろうし、時間が大丈夫ならどこかに寄っていかない?」

「はい。お気遣いありがとうございます」

「それじゃ、行こうか」

そう言って歩いていく彼の後をついて行きました。

学校を出て数分、ある喫茶店に入りました。

「いらつしや——おや、葵くんじゃないか。今日はシフトじゃないはずだけど」

「こんにちは。今日はお客としてきたんだ。奥のテーブル使ってもいい?」

「うん、いいよ。注文が決まったら呼びなさい」

「ありがとうございます。さ、桜さんこっち」

「は、はい」

どうやら、谷村くんが働いている喫茶店みたいです。同じテーブルに向かい合って座ると、

「とりあえず、何か頼もうか。これ、メニュー」

「ありがとうございます……では、レモンティーにします」

「わかった。伝えてくるからゆつくりしてて」

そう言って彼は席を立つと、カウンターの方向に向かい何かを話し始めました。その様子を見て、一息つくと、

（まさか、こんな身近に「桜花」のことを知ってくれている人がいるとは思いませんでした。まさか、声でバレてしまうとは……。ちやんとボイスチェンジャーを使うべきだったでしょうか……）

私が「桜花」として活動を始めたのは、ほんの1週間前のことです。私が所属している事務所から、

『顔出しできないのに声が綺麗なんだし勿体無いわね。いい機会だし、ネットアイドルとしてデビューしてみない?』

と言われたのがきっかけでした。面白そうだと思い二つ返事で受けた所、すぐにレコーディングが行われ、できたものがその日のうちに動画投稿サイトにアップされました。その日、ネットアイドル「桜花」が誕生したのです。

『歌声が綺麗』

『ボーチェン使っていないんだって』

『素顔一切公開してないらしい謎のアイドル』

と言ったコメントが反響を呼びたった1週間で人気がとても上がったみたいです。

「お待たせ。はい、レモンティー」

と「桜花」になった日を思い返している間に、彼が戻ってきて私の前にレモンティーを自分の前にコーヒー、そして私たちの間にクッキーが置かれました。

「あの、このクッキーは頼んでないのですが……」

「ちよっとお腹すいちゃって…。桜さんも食べてね」

「はあ。ありがとうございます」

谷村くんが椅子に座ると、

「それじゃ、本題に入るよ」

「それじゃ、本題に入るよ」

と言うと、桜さんは体をビクツとさせました。

「桜さんって、ネットアイドルの『桜花』なんだよね?」

「……どうしてそう思ったのですか?」

「どうしてって、声と一緒にだったから」

「それだけですか?」

「うん。(本当は別の理由もあるんだけど……まあ、とりあえずいいかな)」

「……」

「……」

「……えつと、それだけですか?」

とビックリした顔でじつと見てくる。

「え?あー、うん。確認したかっただけ。誰にも言わないし、そこは安心して」

「は、はあ……」

「もしかして、秘密にしてる代わりに何か要求してくると思ってた?」「はい。お約束なのかなと。それで、何もありませんか?」

「んー……、うん。それじゃ、来週の金曜、図書委員当番が終わってからちよつと付き合ってもらおうかな」

スマホの予定欄を見て“顔合わせ”と書かれている日を見て、そう言った。

「来週の金曜ですか……。すみませんその日は用事が——」

「その辺はなんとかなると思う。というか、多分同じだろうから」

「え?それってどういう——」

「いいから。それじゃ、来週の金曜図書委員当番の後ね。ちよつとこの後用事あるから、先に帰るね。ゆつくりしていいから」

「あ、お会計は」

「急に言っただし、払っとくよ。それじゃあ」

そう言っただし伝票を持って立つと、そのまま会計をして店を出る。そして歩きながらスマホを出して、ある番号にかける。

P r r r r ……

「どうも、ご無沙汰してます、葵です」

『こんな時間に電話って珍しいわね。どうしたの?』

「来週の金曜なんですけど、彼女と一緒にいきますから」

『あら、気づいたの。わかったわ。要件はそれだけ?』

「あ、最後に。新しいのその時に持って行きます」

『わかったわ。それじゃ』

「ええ、では」

そうして電話を切ると、

「さて、頑張らないと」

そう呟いて家へと帰った。

それ以降、何かイベントがあることもなく金曜日を迎えた。放課後、当番が終わりいつも通り図書室を閉め学校を出た。

「それじゃ、行こうか」

「先週も言ったのですが、用事が…」

「だから、それに行こうかってこと。ほら、置いてくよ」

「え、ちよつと！」

先週の約束（一方的かもしれないけど）通り、ある場所へ向かっている。

しばらく歩いて、

「着いたよ」

「え？でも、ここって私の」

「うん。桜さんの事務所」

そう、桜さんが所属してる事務所に着いた。僕がそのまま中に入ると、桜さんも少し遅れて入った。

「あら、いらつしやい。待ってたわ」

「ご無沙汰してます、社長。これ、次のデータです。確認お願いします」

「はいはい。それじゃ、聞かせてもらいましょうか。二人とも、行きましょう」

「はい」

「……………」

「桜さん、行くよ」

「は、はいー！」

そうして僕たちは社長についてレコーディング室に入った。社長が中にいた人に僕が渡したUSBを渡すと中に入っていた曲を流してくれました。すると、桜さんが、

「あの、これって……………」

と社長に聞きました。

「あら？予定に顔合わせって入れてなかったかしら？」

「確かに入ってましたが…。え？」

「お互いに自己紹介したんじゃないの？」

とこちらに聞いてくる。

「あ、してないですね、そういえば。どちらかといえば一方的に気づいたって感じでしたから」

と言いつつ、桜さんの方を向くと、

「コホン。初めまして、って言うのもおかしいかもだけど、作詞・作曲をしているAoiです。よろしく、桜花」

「え、ええええ！」

いつの間にか曲は終わっていて、桜さんの叫び声だけがレコーディング室に響いた。

「つまり、オリジナル曲を提供してくれていたAoiが谷村くんで、今後曲を作るときに一緒にすることになるんですね」

「そういうことね」

「折角その人用にオリジナルの作るんだったら一緒の方がいいもの作れそうだったし」

「ということ。それで、明日花ちゃんはいいい？」

「は、はい。大丈夫ですが……」

「なら、決定ね！とりあえず明日花ちゃんはさっきの曲、レコーディングしないよね」

「わかりました」

あれから私たちは会議室で色々話しています。しばらくして、

「さて、顔合わせをして、曲も渡したし。僕は帰るね。それじゃ」

と言いつつ谷村くんが席を立つと、そのまま部屋を出てしまいました。

「あら、帰っちゃったわね。時間も時間だし今日は解散しましょ。送っていくわ」

「わかりました。ありがとうございます」

そう言いつつ2人で事務所を出ると、社長さんの車に乗ります。そし

て車が動き出すと、

「葵くんのことビツクした？」

「はい。社長さんは知ってたんですか？」

「ええ、もちろん。ホントは顔合わせの時に合わせてビツクリさせちやおつて思ってたのに。2人で一緒に当番してたなんて、こっちが驚いたわよ。……それで、やっていけそう？」

「はい。それに関しては大丈夫です」

「ならよかったわ。もし嫌だなんて言われたらどうしようかしらって悩んでたから」

「そうだったんですね」

「ほら、着いたわよ。月曜にレコーディングするからそれまでに覚えてちょうだいね」

「はい。では、ありがとうございます。おやすみなさい」

「ええ。それじゃあね」

と車を降りた私に言つて車を発進させました。私は家に入るとお風呂に入ってそのままベッドに入って寝ました。